

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第118集

青ノ久保遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

正 誤 表

頁	訂 正 ・ 挿 入	正
1 55	上から7行目 天台寺の古刹… 下から10行目と9行目の間に挿入	天台寺の古刹… 口縁である。文様は胸部上半に限られ、LRの単節斜縄文が施された後、弧状の沈線文が波頂
57	4行目…地文にLRの	地文にLrの
133	表中 大	玢
134	遺物番号247の図版番号	25
137	遺物番号33の備考…内外共黒	内黒
138	遺物番号77の器面調整… ロクロ? ミガキ	?をとる

青ノ久保遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。特に東北縦貫自動車道の建設は、産業経済開発の大動脈として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日の課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道八戸線に関連する遺跡は、安代町から青森県境まで53遺跡があり、二戸市所在の6遺跡については昭和60・61年に野外調査を終了し、発掘調査報告書の作成をすすめてまいりました。

本報告の青ノ久保遺跡は、二戸市南西の丘陵縁部に立地し、昭和61年の発掘調査によって奈良・平安時代の竪穴住居跡等が発見されました。引き続き出土資料の整理をすすめ、ここに調査報告書として発刊するはこびになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、二戸市、二戸市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和62年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸市似鳥字青ノ久保地内に所在する青ノ久保遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道川口・八戸線建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は日本道路公団と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡登録台表の遺跡番号は次のとおりである。
遺跡番号 J E 18-2378 遺跡略号 A K-86
4. 野外調査は、昭和61年4月14日～同年6月30日にわたって実施され、調査面積は2400m²である。
5. 発掘調査の結果、検出された遺構は、縄文時代の住居跡2棟、古代の竪穴住居跡10棟（奈良時代5、平安時代5）、住居跡状遺構1遺構、土坑15基、陥し穴状遺構3基、炭窯跡2基、焼土3遺構である。出土遺物は、縄文土器・土製品、石器、石製品、土師器、須恵器、金属製品、鉄滓、炭化材等である。
6. 調査および本報告書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1の地形図、日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所作成の千分の1の地形図を使用した。
7. 遺跡における土層の色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局・朝日本色彩研究所監修の「新版 標準土色帖」を用いた。
8. 各種鑑定等に当たっては、下記の方々に依頼した。
石 質 鑑 定 佐藤 二郎氏（佐藤地質工學研究所）
火山灰の分析 三辻 利一氏（奈良教育大学教授）
炭化材の材質鑑定 早坂松次郎氏（岩手県木炭協会指導員）
9. 野外調査は、主任文化財専門調査員工藤利幸と文化財専門調査員中村良一が担当した。室内整理は、61年度が工藤利幸と中村良一が、62年度は中村良一が担当した。
10. 本報告書の執筆は中村良一が担当した。
11. 野外調査にあたっては、二戸市教育委員会及び田口庄吉氏をはじめ地元の方々の協力を得た。また室内整理には、浅沼幸子ほか11名の方々の協力を得た。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

序		8. 焼土遺構	68
例言		V 遺構外の出土遺物	71
I 調査に至る経過	1	1. 縄文時代の遺物	71
II 調査方法と室内整理の方法	2	(1) 縄文土器	71
III 遺跡の立地と環境	4	(2) 土製品	94
IV 検出された遺構と遺構内出土遺物	15	(3) 石器	99
1. 縄文時代の住居跡	15	(4) 石製品	117
2. 奈良時代の竪穴住居跡	17	2. 古代の遺物	120
3. 平安時代の竪穴住居跡	32	VI まとめ	122
4. 住居跡状遺構	49	1. 遺構	122
5. 土坑	50	2 遺構外の出土遺物	126
6. 陥し穴状遺構	66	出土遺物一覧表	129
7. 炭窯跡	67		

図版目次

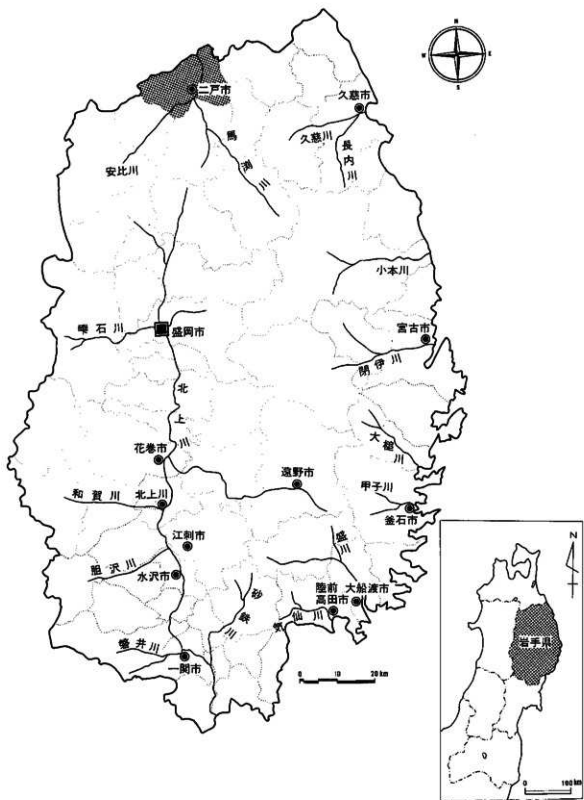
第1図 遺跡の位置と周辺の地形図	11	第16図 AIV02住居跡出土遺物	34
第2図 遺構配置図	13	第17図 BIII01住居跡	36
第3図 C I 01住居跡・C II 04住居跡	16	第18図 BIII01住居跡出土遺物(1)	37
第4図 AIV01住居跡	18	第19図 BIII01住居跡出土遺物(2)	38
第5図 AIV01住居跡出土遺物	19	第20図 C II 01住居跡	41
第6図 BIII02住居跡	21	第21図 C II 01住居跡出土遺物	42
第7図 BIII02住居跡出土遺物	22	第22図 C III 02住居跡	44
第8図 C II 02住居跡	24	第23図 C III 02住居跡出土遺物	45
第9図 C II 02住居跡出土遺物	25	第24図 DIV01住居跡	48
第10図 C II 03住居跡	26	第25図 DIV01住居跡出土遺物	49
第11図 C II 03住居跡出土遺物	27	第26図 BIV01住居跡状遺構	51
第12図 C III 01住居跡	29	第27図 B III 101土坑・B IV 101土坑	
第13図 C III 01住居跡出土遺物(1)	30	D II 101土坑	59
第14図 C III 01住居跡出土遺物(2)	31	第28図 D II 102土坑・D II 103土坑	
第15図 AIV02住居跡	33	D II 104土坑	60

第29図	DⅢ101土坑・DⅢ102土坑 DⅢ103土坑……………	61	第50図	第6群土器(2)……………	91
第30図	DⅢ104土坑・DⅢ105土坑 DⅢ106土坑……………	62	第51図	第6群土器(3)……………	92
第31図	DⅢ107土坑・DⅢ108土坑 DⅢ109土坑……………	63	第52図	第6群土器(4)・第7群土器 ……	93
第32図	土坑内出土遺物 ……	64	第53図	土製品(1)……………	96
第33図	DⅢ104土坑出土遺物……………	65	第54図	土製品(2)……………	97
第34図	陥し穴状遺構 ……	69	第55図	土製品(3)……………	98
第35図	炭窟跡・焼土遺構 ……	70	第56図	石器(1)……………	102
第36図	第1群土器(1)……………	77	第57図	石器(2)……………	103
第37図	第1群土器(2)……………	78	第58図	石器(3)……………	104
第38図	第2群土器(1)……………	79	第59図	石器(4)……………	105
第39図	第2群土器(2)……………	80	第60図	石器(5)……………	106
第40図	第2群土器(3)……………	81	第61図	石器(6)……………	107
第41図	第3群土器(1)……………	82	第62図	石器(7)……………	108
第42図	第3群土器(2)……………	83	第63図	石器(8)……………	109
第43図	第3群土器(3)……………	84	第64図	石器(9)……………	110
第44図	第3群土器(4)・第4群土器(1) ……	85	第65図	石器(10)……………	111
第45図	第4群土器(2)……………	86	第66図	石器(11)……………	112
第46図	第4群土器(3)……………	87	第67図	石器(12)……………	113
第47図	第5群土器(1)……………	88	第68図	石器(13)……………	114
第48図	第5群土器(2)……………	89	第69図	石器(14)……………	115
第49図	第6群土器(1)……………	90	第70図	石器(15)……………	116
			第71図	石製品(1)……………	118
			第72図	石製品(2)……………	119
			第73図	古代の遺物……………	121

写真図 版目次

第1図	遺跡航空写真・近景……………	141	第7図	CⅡ03住居跡……………	147
第2図	基本土層・調査風景……………	142	第8図	CⅢ01住居跡……………	148
第3図	CⅠ01住居跡・CⅡ04住居跡 ……	143	第9図	AⅣ02住居跡……………	149
第4図	AⅣ01住居跡……………	144	第10図	BⅢ01住居跡……………	150
第5図	BⅢ02住居跡……………	145	第11図	CⅡ01住居跡……………	151
第6図	CⅡ02住居跡……………	146	第12図	CⅢ02住居跡……………	152

第13図	DIV01住居跡	153	第39図	縄文土器⑩	179
第14図	BIV01住居跡状遺構	154	第40図	縄文土器⑪	180
第15図	土坑(1)	155	第41図	縄文土器⑫	181
第16図	土坑(2)	156	第42図	縄文土器⑬	182
第17図	土坑(3)	157	第43図	縄文土器⑭	183
第18図	土坑(4)	158	第44図	縄文土器⑮	184
第19図	土坑(5)・炭窯跡	159	第45図	縄文土器⑯	185
第20図	陥し突状遺構	160	第46図	縄文土器⑰	186
第21図	焼土遺構	161	第47図	縄文土器⑱	187
第22図	遺構内出土遺物(1)	162	第48図	土製品(1)	188
第23図	遺構内出土遺物(2)	163	第49図	土製品(2)	189
第24図	遺構内出土遺物(3)	164	第50図	土製品(3)	190
第25図	遺構内出土遺物(4)	165	第51図	石器(1)	191
第26図	遺構内出土遺物(5)	166	第52図	石器(2)	192
第27図	遺構内出土遺物(6)	167	第53図	石器(3)	193
第28図	遺構内出土遺物(7)	168	第54図	石器(4)	194
第29図	遺構内出土遺物(8)	169	第55図	石器(5)	195
第30図	縄文土器(1)	170	第56図	石器(6)	196
第31図	縄文土器(2)	171	第57図	石器(7)	197
第32図	縄文土器(3)	172	第58図	石器(8)	198
第33図	縄文土器(4)	173	第59図	石器(9)	199
第34図	縄文土器(5)	174	第60図	石器⑩	200
第35図	縄文土器(6)	175	第61図	石器⑪	201
第36図	縄文土器(7)	176	第62図	石製品(1)	202
第37図	縄文土器(8)	177	第63図	石製品(2)	203
第38図	縄文土器(9)	178	第64図	古代の遺物	204



岩手県全図

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は二戸郡安代町で青森線と分岐し、浄法寺町、二戸市、一戸町、九戸村、軽米町を経て青森県八戸市に至る延長68kmの高速自動車道である。このうち、本県にかかる第7次及び第8次施行命令区間は54.3kmであり、一戸インターチェンジ以北の第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年までに終了している。

二戸郡安代町から浄法寺町、二戸市、一戸町に至る27.6kmは、昭和53年11月に第8次施行命令区間となり、岩手県教育委員会はこの間に所在する埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。その結果、浄法寺町に所在する天台寺の古刹である天台寺及びその周辺地域が天台寺緑地保全区域に指定されていることから、路線はこれを避けて設定された。

昭和54年10月、岩手県教育委員会文化課は日本道路公団の協力を得て、実施計画路線に沿った幅500mについて埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、さらに両者で協議を行った。ついで昭和56年5月に路線が公表されたことに伴い文化課によって道路用地内の分布調査が実施され、約30遺跡が確認された。翌57年には安代町所在の5遺跡について発掘調査範囲の確認が行われた。

昭和58年に至り、安代町に所在する遺跡の発掘調査が文化課の調整を経て当埋蔵文化財センターに委託された。湯の沢Ⅲ、繫沢Ⅱ、石神Ⅱ、関沢口遺跡の4遺跡であるが、関沢口遺跡は粗掘遺構確認調査であり、翌年度への継続調査である。そのほか、文化課は浄法寺町所在の12遺跡について現地確認調査を実施している。

昭和59年には、安代町の関沢口、水神の2遺跡と浄法寺町の柿ノ木平Ⅲ、五庵Ⅰ、五庵Ⅱ、海上Ⅰ、海上Ⅱ、大久保Ⅰ、沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの9遺跡について発掘調査が委託された。同年度に文化課は二戸市、一戸町所在の各6遺跡の発掘調査範囲を確認している。また、新たに発見された浄法寺町の五庵Ⅲ、広沖遺跡についての現地確認調査が行われ、浄法寺町所在の発掘調査対象遺跡は14遺跡となった。

昭和60年は、前年度からの継続調査となった沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの3遺跡のほか、浄法寺町田余内Ⅰ、田余内Ⅱ、五庵Ⅲ、安比内Ⅰ、広沖の5遺跡と二戸市西久保、大久保の2遺跡、一戸町畑切、竹林、親久保Ⅲの3遺跡の発掘調査が委託された。

昭和61年には、二戸市大久保・太田・馬立Ⅰ・馬立Ⅱ・青ノ久保の5遺跡と一戸町親久保Ⅰ・親久保Ⅲ・親久保Ⅳの発掘調査が委託された。

II 調査方法と室内整理の方法

1. 調査方法

(1) グリッドの設定

日本道路公団が測量した調査対象区域内にある東北縦貫自動車道本線の中心杭 STA216+80 (X=21242.3500 Y=35582.4464) を基準点①とし、これと STA216+60 (X=24204.4755 Y=35565.0545) を結ぶ直線を基準線(東西の基線)とした。次に東西の基線に直交し、基準点①を通る直線を設定し、南北の基線とした。基準点①を座標原点とし、そこから四方に20m×20mの大区画を設定し、大区画の名称は、東西方向に南西からA～Eを、南北方向に北西からI～IVのローマ数字を付し、A II区、C III区…のように表わした。また20m×20mの大区画を4m×4mの小グリッドに区画し、西隅から横にA・B…Yのアルファベットを付し、小グリッド名をA II B区・D II T区…のように表わした。なお、真北の方向は東西の基線から60度西偏している。

(2) 粗掘り・遺構検出

遺構検出面までの土層の除去及び遺構の検出は、すべて人力で行った。検出された遺構は、大区画毎に、住居跡・住居跡状遺構は01から、土坑・陥し穴状遺構・炭窯跡等は101からの分類番号を与え、焼土遺構には小グリッド名を付し、AIV01住居跡、C II 101陥し穴状遺構、D II V 焼土…というように遺構名を表わした。

(3) 精査方法

遺構精査は原則として、住居跡は4分法、土坑・陥し穴状遺構等は2分法により精査の各段階においては必要図面の作成や写真撮影を実施した。出土遺物の取り上げは、遺構内のは遺構名・出土位置、レベルを記録した後行った。遺構外のは地区名と層位を記入したうえ取り上げた。

(4) 実測方法

各遺構はグリッド杭(または基準杭)にトランシットを据え、遺構がほぼ入る範囲の簡易的な遣り方を設定し、実測を行った。実測図は20分の1の縮尺を基本とし、炉やカマドなどはその状況に応じて10分の1の縮尺を用いた。遺構のレベル計測は50cm間隔で行った。

(5) 写真撮影

撮影には35mm判カメラ2台を使用した。フィルムはモノクロームとカラーリバーサルを使用した。

2. 室内整理

(1) 作業内容

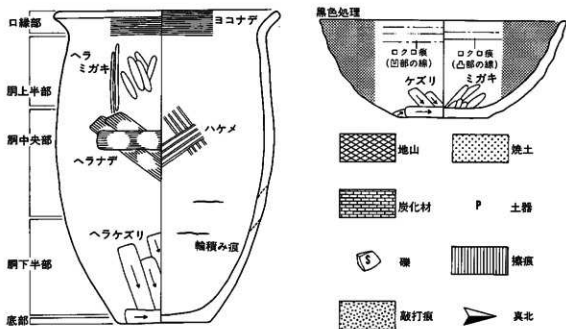
室内整理作業は61年度と62年度の2か年にわたって行った。年度毎のおもな作業内容は以下のとおりである。

- ・昭和61年11月1日～62年3月31日
 - ・遺構図面の点検・合成、第2原図作成、トレース
 - ・遺物の登録、復元、実測図作成、写真撮影
 - ・本文原稿執筆
- ・昭和62年6月1日～62年8月31日
 - ・遺構図版・写真図版作成
 - ・遺物実測図作成、トレース、写真撮影
 - ・本文原稿執筆

(2) 図版

本報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は40分の1であるが、これに該当しないものは縮尺率またはスケールを別に付した。方位は真北を示す。遺物実測図及び土器拓影の縮尺は別に表示した。遺物に付した番号は、縄文土器・土師器・須恵器を一括して連番とし、土製品・石器・石製品・金属製品・鉄滓を各種別に連番とした。なお、図版番号と写真図版番号は統一している。

遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種別、及び土師器の器面調整の表わし方は以下のとおりである。



III 遺跡の立地と環境

(1) 位置

青ノ久保遺跡は岩手県二戸市似鳥字青ノ久保19-9ほかに所在する。東日本旅客鉄道東北本線二戸駅の南西5.5kmに位置し、県道二戸・安代線からは、市道外川・山田線と福田久保・中沢線を経て御返地小学校山田分校に至り、これより東1.8kmの山麓丘陵上に立地する。

当遺跡の所在する二戸市は、岩手県の北端部にあたり、北上山系と奥羽山脈の縁辺部を含む馬淵川水系中流域に位置し、面積は238.17km²である。市境の北縁は青森県三戸郡三戸町及び名川町に接し、東縁は九戸郡軽米町及び九戸村、南縁は二戸郡一戸町、西縁は二戸郡浄法寺町及び青森県三戸郡田子町に接している。当遺跡は二戸郡一戸町との境界付近に位置する。

(2) 地形と地質

二戸市の地形は馬淵川流域と馬淵川以東の山地、及び馬淵川以西の火山性丘陵の3つの地域に大別される。

馬淵川以東の二戸市と九戸郡軽米町及び九戸村との境界は、北上山地の北端部を構成している折爪岳(852.2m)、小倉岳(652.3m)などの山群を主分水嶺として限られている。この地域の山地は地塊性を示し、折爪岳も南北に連なる山地の中の一連の山地ではなく、独立した山塊の性質を示している。馬淵川よりの基盤は第三紀層である。これら山群の西側斜面はさまざまな沢や谷が開析し、馬淵川に合流している。特に白鳥川中・下流域には数段の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

二戸市の中央部を北流する馬淵川は、岩手郡葛巻町の袖山(1,215m)の南斜面にその源を発し、多くの支流と合流しながら奥羽山脈と北上山地の間を北流し、青森県の八戸湾に注ぐ流路延長距離142.4kmの河川である。二戸市においては、この馬淵川により、その流域に洪積世段丘から沖積世段丘にわたる数段の河岸段丘が形成され、それら段丘面は古くから生活の場として活用されており、遺跡数も多い。また現在の市街地中心部も段丘上の特に米沢段丘相当面(沖積世古期面)に形成されている。

一方馬淵川以西の火山性丘陵地は、奥羽山脈北部の東側裾野にあり、この地域は馬淵川最大の支流である安比川によってさらに南北に2分されている。安比川の北側は稲庭岳(1,078m)を主峰とする稲庭岳山麓丘陵で、東端に向かってしだいに高度を下げ、その東縁は馬淵川によって限られる。また安比川の南側は七時雨山(1,060m)及び西岳(1,018m)などから延びる七時雨山山麓丘陵で、その北縁は安比川によって限られる。これはいずれも火山性丘陵で、第三紀層を基盤とし、その上を第四紀の火山砕屑物が覆って地形面を形成している。平地は少な

く、安比川流域と丘陵間の狭い谷底平野が認められる程度である。安比川流域では段丘は見られるものの馬淵川流域ほど顕著ではなく、連続性もあまりよくない。全体に谷底平野の様相を呈しており、幅も狭く、二戸市似鳥付近で700m～750mである。

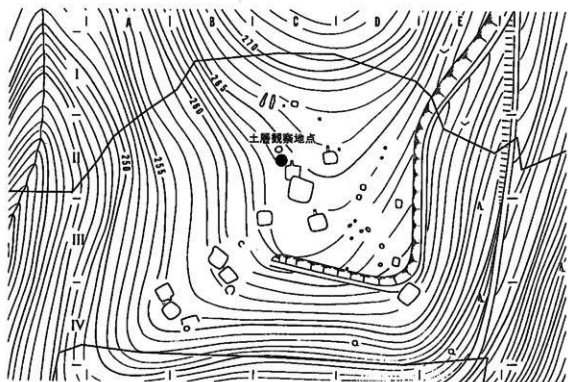
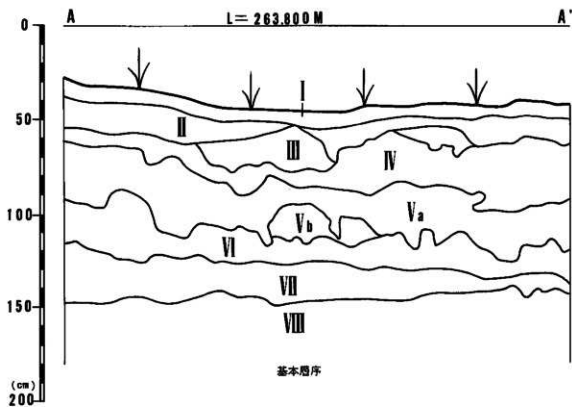
青ノ久保遺跡は七時雨山山麓丘陵北東縁辺部にあたり、安比川の支流である沢内川左岸の南面する丘陵の縁辺部に立地する。遺跡のある丘陵尾根部は、南東に向かって舌状に張り出し、平坦面を形成している。尾根部はさらに南に向かって緩やかに傾斜して張り出している。遺跡の南西及び北東側は深い沢によって限られ、南東側は急崖によって限られている。標高は255m～268mで、沢内川との比高は45m～58mである。調査地内の地質は、日本道路公団仙台建設局の「土性縦断図」によると、基盤は第三紀層の末ノ松山層で、凝灰角礫岩と砂岩である。その上位には段丘堆積層が厚さ9mで堆積し、礫混じり凝灰質砂(二次シラス的)からなっている。その上位には洪積性粘性土がのり、表層は十和田火山を起源とする火山灰やその風化物からなっている。

遺跡の現況は、南東に張り出す尾根部と北東側斜面が畑地で、他は山林・荒地である。

(3) 基本層序

基本層序の概略は以下のとおりである。

- | | | |
|---------------------|----------|--|
| 第 I 層 10YR3/4 | 暗褐色土 | 現表土。黄褐色浮石粒及び炭化材小片が散在する。 |
| 第 II 層 10YR3/3 | 暗褐色土 | 褐色の八戸火山灰がブロック状で混入する。黄褐色浮石粒が混入する。 |
| 第 III 層 10YR3/2～3/3 | 黒褐色～暗褐色土 | 褐色の八戸火山灰がブロック状で混入する。褐色及び黄褐色の浮石粒が若干混入する。 |
| 第 IV 層 10YR4/6 | 褐色土 | しまりなし。暗褐色土がブロック状で散在する。褐色及び黄褐色の浮石粒が混入する。(遺物包含層) |
| 第 V a 層 10YR4/4～4/6 | 褐色土 | しまりなし。暗褐色土が中部～下部に多量に混入する。黄褐色浮石粒が混入する。(遺物包含層) |
| 第 V b 層 10YR4/6 | 褐色土 | V a 層より色調は明るい。黄褐色浮石粒が V a 層より多量に混入する。(遺物包含層) |
| 第 VI 層 10YR5/6 | 黄褐色土 | 中部～下部はしまりがある。黄褐色浮石粒が混入する。 |
| 第 VII 層 10YR4/6 | 褐色土 | 粘性がある。暗赤褐色のスコリアが少量混入する。褐色及び黄褐色の浮石粒が混入する。 |
| 第 VIII 層 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | かたくしまっている。上部は褐色に近く、粘性がある。褐色及び灰白色の浮石粒が若干混入する。 |



第IV層・第V層は八戸火山灰起源のもので、斜面上方からの流れ込みによって堆積したものと考えられ、遺構外から出土した縄文時代の遺物はその大半がこの2層に含まれている。第VI・VII層は八戸火山灰層で、第VIII層は八戸浮石流火山灰にあたる火山灰流凝灰岩に相当するものと思われ、浅い土坑を除く大半の遺構の底部はこの層に達している。

なお、基本土層の観察は、北西斜面で行ったものであるが、尾根中央部の平坦面では、耕作土の下位が第VIII層であり、北東側斜面では耕作土の下位が第IV層となっている。

(4) 周辺の遺跡

第I表にあげた遺跡は、青ノ久保遺跡を中心として、二戸市及び一戸町の遺跡の一部を掲載したものである⁽¹¹⁾。これらのうち、当埋文センターが昭和60年～61年にかけて発掘調査した9遺跡の調査結果は次のとおりである⁽¹²⁾。

	検出された遺構	出土遺物
西久保遺跡	陥し穴状遺構5基、炭窯跡1基	縄文土器(早・前・後期)、土師器、石器
大久保遺跡	縄文時代住居跡4棟(早期1・後期3)、陥し穴状遺構を含む土坑類161基、土器埋設遺構1基、焼土遺構3基、炭窯跡1基、建物跡2～3棟分を含む柱穴群	縄文土器(早・前・後期)、土師器、北海道系の土器群、石器
太田遺跡	遺構は検出されていない	縄文土器(中～後期)、土師器、陶磁器
馬立I遺跡	竪穴住居跡51棟(縄文時代47棟・弥生時代4棟)、住居跡状遺構1棟、ピット27基、陥し穴状遺構29基、埋設土器4基、炉・焼土7基、炭窯跡1基	縄文土器(早・前・中・後期)、弥生土器、石器、土製品
馬立II遺跡	縄文時代竪穴住居跡18棟、竪穴住居跡状遺構1棟、炉跡・焼土遺構16基、土坑24基、陥し穴状遺構14基、配石遺構1基、埋設土器4基、炭窯跡1基	縄文土器(早～後期)、弥生土器、土製品、石器、石製品
親久保I遺跡	溝跡1条、土坑2基、陥し穴状遺構1基	縄文土器(後・晩期)、弥生土器(後期)、石器
親久保II遺跡	縄文時代竪穴住居跡4棟、平安時代竪穴住居	縄文土器(前・中・後期)、弥

	跡 5 棟、竪穴住居跡状遺構 1 棟、土坑35基、 随し穴状遺構 1 基、焼土遺構 1 基	生土器(後期)、土師器、石器、 鉄器、古銭
親久保Ⅲ遺跡	土坑30基、陥し穴状遺構27基	縄文土器(早・前・後・晩期)、 弥生土器、石器、石製品
親久保Ⅳ遺跡	土坑 1 基	縄文土器(早・前・晩期)、石 器

(注 1) 岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡台帳による。

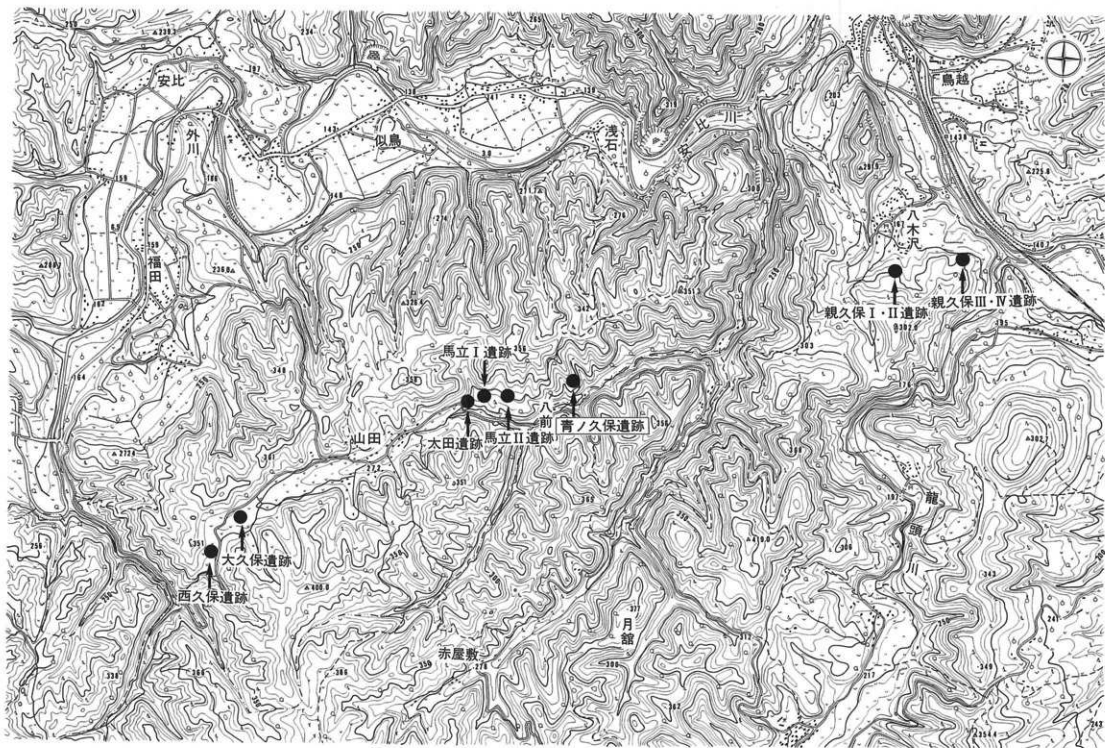
(注 2) 「岩手県文化財発掘調査略報(昭和60年度分・61年度分)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行による。



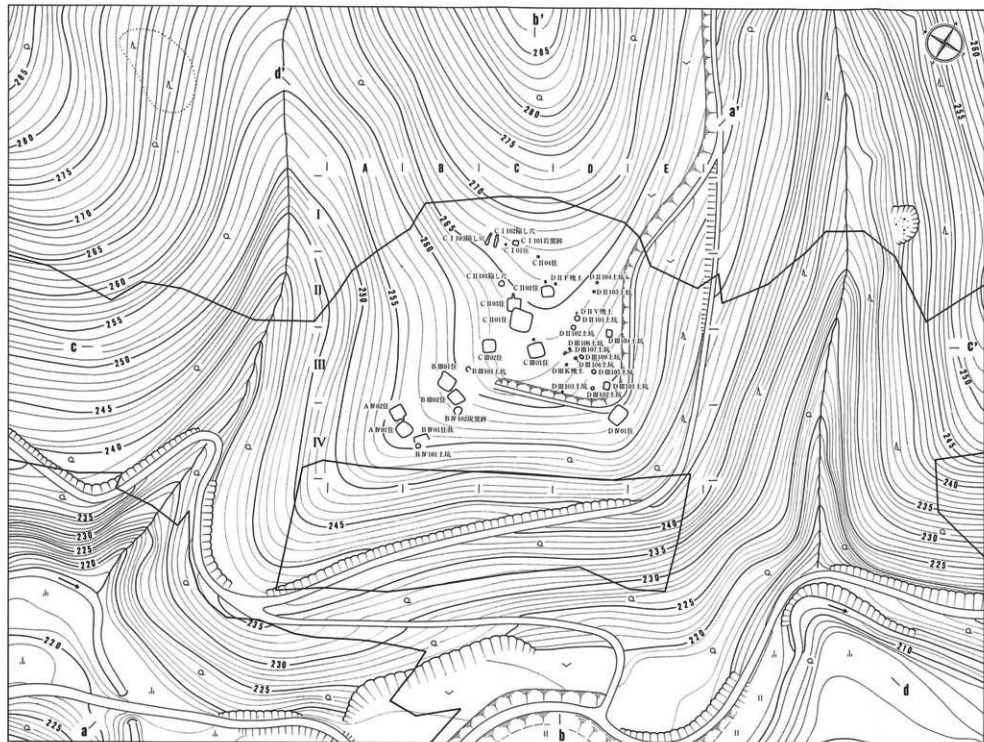
周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧表

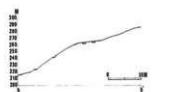
No	遺跡名	種別	遺物等	No	遺跡名	種別	遺物等
1	大向上平	集落跡	前期土師器、縄文晩期	31	大久保	散布地	縄文早・前・後期、土師器
2	大向Ⅰ	集落跡	土師器	32	西久保	散布地	縄文後期
3	大向Ⅱ	集落跡	土師器	33	福田館	館跡	
4	似鳥館	館跡		34	小滝	散布地	縄文後期
5	悪戸平Ⅰ	集落跡	縄文晩期・土師器	35	中屋館	館跡	
6	悪戸平Ⅱ	集落跡	縄文晩期	36	小友館	館跡	
7	鳥越館	館跡		37	泉田館	館跡	
8	八木沢館	館跡		38	大屋敷Ⅰ	集落跡	縄文、土師器、陶磁器
9	親久保Ⅰ、Ⅱ	I、散布地 II、集落跡	縄文後・晩期、弥生 縄文前～後期、弥生・土師器	39	大屋敷Ⅱ	集落跡	縄文、土師器、陶磁器
10	親久保Ⅲ、Ⅳ	III、散布地 IV、散布地	縄文早・前・後・晩期、弥生 縄文早・前・晩期	40	大屋敷Ⅲ	集落跡	縄文、土師器・陶磁器
11	親久保Ⅴ	散布地	縄文	41	大屋敷Ⅳ	集落跡	縄文、土師器・陶磁器
	親久保Ⅵ	散布地	縄文	42	内ノ沢Ⅰ	集落跡	縄文、土師器、須恵器
13	骨ノ久保	集落跡	縄文後期・土師器、須恵器	43	内ノ沢Ⅱ	集落跡	縄文、土師器、須恵器
14	八前	散布地	縄文前～後期		金高	集落跡	縄文、土師器
15	八前	散布地	縄文前～後期	44	横羽	集落跡	土師器
16	馬立Ⅰ	集落跡	縄文早・中・後期、弥生	45	柏葉Ⅰ	集落跡	縄文、土師器、陶磁器
17	馬立Ⅱ	集落跡	縄文中・後期	46	柏葉Ⅱ	散布地	縄文、土師器
18	馬立Ⅲ	散布地	縄文後期	47	泉沢	散布地	縄文、土師器
19	太田	散布地	縄文後期	48	泉沢Ⅱ	散布地	縄文、土師器
20	笹森	散布地	縄文	49	榎木	散布地	縄文、土師器
21	野場塚Ⅰ	散布地	縄文	50	出ル館	館跡	
22	野場塚Ⅱ	散布地	縄文	51	女栗館	館跡	
23	大倉Ⅱ	散布地	縄文中・後期	52	西法寺館	館跡	
24	大倉A	散布地		53	川原田平Ⅰ	散布地	土師器
25	大倉B	集落跡		54	川原田平Ⅱ	散布地	縄文晩期
26	大倉C	散布地		55	合川	散布地	縄文
27	大倉D	散布地		56	橋館	館跡	
28	紙久保	散布地	縄文中期				
29	日影久保	散布地	縄文中期				
30	仲口	集落跡	縄文前～後期				



図版第1図 遺跡の位置と周辺の地形図



断面图



图版第 2 图 遺構配置图



Ⅳ 検出された遺構と遺構内出土遺物

本遺跡から検出した遺構は、縄文時代の住居跡 2 棟、古代の竪穴住居跡 10 棟(奈良時代 5 棟、平安時代 5 棟)、住居跡状遺構 1、土坑 15 基、陥し穴状遺構 3 基、炭窯跡 2 基、焼土遺構 3 である。

1. 縄文時代の住居跡

C I 01 住居跡

〈遺構〉(図版第 3 図、写真図版第 3 図)

本遺構は調査区北西端部に位置し、C I 102 陥し穴状遺構の東 1 m に隣接する。検出面は基本層序第 V 層である。

本遺構は土壌流失等のために壁は遺存せず、炉と床面の一部と考えられる部分を検出したのみで、全容は不明である。

炉は地床炉で、床面から 15cm 程掘り込んで構築され、燃焼部は径 42cm×32cm の範囲に焼成を受け、最大層厚 8cm でレンズ状に赤色変化を受けている。炉の北側から東側にかけて半径 2.5m の範囲で、床面かと考えられる固い踏みしめ部分が広がっており、固い部分の高さはほぼ同一である。柱穴は検出されておらず、周溝も認められなかったことから、床面の範囲を把握することはできない。

遺物は出土していない。

C II 04 住居跡

〈遺構〉(図版第 3 図、写真図版第 3 図)

本遺構は C II 区北端部にあり、C I 01 住居跡の東 5 m に位置する。検出面は基本層序第 V 層である。

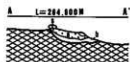
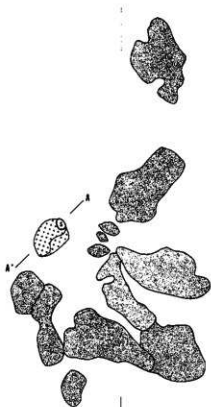
本遺構は土壌流失等のために壁は遺存せず、炉を検出したのみで、全容は不明である。

炉は石囲い炉であるが、北側 2 分の 1 が削平を受けて遺存しないことから詳細は不明であるが、残存する形状等から、偏平な角礫を縦位に埋設し、一辺が 50cm 程の方形状に構築されたものと考えられる。燃焼部は直径 30cm の範囲に焼成を受け、最大層厚 6cm でレンズ状に赤色変化を受けている。

柱穴は検出されず、周溝等も認められない。そのため床面の範囲を把握することはできない。

遺物は出土していない。

4



- a. 5 YR 7/6 赤褐色土 凝土、かたくなまっている。地成良好。
 b. 10 YR 4/6 褐色土 暗褐色土との凝土、かたくなまっている。

 掘り部分

C I 01住居跡

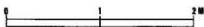
4



- a. 5 YR 7/6 赤褐色土 凝土、しまりなし。地成不良。
 b. 7.5 YR 7/6 褐色土 石千地成を受けている。
 c. 10 YR 4/6 褐色土 中央部に若干凝土が混入する。



C II 04住居跡



図版第3図

2. 奈良時代の竪穴住居跡

AIV01住居跡

〈遺構〉(図版第4図、写真図版第4図)

本住居跡は、調査区南側斜面の南端部に位置し、AIV02住居跡の南東に1mの間隔をおいて隣接する。本遺構は地表観察の段階で、周辺地形より若干凹んでおり、表土を除去したところ検出面(褐色土面)に黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構はAIV02住居跡と重複し、本遺構の煙出しの一部がAIV02住居跡によって切られている。

遺構は、上端410cm×400cm・下端350cm×320cmの歪んだ隅丸長方形を呈する。長軸方向は真北から60度西偏する。壁高は北西壁42cm×57cm・南東壁66cm×93cm・北東壁69cm～100cm・南西壁45cm～61cmである。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、北東壁では上端付近が大きく外反する。

床面は基本層序第VIII層にあたり、小礫の混じる黄褐色土である。ややかたくしまっており、ほぼ水平かつ平坦である。柱穴は検出されていない。貼り床や両溝は認められない。床面及び埋土下部から多量の焼土や炭化材が出土していることから、本住居跡は焼失したものと考えられる。

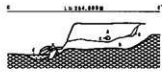
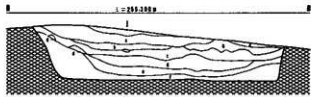
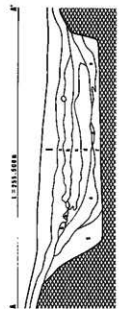
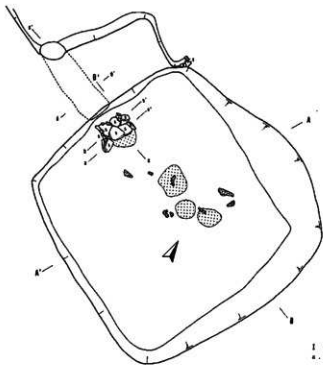
埋土は上部から黒褐色土・黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土・黄褐色土の5層に大別される。灰黄褐色の土層には、十和田a火山灰が最大層厚26cmでレンズ状に堆積している。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは北西壁のほぼ中央に構築されている。遺存状態は不良で、全体に潰れている。規模は袖部から煙出し部まで190cm・袖部幅52cmで、煙道の幅は最大44cmである。袖部には偏平な角礫を埋設し、粘土を貼りつけて固定しているものようであるが、覆土との区別が明確ではない。燃焼部は径40cm×36cmの範囲に焼成を受け、最大層厚10cmでレンズ状に赤色変化を受けている。燃焼部中央付近には支脚として利用されたと考えられる礫が縦位に埋設されている。煙道部は削貫き式と思われるが、上部は削平されている。煙道部は煙出し部に向かって緩く起伏した後、外傾して緩やかに上がる。煙出し部の掘り込みは検出面から50cmである。

〈出土遺物〉(図版第5図、写真図版第22図)

土師器

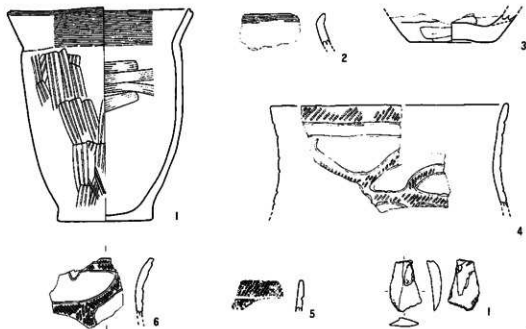
1はカマドから出土したほぼ完形の甕形土器である。口径15.0cm・底径7.7cm・器高17.3cmで、口径部に最大径をもつ。ロクロ不使用成形である。器形は胴中央部に脹らみをもち、頸部が段を有してくびれ、口縁部は大きく外傾する。口唇部には一条の沈線が巡らされている。器面調整は口縁部が内面・外面共にヨコナデ、胴上半部から胴下半部にかけての外面にはハケメが施され、内面にはヘラナデが横位及び斜位に施されている。2、3は埋土から出土したものであ



- a. 10 YR 5/ 褐色土
- b. 10 YR 5/ 黄褐色土。淡黄色土との混土。
- c. 5 YR 5/ 淡黄色土。微塵土。
- d. 10 YR 5/ 暗褐色土。
- d. 7.5 YR 5/ 黄褐色土。雑土。造成不具。

- i. 10 YR 5/ 暗褐色土 埋黄土。
- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 しまり、粘性共になし。1層の暗褐色土との混土。褐色及び黄褐色の浮石が若干混入。炭化材小片が少量混入。
- b. 10 YR 5/ 黄褐色土 ややしまりあり。粘性なし。明黄褐色浮石粒が3%混入。褐色浮石粒が若干混入。炭化材細片が若干混入。
- c. 10 YR 5/ 灰黄褐色土 特徴の十和田の火山灰層。褐色土との混土。しまりがなく軟かい。
- d. 10 YR 5/ 1-5 におい黄褐色-灰黄褐色土。十和田の火山灰層。砂状と砂質の互層で堆積。かたくしまっている。明黄褐色浮石粒が若干混入。かたくしまっている。粘性なし。汚れた褐色土との混土。炭化材片が下部ほど多量に混入。焼土粒が若干混入。かたくしまっている。粘性なし。明黄褐色浮石が1%混入。炭化材片が多量に混入する。焼土粒が若干混入。しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石が1%混入。
- g. 10 YR 5/ 黄褐色土

図版第4図 A IV01住居跡



図版第5図 A IV01住居跡出土遺物

(S=1/5)

る。2は甕形土器の口縁部破片で、口縁部は強く短く外反する。内面・外面共にヨコナデが施されている。3は甕形土器の底部破片で、外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

縄文土器

4、5は鉢形土器の同一個体の口縁部片である。折り返し口縁で、肥厚部にLRの単節斜縄文が施され、肥厚部直下に2条の平行沈線が巡らされる。その下位にはLRの単節斜縄文が施された後、沈線と磨消による三角形の区画文が施される。6は鉢形土器の口縁部片で、RLの単節斜縄文が施された後、沈線と磨消による区画文が施される。

石器

1は不定形石器で、側縁部と端部の一部に剝離調整が施されている。

B III02住居跡

〈遺構〉(図版第6図、写真図版第5図)

本住居跡は調査区南側緩斜面の中位に位置し、B III01住居跡の東1 mに隣接する。検出面は基本層序第IV層で、検出面に褐色土と灰黄褐色の十和田の火山灰との混土が、ほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構はB III01住居跡と重複し、本遺構の煙出

しの一部がBⅢ01住居跡によって切られている。

本遺構は上端320cm×310cm・下端286cm×284cmの菱形に近い歪んだ隅丸方形を呈する。カマドの長軸方向は真北から62度西偏する。壁高は北西壁50cm～70cm・南東壁33cm～60cm・北東壁62cm～88cm・南西壁35cm～55cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第Ⅷ層で、かたくしまっている。ほぼ平坦であるが、南西端から北東端に向かって比高差10cm程で緩やかに傾斜して上がる。柱穴は検出されていない。貼り床や周溝等は認められない。床面及び埋土下部から多量の炭化材が出土しており、本住居跡は焼失したものと考えられる。

埋土は上部から褐色土・黒褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土及び褐色土の5層に大別される。灰黄褐色の土層には、十和田の火山灰が最大層厚30cmでレンズ状に堆積している。層位状況から自然堆積と考えられる。

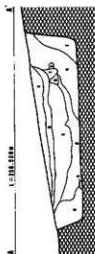
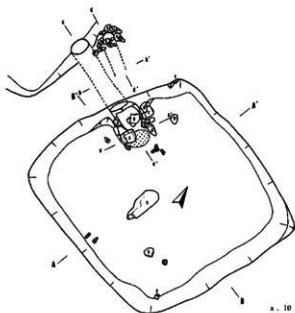
カマドは北西壁の中央北寄りに構築されている。遺存状態は不良である。規模は袖部から煙出し部まで180cm、袖部幅50cmで、煙道の幅は最大26cmである。袖部には扁平な角礫を埋設し、粘土で固定するものようである。燃焼部は径38cm×26cmの範囲に焼成を受け、最大層厚8cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は朝貫き式で、煙出し部に向かって緩やかに上がった後、直立する。煙出し部の掘り込みは検出面から34cmである。この煙道部の北に隣接して古い煙道部の一部が残存している。古い煙道部の方向から考えると、カマドそのものも作り変えられたものようであるが、その痕跡は見受けられず、煙道部の一部のみが残存している。煙道部は朝貫き式で、煙出し部に向かって起伏しながら緩やかに上がった後、外傾気味に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは検出面から30cmで、煙出し部の周囲には小礫がほぼ円形状に配されている。

〈出土遺物〉(図版第7図、写真図版第22図)

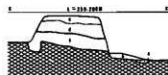
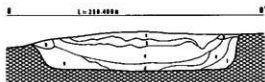
土師器

(カマド出土)

7はカマドから出土した甕形土器で、胴上半部～底部の約2分の1を残しているが口縁部は欠損している。器形は胴上半部に脹らみをもち、頸部が段を有してくびれている。器面調整は



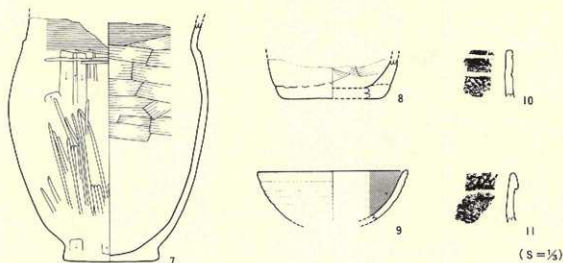
- a. 10 YR 5/6 褐色土
10
- b. 10 YR 5/6 黒褐色土
- c. 5 YR 5/6 灰オリーブ色土
かたくしまっている。十和田a火山灰層、上位が砂状、下位が砂質の3~5層の瓦層をなす。
- d. 10 YR 5/6 黒褐色土
しまりなし、弱い粘性あり。暗褐色土との混入。炭化材片が多数に混入。燧土粒若干。
- e. 10 YR 5/6 褐色土
ややしまりあり。弱い粘性あり。炭化材片が少量混入。明黄褐色浮石粒2%。
- f. 10 YR 5/6 褐色土
しまりなし。強い粘性あり。明黄褐色浮石粒3%。



- a. 5 YR 5/6 赤褐色土
土。焼成不良。炭化材片が混入。
- b. 7.5 YR 5/6 褐色土
ややしまりあり。
- c. 10 YR 5/6 褐色土
しまりなし。褐色土との混入。明黄褐色浮石粒が若干混入。
- d. 10 YR 5/6 暗褐色土
しまりなし。炭化材片が少量混入。
- e. 10 YR 5/6 黒褐色土
ややしまりあり。
- f. 10 YR 5/6 黒褐色土
上部及び下部はかたくしまっているが中部は軟かい。下部に炭化材片が混入。
- g. 10 YR 5/6 暗褐色土
ややしまりあり。



図版第6図 B III02住居跡



図版第7図 B III02住居跡出土物

外面にヘラミガキ、内面にはナデが施されている。

(埋土出土)

8は甕形土器の底部破片で、内面にはナデが施されている。9は坏形土器の口縁部破片である。ロクロ使用のもので、口縁部はほぼ直立する。体部内面には黒色処理が施されている。

縄文土器

いずれも埋土から出土した鉢形土器の口縁部破片で、10は平行沈線文とLrの無節斜縄文が施されている。11は折り返し口縁で、肥厚部と胴部にLRの単節斜縄文が回転の方向を変えて施されている。

C II02住居跡

〈遺構〉(図版第8図、写真図版第6図)

本住居跡は、調査区中央部の平坦面で、C II01住居跡の北5mに位置する。検出面は基本層序第VI層で、検出面に十和田a火山灰の混入した黒色土が不整形形状に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。

本遺構は、上端310cm×300cm・下端270cm×270cmの歪んだ隅丸方形で、辺の中央付近が脹らむ形状を呈する。カマドの長軸方向は真北から47度西偏する。壁高は北西壁66cm×77cm・南東壁40cm・北東壁45cm～73cm・南西壁40cm～60cmである。壁は床面から外傾して立ち上がるが、南東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面は基本層序第VIII層にあたり、かたくしまっている。水平かつ平坦である。床面から柱穴

状小土坑が5基検出されている。北東壁際に3基、南東壁際中央に1基、中央付近に1基である。径は10cm～15cmの範囲で、深さはP₁34cm・P₂48cm・P₃48cm・P₄17cm・P₅14cmである。貼り床・周溝等は認められない。床面及び埋土下部から多量の炭化材が出土していることから、本住居跡は焼失したものと考えられる。

埋土は上部から黒色土・灰黄褐色土・褐色土・褐色土の4層に大別される。灰黄褐色の土層には、十和田a火山灰が最大層厚22cmでレンズ状に堆積している。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは北西壁の中央やや北寄りに構築されている。遺存状態は不良である。規模は袖部から煙出し部まで165cm・袖部幅40cmで、煙道の幅は最大30cmである。袖部には左右共偶平な角隅を埋設し、粘土で固定している。燃燒部は径34cm×32cmの範囲に焼成を受け、最大層厚7cmで赤色変化を受けている。支脚には径10cm×7cm程の亜角礫が使用されていたものと考えられる。煙道部は剃貫き式で、煙出し部に向かって若干起伏しながら緩やかに上がった後、外傾して立ち上がる。煙出し部の掘り込みは検出面から50cmである。

〈出土遺物〉(図版第9図、写真図版第22図)

土師器

12はカマド脇の床面直上から出土した坏形土器で、口縁部～底部の約3分の2が残存している。ロクロ不使用のもので、口径14.5cm・器高5.8cmである。口縁部は内湾気味に直立し、底部は平底である。器面調整は体部外面にヘラミガキが施され、内面にはミガキ調整後に黒色処理が施されている。

縄文土器

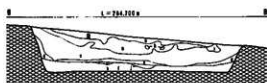
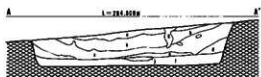
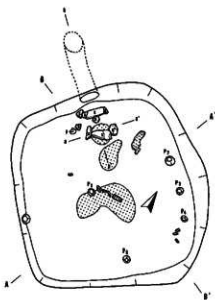
13・14はいずれも埋土から出土したもので、折り返し口縁である。13は肥厚部が無文で、胴部に縄文が施されている。14は網目状撚糸文が施されている。

土製品

1は埋土から出土した勾玉で、穿孔をもち研磨が施されている。

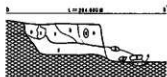
石器

2・3は埋土から出土したもので、2は削器で、片面の両側縁に剝離調整が施されている。3は不定形石器で側縁の一部に調整痕が認められる。4はカマドの袖の芯材として使用されていたもので、石棒を転用したものと考えられる。五角柱状で、三面の中央部に擦痕が認められる。

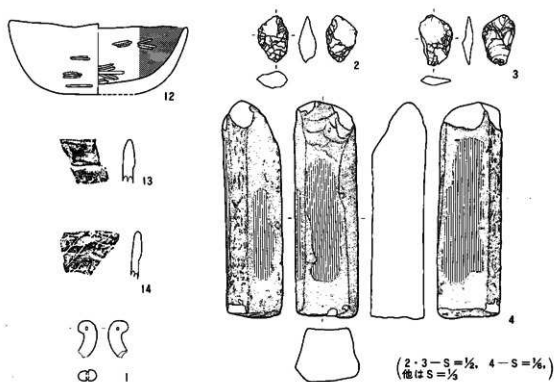


- a. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまりなし。
 b. 10 YR 5/6 褐色土 しまりなし。
 c. 10 YR 5/6 褐色土 しまりなし。
 d. 10 YR 5/6 にぶい褐色土 しまりなし。
 e. 2.5 YR 5/6 赤褐色土 焼土。かたくしまっている。炭化材
 片が混入。

- a. 10 YR 5/6 褐色土 ややしりあり。粘性なし。粒状の十和田
 の火山灰がブロックで散在。
 b. 10 YR 5/6-5/6 にぶい黄褐色土 十和田の火山灰層。下部ほど色調
 が明るい。かたくしまっている。
 c. 10 YR 5/6 褐色土 かたくしまる。十和田火山灰がブロック
 で混入。炭化材料及び黄褐色浮石粒が少量
 混入。
 d. 7.5 YR 5/6 褐色土 かたくしまる。明黄褐色浮石粒が若干混入。
 炭層混入。
 e. 10 YR 5/6 褐色土 かたくしまる。炭化材料及び多量に混入。
 f. 10 YR 5/6-5/6 褐色土 非常にかたくしまる。焼土粒及び炭化材料
 が全体に多量に混入する。
 g. 10 YR 5/6 赤褐色土 しまり、粘性表になし。十和田火山灰が
 ブロックで若干混入。
 h. 10 YR 5/6 褐色土 しまり、粘性表になし。十和田火山灰が
 混入。
 i. 10 YR 5/6 暗褐色土 かたくしまる。明黄褐色浮石が混入。
 j. 5 YR 5/6 明赤褐色土 焼土。炭化材料及び多量に混入。
 k. 5 YR 5/6 明赤褐色土 焼土。炭化材料及び混入はj層より少ない。



図版第 8 図 C II 02 住居跡



図版第9図 C II 02住居跡出

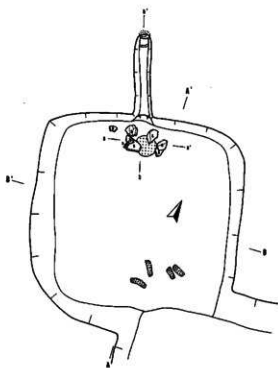
C II 03住居跡

〈遺構〉(図版第10図、写真図版第7図)

本住居跡は、調査区中央部平坦部で、C II 02住居跡の南西6 mに位置する。検出面は基本層序第VI層で、検出面に十和田a火山灰の混入した暗褐色土がほぼ方形に広がっていたことから遺構の存在を確認した。本遺構はC II 01住居跡と重複し、本遺構の南東壁の一部がC II 01住居跡によって切られている。

遺構は、上端350cm×340cm・下端290cm×280cmの隅丸方形で、辺の中央付近が脹らむ形状を呈する。カマドの長軸方向は真北から30度西偏する。壁高は北西壁30cm～65cm・南東壁50cm～60cm・北東壁65cm～75cm・南西壁40cm～50cmである。壁は床面から外傾気味に立ち上がる。

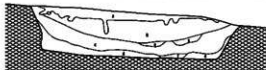
床面は基本層序第VIII層にあたり、かたくしまっている。平坦であるが、南端から北端に向かって比高差15cm程で緩やかに傾斜して上がる。柱穴は検出されていない。貼り床や周溝等は認め



A 1=201.000m A'



B 1=212.000m B'



1=211.000m A'



- a. 5 YR 5/6 赤褐色土 焼土。かたくしまっている。炭化材料が混入。
 b. 10 YR 5/6 褐色土 しまっている。焼土粒及び炭化材料が混入。

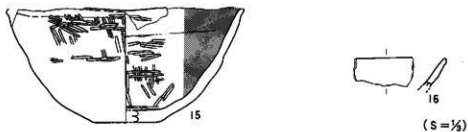
- a. 10 YR 5/6 暗褐色土 ややしまりあり。粘性なし。八戸火山灰との混土。
 b. 2.5 Y 5/6 灰白色土 十和田の火山灰層、粉状の灰白色火山灰と灰白色の砂質火山灰とが互層で堆積。かたくしまっている。
 c. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまりなし。八戸火山灰との混土。黒褐色土がアロツクで混入。明黄褐色浮石粒及び炭化材料が若干混入。
 d. 10 YR 5/6 黄褐色土 しまりなし。炭化材料が多量に混入。中央下部に多量の焼土が混入。
 e. 10 YR 5/6 黒褐色土 しまりなし。八戸火山灰及び十和田火山灰がアロツクで混入。
 f. 10 YR 5/6 黒褐色土 しまりなし。
 g. 5 YR 5/6 赤褐色土 焼土。八戸火山灰及び炭化材料が混入。

1=207.000m A'



B 1=207.000m B'

図版第10図 C II 03住居跡



図版第11図 C II 03住居跡出土遺物

られない。床面及び埋土最下部から多量の焼土や炭化材が出土していることから、本住居跡は焼失したものと考えられる。

埋土は上部から暗褐色土・灰黄褐色土・暗褐色土及び黄褐色土の4層に大別される。灰黄褐色の土層には十和田a火山灰が最大層厚38cmでレンズ状に堆積している。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは北西壁のほぼ中央に構築されている。遺存状態は不良である。規模は袖部から煙出し部まで180cm、袖部幅50cm、煙道の幅は最大26cmである。袖部には左右共に偏平な角礫を埋設し、粘土で固定するものようである。燃燒部は径36cm×30cmの範囲に焼成を受け、最大層厚8cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は上部が削平されており明確ではないが、形状及び該期の他の住居跡の例からみて、朝貫き式と考えられる。煙道部は煙出し部に向かって緩やかに上がった後、内穹気味に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは検出面から33cm程である。

〈出土遺物〉(図版第11図、写真図版第23図)

土師器

15はカマド脇壁際の床面直上から出土した坏形土器で、口縁部～底部約2分の1の残存である。ロクロ不使用のもので、口径約19.2cm・器高9.2cmである。器形は体部中半に段を有するもので、外面の段は比較的明瞭である。口縁部は外面が外側に若干張り出す形状を呈し、底部は平底である。器面調整は体部全体にわたって内外共へラミガキが施され、内面にはミガキ調整後に黒色処理が施されている。16は埋土から出土した坏形土器の口縁部破片で、ロクロ不使用のものである。口縁部はほぼ直立する。

C III 01住居跡

〈遺構〉(図版第12図、写真図版第8図)

本住居跡は、調査区中央平坦部で、C II 01住居跡の南東4mに位置する。検出面は基本層序第VIII層で、検出面に黒褐色～暗褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。

遺構は上端390cm×380cm・下端340cm×340cmの隅丸方形を呈する。カマドの長軸方向は真北

から46度西偏する。壁高は北西壁53cm×68cm・南東壁40cm・北東壁50cm～63cm・南西壁43cm～50cmである。壁は床面から内穹気味に外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第Ⅶ層にあたり、かたくしまっている。平坦であるが、南東端から北西端に向かって、比高差20cm程で緩やかに傾斜して上がる。柱穴は検出されていない。貼り床や周溝等は認められない。床面及び埋土最下部から多量の焼土や炭化材が出土していることや、南東壁や北東壁の一部が焼土化していること等から、本住居跡は焼失したものと考えられる。

埋土は上部から黒褐色土・暗褐色土・褐色土・灰黄褐色土・におい黄褐色土・褐色土の6層に大別される。灰黄褐色の土層には十和田a火山灰が最大層厚20cmでレンズ状に堆積している。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは北西壁の中央やや北寄りに構築されている。遺存状態は不良である。規模は袖部から煙出し部まで170cm・袖部幅48cmで、煙道の幅は最大25cmである。袖部左右に共、偏平な角礫を埋設し、粘土で固定するものようであるが、覆土との区別が明確ではない。燃焼部は径38cm×36cmの範囲に焼成を受け、最大層厚6cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は削ぎき式で、煙出し部に向かって起伏しながら緩やかに上がった後、直立する。煙出し部の掘り込みは検出面から45cmである。

〈出土遺物〉(図版第13～14図、写真図版第23～24図)

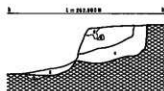
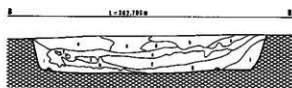
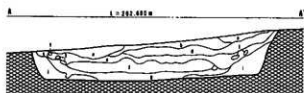
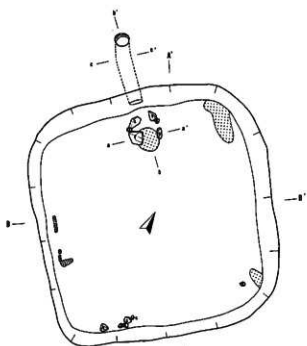
土師器

(床面出土)

17は高環の底部片である。器面調整は体部下半の外面にケズリとミガキが施され、内面はミガキ調整後に黒色処理が施されている。18～20は壘形土器の口縁部片である。18は胴中央部に脹らみをもつものと考えられ、口縁部は僅かに内湾する。口縁部は内外共ヨコナデ、胴部外面にハケメ、内面にはナデが施されている。19は口縁部が短く外反する。20は口縁部が内湾気味に外反するもので、口縁部内面下部に段を有するものである。口縁部には内外共ヨコナデが施されている。17～20はいずれもロクロ不使用のものである。

(埋土出土)

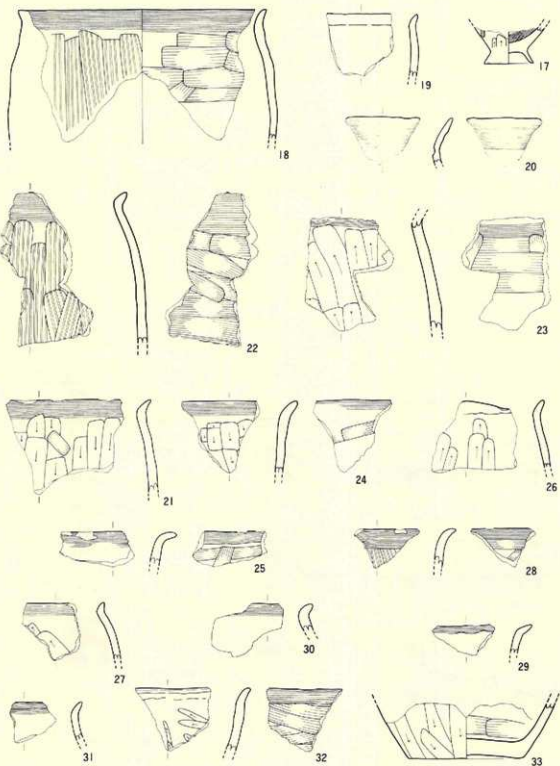
21～33は壘形土器の破片で、いずれもロクロ不使用のものである。24・26・27・32は口縁部が緩く外反し、21～22・25・28・29～31は口縁部が強く短く外反する。器面調整は22・26が胴部外面にハケメ、21・23・24・26・32が胴部外面にケズリが施されている。33は底部片で、胴



- a. 7.5YR 5/1 褐色土 二次シラス上部層影響土。赤褐色焼土粒が多量に混入。炭化材片混入。焼土。かたくしまっている。
- b. 5 YR 5/1 赤褐色土 焼土。かたくしまっている。
- c. 10 YR 5/1 褐色土 焼土。炭化材片が若干混入。焼土を受けた小礫が多量に混入。水根等による隆起。
- d. 10 YR 5/1 黒褐色土

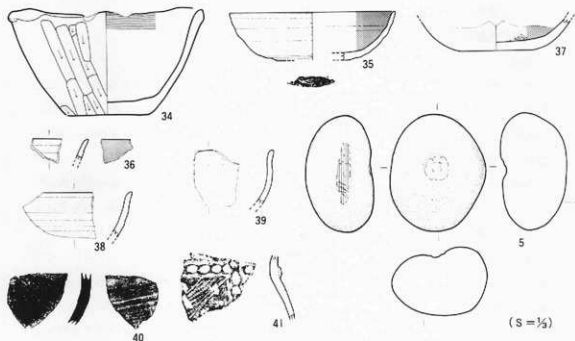
- a. 10 YR 5/1 黒褐色土 かたくしまっている。粘性なし。褐色土がブロックで混入。炭化材小片及び焼土粒が若干混入。
- b. 10 YR 5/1 黒褐色土 かたくしまっている。粘性なし。炭化材小片及び焼土粒が若干混入。しまり、粘性あり。明黄褐色浮石粒混入3%。炭化材小片及び焼土粒が若干混入。
- c. 10 YR 5/1 黒褐色土 しまり、粘性あり。明黄褐色浮石粒混入3%。炭化材小片及び焼土粒が若干混入。
- d. 10 YR 5/1 褐色土 しまり、粘性あり。明黄褐色土と混入。焼土粒混入1%。
- e. 10YR 5/1 褐色土 しまり、粘性あり。十和田a火山灰が散在。炭化材片及び焼土粒が若干混入。
- f. 5 YR 5/1 灰オリーブ土 かたくしまっている。粘性なし。十和田a火山灰層。粒状を呈し、下面に砂質火山灰が層状に入る。
- g. 10 YR 5/1 明黄褐色土 かたくしまっている。強い粘性あり。暗褐色土との混入。炭化材片及び焼土粒が多量に混入。
- h. 10 YR 5/1 褐色土 軟かく弱い粘性あり。十和田a火山灰がブロックで散在。炭化材片及び焼土粒が若干混入。
- i. 7.5YR 5/1 褐色土 かたくしまっている。強い粘性あり。炭化材片及び焼土ブロックが多量に混入。

図版第12図 C III01住居跡



圖版第13圖 C III01住居跡出土遺物(1)

(S = 1/5)



図版第14図 C III01住居跡出土遺物(2)

部外面にケズリが施されている。35～39は坏形土器である。37はロクロ不使用のもので、他はロクロ使用である。35は口縁部～底部約4分の1の残存で、底部切り離しは回転糸切りである。底部外面の再調整は見られない。口縁部はほぼ直立する。内面には黒色処理が施されている。36は口縁部がやや外反し、内面には黒色処理が施されている。38・39は口縁部が短く外反する。37はロクロ不使用で平底である。内面はミガキ調整後黒色処理が施されている。34は埋土から出土した小型甕形土器である。口縁部～底部約3分の1の残存で、器高は8cmである。器形は底部から口縁部に向かって内湾気味に開くものである。口縁部は直立するが、口唇部を外側に逸きだす部分がある。器面調整は体部外面にヘラケズリ、内面にはナデが施されている。

須恵器

40は埋土から出土したもので、甕形土器の胴下半部の破片と考えられる。

縄文土器

41は甕形土器の胴部片で、指頭圧痕状の刻み目をもつ隆帯が縦横に貼付され、その区画内に斜位に二条の平行沈線が施され、その内側にRLの単節斜縄文が充填されている。

石器

5は埋土から出土した凹石で、表面中央部に1カ所の凹みが認められ、側縁の一部に縦長の擦痕をもつものである。

3. 平安時代の竪穴住居跡

A IV 02住居跡

〈遺構〉(図版第15図、写真図版第9図)

本住居跡は調査区南側緩斜面の南端部に位置し、AIV01住居跡の北西1mに隣接する。地表観察の段階で周辺地形より若干平坦になっており、表土を除去したところ検出面(褐色土面)に暗褐色土がほぼ円形状に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構はAIV01住居跡と重複し、本遺構がAIV01住居跡の煙出し部の一部を切って構築されている。

遺構は上端370cm×370cm・下端330cm×330cmで、南東辺が他に比して短い、歪んだ隅丸方形を呈する。カマドの長軸方向は真北から53度西偏する。壁高は北西壁13cm～45cm・南東壁14cm～42cm・北東壁45cm～70cm・南西壁15cm～17cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第Ⅶ層で、小礫の混じる黄褐色土である。ややかたくしまっているが、若干起伏があり、南東端から北西端に向かって、比高差15cm程で緩やかに傾斜して上がる。柱穴は検出されていない。貼り床や周溝等は認められない。

埋土は上部から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。埋土下部には多量の炭化材片が混入する。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは南東壁中央東寄りに構築されていたものようであるが、遺存状態が悪く、袖材の一部として使用されたと思われる礫と燃焼部の痕跡及び煙道部を残すのみで、全体の形状を示すものではない。規模は袖部から煙出し部まで150cm前後、煙道の幅は最大28cmで、袖部幅は不明である。右袖部には偏平な礫が埋設されている。燃焼部は径30cm×24cmの範囲に焼成を受け、最大層厚6cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道は掘り込み式と考えられ、上端壁際に小礫を配し補強しているものようである。煙道部は煙出し部に向かって起伏しながら緩やかに下がった後、外傾して上がる。煙出し部の掘り込みは検出面から30cmである。

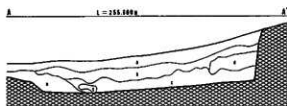
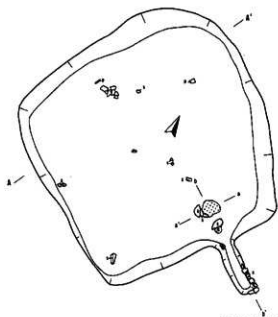
〈出土遺物〉(図版第16図、写真図版第24図)

須恵器

42は埋土下部から一括して出土した甕形土器で、D II 101土坑の埋土から出土した2片と接合している。口縁部～胴部下半約3分の1の残存で、底部は欠損している。器形は肩部が張るもので、頸部がくびれ、口縁部は緩く外反する。口唇部は上下に挽き出されている。器面調整は口縁部から胴部上半がクロク調整で、クロク調整後胴部下半では、外面にはヘラケズリ、内面には縦位及び斜位のヘラナデが施されている。

縄文土器

43・44は埋土から出土したものである。43は折り返し口縁をもつ鉢形土器の口縁部破片である。肥厚する部分は無文で、胴部にはLRの単筋斜縄文が施されている。44は鉢形土器の口縁部



a. 10 YR 5/6 暗褐色土

しまり、粘性共になし。褐色土、褐色土がブロックで混入10%。浮石及び炭化材料が若干混入。

b. 10 YR 5/6 片褐色土

しまり、粘性共になし。暗褐色土及び褐色土がブロックで混入。褐色及び明黄褐色浮石粒が1%程度ずつ混入。炭化材料が少量混入。

c. 10 YR 5/6 褐色土

しまり、粘性共になし。暗褐色土との混入。炭化材料が多量に混入。

d. 10 YR 5/6 褐色土

しまり、粘性共になし。暗褐色土との混入。明黄褐色浮石粒が若干混入。

e. 10 YR 5/6 褐色土

しまりなし。d層に近似するが色調は若干明るい。明黄褐色浮石粒が混入。

f. 10 YR 5/6 片褐色土

ややしまりがあり。暗褐色土がブロックで混入。炭化材料及び明黄褐色浮石粒が混入。



a. 10 YR 5/6 黄褐色土

しまりなし。

b. 10 YR 5/6 褐色土

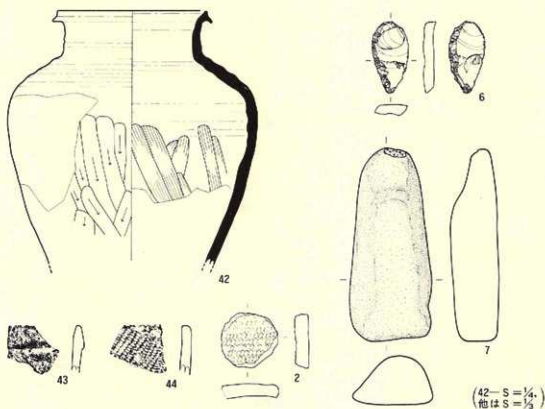
しまりなし。黄褐色土がブロックで混入。

c. 5 YR 5/6 赤褐色土

粘土。



図版第15図 A IV02住居跡



図版第16図 A IV 02住居跡出土遺物

破片で平縁である。地文に LR の単節斜縄文が施されている。

土製品

2 は埋土から出土した円盤状土製品で、土器片を利用したものである。周縁全体が擦られているもので、施文は LR の単節斜縄文である。

石器

いずれも埋土から出土したもので、6 は削器で、表裏両面の異なる一方の側縁に刃部剝離調整が施されている。7 は敲石で、上端部に粗い敲打痕が認められる。

B III 01住居跡

〈遺構〉(図版第17図、写真図版第10図)

本住居跡は調査区南側緩斜面の中位に位置し、B III 02住居跡の西 1 m に隣接する。検出面は基本層序第 VI 層で、黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。

本遺構はB III02住居跡と重複し、本遺構がB III02住居跡の煙出し部の一部を切って構築されている。

遺構は上端410cm×390cm・下端375cm×360cmで、辺の長さが相対応せず、歪んだ隅丸長方形を呈する。また、北西の隅が、上端60cm・下端40cmほどの半円状に張り出す形状を示す。長軸の方向はほぼ東西方向を示している。壁高は北壁61cm～31cm・南壁33cm～29cm・東壁29cm～30cm・西壁47cm～64cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第VIII層で、小礫の混じる黄褐色土である。平坦であるが、南端から北端、西端から東端に向かって比高差10cm程で緩やかに傾斜して上がる。柱穴は検出されていない。貼り床や周溝等は認められない。カマド脇南側床面から小土坑が検出されている。平面形は上端が径50cm程の不整形円形で、下端は40cm×38cmの台形状である。床面からの深さは最大30cmである。底面は中央付近が凹んでおり、壁は直立気味である。埋土は炭化材片が少量混じる褐色土で構成される。本土坑は貯蔵穴と考えられる。

埋土は上部から黒褐色土・褐色土・黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは東壁の中央部北寄りに構築されている。遺存状態は不良である。袖部には偏平な角礫を埋設し、粘土を貼り付けて固定している。袖部幅は60cmで、芯材として使用されたと思われる礫が抜きとられて床面中央付近に散在している。燃焼部は径40cm程の範囲に焼成を受け、最大厚7cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は特に認められず、壁外方に向かってなだらかに起伏しながら上がっていくものようである。

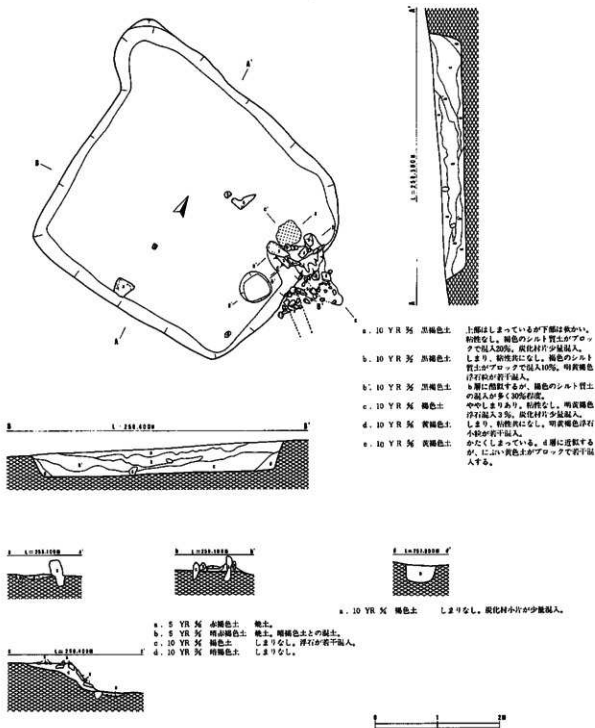
〈出土遺物〉(図版第18～19図、写真図版第25図)

土師器

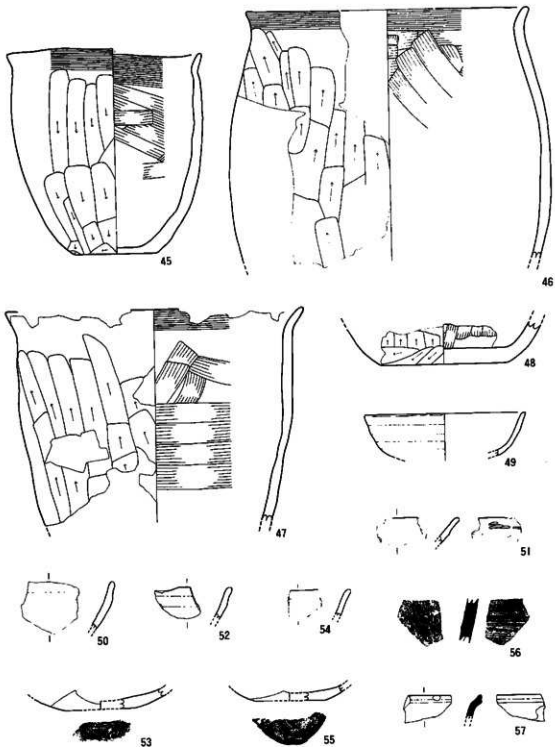
(床面・カマド出土)

甕形土器 45～48はカマド及び床面から出土したもので、すべてロクロ不使用のものである。45はほぼ完形で、器形は胴上半部にやや脹らみをもち、口縁部は内弯気味に短く外反する。器高は16.6cmで、口縁部に最大径をもつ。器面調整は口縁部が内外共ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面には横位及び斜位にナデが施されている。46は口縁部～胴中央部の破片で、胴中央部に脹らみをもち、口縁部は短く外反する。口縁部は内外共ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面には横位及び斜位のナデが施されている。47は口縁部～胴中央部約3分の1の残存で、胴上半部に脹らみをもち、口縁部は短く外反する。口縁部は内外共ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面にはナデが横位及び斜位に施されている。48は胴下半部～底部破片で、胴部外面に縦位及び斜位にヘラケズリ、内面にはナデが施されている。

坏形土器 49～53は床面から出土したもので、すべてロクロ使用のものである。49は口縁部

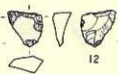
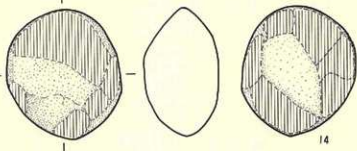
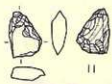
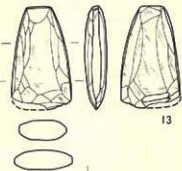
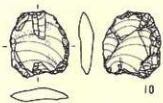
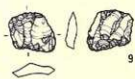
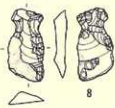
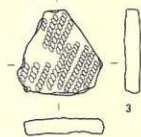
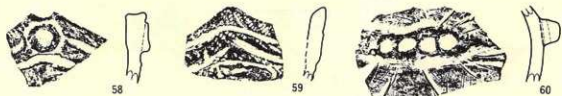


図版第17図 B III 01住居跡



(S = 1/4)

圖版第18圖 B III01住居跡出土遺物(1)



(S = 1/2)

图版第19图 B III 01住居跡出土遺物(2)

～体部下半約4分の1の残存で、口縁部は直立する。50～52は口縁部破片で、いずれも口縁部は緩く外反する。51はロクロ調整後、内面にミガキが施されている。53は底部～体部下半の一部で、底部切り離しは回転糸切りである。底部外面の再調整は見られない。

(埋土出土)

54・55は坏形土器破片で、いずれもロクロ使用のものである。54は口縁部破片で、口縁部は緩く外反する。55は底部～体部下半一部の残存で、底部切り離しは回転糸切りである。底部外面の再調整は見られない。

須恵器

56は床面から出土したもので、甕形土器の胴部下半の破片と考えられる。57は埋土から出土した甕形土器の口縁部片で、口縁部が外反し、口唇部は上下に挽き出されている。

縄文土器

58～60は埋土から出土したもので、58・59は鉢形土器の口縁部片で波状口縁である。58は波頂部直下にボタン状突起が貼付され、口唇部に沿って2条の平行沈線文が施される。59は地文にRLの単節斜縄文が施され、沈線文と磨消が施される。60は壺形土器の胴部片で、指頭疔痕状の刻み目をもつ隆帯が貼付され、貫孔のある把手をもつものである。

土製品

3は土器片を利用したもので、形状は三角形を呈し、周縁の一部が擦られている。

石器

8は縦型の石匙である。両面1側縁に刃部剝離調整が施される。9・10は楔形石器で両極剝離痕と上下2個1対の刃部を有する。10は1側縁に剝離調整が施され、削器類としても用いられたもののようである。11・12は不定形石器で側縁の一部に剝離調整が施されるものである。13は磨製石斧で、刃部の一部が欠損している。全面がよく研磨され、両側縁の稜線が明瞭である。刃部は所謂両凸刃で円刃である。14は擦痕を有する礫で、表裏両面の中央部に若干自然面を残すだけで、周縁部に多方向からの擦痕が認められる。

C II 01住居跡

〈遺構〉(図版第20図、写真図版第11図)

本住居跡は調査区中央の尾根平坦部に位置する。検出面は基本層序第VII層で、黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構はC II 03住居跡と重複しており、本遺構がC II 03住居跡の南東壁の一部を切って構築されている。

本遺構は上端555cm×575cm・下端510cm×470cmの東壁の中央付近が内側に凹む隅丸長方形を呈する。規模は当遺跡の中で最大のものである。長軸方向は真北から16度西偏する。壁高は北

壁76cm～75cm・南壁27cm・東壁36cm～65cm・西壁9cm～27cmで、最大値は北壁中央付近で87cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第Ⅷ層で、非常にかたくしまっている。床面はほぼ平坦であるが、北端から南端に向かって比高差17cm程で緩やかに傾斜して上がる。床面中央付近から2個の柱穴状小土坑が検出されている。深さは8cm～10cmの範囲であり、本遺構に伴う柱穴であるかどうかは不明である。貼り床や周溝等は認められない。カマド脇北東の床面から小土坑が1基検出されている。平面形は上端径64cm×44cm・上端径56cm×36cmの楕円形を呈し、深さは最大10cmである。底面は短軸の中央付近がやや上がる形状を示す。壁は内穹気味に直立する。本土坑は貯蔵穴と考えられる。床面及び埋土下部から多量の炭化材片が出土しており、本住居跡は焼失したものと考えられる。

埋土は上部から黒褐色土・暗褐色土・黒褐色土・褐色土の4層で構成される。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは南東側壁隅部に構築されている。遺存状態は不良で、全容を把握し得るものではない。袖部の幅は焼土の範囲及び袖材埋設の痕跡等からほぼ60cmである。燃焼部は径70cm×58cmの範囲に焼成を受け、最大層厚14cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は特に認められず、壁外方に向かって上がっていくものようである。

〈出土遺物〉(図版第21図、写真図版第26図)

土師器

(床面・カマド出土)

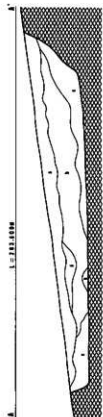
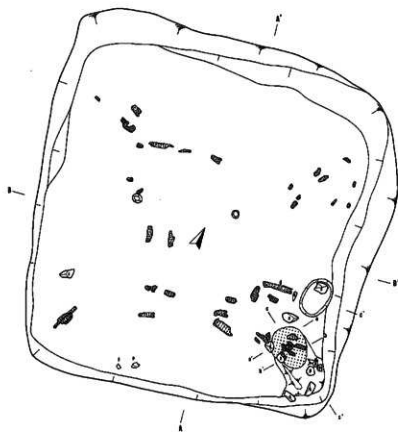
61・62は甕形土器で、ロクロ不使用のものである。61は底部～胴部下半約2分の1の残存で、器面調整は胴部外面にヘラケズリ、内面には横位及び斜位にナデが施されている。62は口縁部破片で、口縁部は強く短く外反する。63は南東壁際床面直上から出土した坏形土器である。口縁部～底部約3分の2の残存で、口径14.2cm・器高5.1cmである。ロクロ使用成形で、底部切り履しは回転糸切りである。底部外面の再調整は見られない。色調は橙色を呈する。

(住居跡内土坑出土)

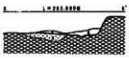
64は甕形土器の口縁部破片でロクロ不使用のものである。口縁部は短く外反する。口縁部は内外共ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリが施されている。

(埋土出土)

65～69は甕形土器の口縁部破片である。すべてロクロ不使用のものである。66は口縁部が緩く外反するが、他は強く短く外反する。65は胴部外面にヘラケズリ、内面にはナデが施される。66は胴部外面にハケメが施されている。70は坏形土器の口縁部～体部下半約3分の1の残存で、ロクロ使用成形のものである。口縁部は緩く外反する。内面にはミガキ調整後黒色処理が施さ



- a. 10 YR 5/6 黒褐色土 かくしまっている。粘性なし。明質褐色浮石粒混入2%。
- b. 10 YR 5/6 黒褐色土 上部から中部はかくしまっているが下部は軟かい。明質褐色及び黄褐色の浮石粒が混入。下部に炭化材小片が若干混入。
- c. 10 YR 5/6 褐色土 かくしまっている。粘性なし。壁際及び中央部付近に黒褐色土がブロックで混入。明質褐色浮石粒混入2%。炭化材片が中央下部に多量に混入。
- d. 10 YR 5/6 暗褐色土 かくしまっている。b層に近接するが色調は若干明るい。明質褐色浮石粒混入2%。



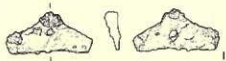
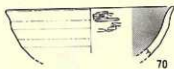
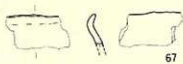
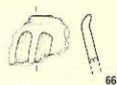
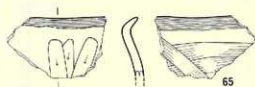
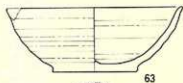
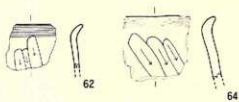
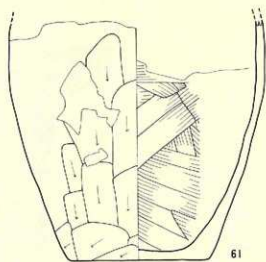
- a. 5 YR 5/6 赤褐色土 塊土。かくしまっている。地味良好。
- b. 10 YR 5/6 黒褐色土 ややしまりあり。炭化材片が混入。
- c. 10 YR 5/6 褐色土 二次シラス上部部層との境。
- d. 10 YR 5/6 暗褐色土 かくしまっている。炭化材小片及び塊土ブロックが混入。



- e. 10 YR 5/6 褐色土 しまりなし。炭化材小片が少量混入。



図版第20図 C II 01住居跡



(S = 1/2)

图版第21图 C II 01住居跡出土遺物

れている。

須恵器

71はカマドから出土したもので、甕形土器の胴部破片である。

金属製品

1、2は埋土から出土したものである。1は火打金で、形状は偏平な五角形を呈する。2は煙管の雁首である。火皿が大きく、首部が直線的である。

C III 02住居跡

〈遺構〉(図版第22図、写真図版第12図)

本住居跡は調査区中央南寄りの緩斜面にあり、C II 01住居跡の南5 mに位置する。検出面は基本層序第VI層で、検出面に黒～暗褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。

本遺構は上端355cm×350cm・下端320cm×310cmのほぼ隅丸方形を呈する。壁高は北西壁30cm～41cm・南東壁4cm～24cm・北東壁43cm～66cm・南西壁9cm～27cmである。斜面下位ほど削平が大きく壁高は低い。壁は床面から外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第VII層で、かたくしまっている。ほぼ平坦であるが、南東端から北西端、南西端から北東端に向かって緩やかに傾斜して上がる。柱穴は検出されていない。貼り床や周溝等は認められない。床面の北西壁際中央付近から小土坑が1基検出されている。平面形は上端径50cm×32・下端径40cm×26cmの楕円形を呈し、床面からの深さは最大18cmである。長軸方向は北西壁に直交する。埋土は炭化材片が多量に混入する褐色土で構成される。本土坑は貯蔵穴と考えられる。床面から多量の炭化材が出土しており、本住居跡は焼失したものと考えられる。

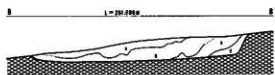
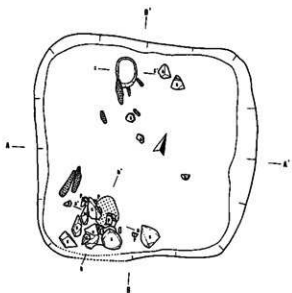
埋土は上部から黒褐色土・暗褐色土・褐色土・褐色土の4層で構成される。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは南東壁の西寄りに構築されている。攪乱が著しく、遺存状態は不良で全容を把握しうるものではない。袖部幅は焼土の範囲及び袖材埋設の痕跡等からほぼ55cmである。袖部には偏平な角礫を埋設していたものと考えられる。燃烧部は径58cm×35cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚8cmでレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は検出されていない。カマドの位置が斜面下位のため削平されたものか、あるいはB III 01住居跡等と同様、特に煙道をもたないタイプの可能性も考えられる。

〈出土遺物〉(図版第23図、写真図版第26～27図)

土師器

72～75はカマドから出土したもので、72・74はロクロ不使用の甕形土器で、75はロクロ使用



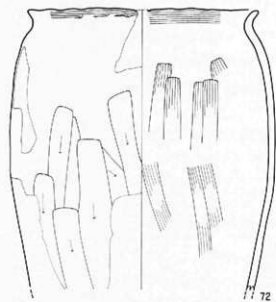
- a. 5 YR 5/ 明赤褐色土 雑土。かたくしまっている。
 b. 5 YR 5/ 赤褐色土 雑土。暗褐色土との混土。
 c. 10 YR 5/ 暗褐色土。

- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 全体に軟かい。粘性なし。明黄褐色浮石粒混入2%。炭化材小片が少量混入。しまり、粘性共になし。黒褐色土がブロックで混入20%。炭化材片が多量に混入。雑土粒が若干混入。
 b. 10 YR 5/ 暗褐色土
 c. 10 YR 5/ 褐色土
 d. 10 YR 5/ 褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石粒混入5%。炭化材片が少量混入。しまり、粘性共になし。微細雑土。明黄褐色浮石粒が若干混入。

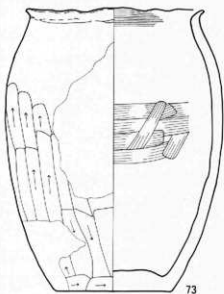
- e. 10 YR 5/ 褐色土 しまりあり。炭化材小片が多量に混入。



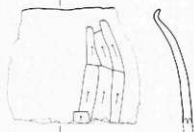
図版第22図 C III 02住居跡



72



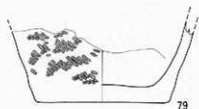
73



74



75



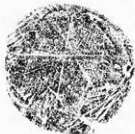
79



76



77



78



15

(74-S = 1/4,
他は S = 1/2)

図版第23図 C III 02住居跡出土遺物

成形の環形土器である。72は口縁部～胴部下半2分の1の残存で、器形は胴中央部に脹らみをもつもので、「く」の字状に短く外反する。器面調整は口縁部は内外共ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面には縦方向のヘラナデが施されている。73は口縁部～底部約3分の1の残存で器形は胴中央部に脹らみをもち、口縁部は短く外反する。口径14.4cm・器高22.7cmである。器面調整は口縁部が内外共ヨコナデ、胴部外面に縦、横方向のヘラケズリ、内面には横・斜方向のヘラナデが施されている。74は口縁部破片で、73と同一個体と思われる。75はクロク使用成形の環形土器底部片である。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後底部外面にナデ及びケズリによる再調整が施されている。

縄文土器

76～79は埋土から出土した鉢形土器である。76は口縁部が内弯気味に外反するもので、地文にLrの無節斜縄文が施され、平行沈線文と沈線による曲線文が施されている。77は折り返し口縁をもつもので、口縁部は無文で、胴部にはRLの単節斜縄文が施されている。78は外反する口縁部にRLの単節斜縄文が施され、下位は研磨されており、その下位では沈線文が横走するものようである。79は底部片で、LRの単節斜縄文が施され、底部外面には笹葉様圧痕をもつものである。

石器

15は埋土から出土したもので、搔器である。片面の端部と1側縁に刃部剝離調整が施されている。

DIV01住居跡

〈遺構〉(図版第24図、写真図版第13図)

本住居跡は調査区東端の丘陵突端部に位置し、遺構の東側は急壁を成している。地表観察の段階で周辺地形より若干凹みが見られ、表土を除去したところ、黒色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。検出面は基本層序第VI層である。

本遺構は上端425cm×400cm・下端400cm×360cmで、西壁と南壁の中央付近が内側に凹む隅丸長方形を呈する。長軸方向は真北から15度東偏する。壁高は北壁9cm～48cm・南壁9cm～50cm・東壁7cm～12cm・西壁54cm～56cmで、最大値は西壁中央付近で68cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

床面は基本層序第VIII層で、かたくしまっている。ほぼ平坦であるが、東端から西端に向かって比高差15cm程で緩やかに傾斜して上がる。床面から柱穴状小土坑が3個検出されている。中央付近に2個、南壁際中央付近から1個で、深さはP₁37cm・P₂34cm・P₃14cmである。貼り床や周溝等は認められない。また、南壁中央壁際からと西壁中央北寄りの壁際の床面から2基の

小土坑が検出されている。南壁際のは、平面形が上端径60cm×50cm・下端径50cmの不整形を呈し、深さは最大18cmである。西壁際のは平面形が上端径60cm×55cm・下端径40cm×30cmの不整形を呈し、深さは最大28cmである。底面は2基共ほぼ水平かつ平坦である。埋土はいずれも炭化材片の混じる黒褐色土で構成され、人為的な埋め戻しの様相を呈している。これら小土坑は本住居跡に伴うものと考えられる。

埋土は上部から黒色土・褐色土・暗褐色土・黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と考えられる。

カマドは遺存しない。南壁西寄りに径96cm×50cm、最大層厚8cmでレンズ状に焼成変化を受けた焼土が広がっており、カマドの存在が推測されるが、それ以外は認められない。

床面中央付近に焼土が3カ所分布しているが、焼成は不良でその性格等は不明である。

〈出土遺物〉(図版第25図、写真図版第27図)

土師器

80～84は埋土から出土した甕形土器の口縁部破片で、いずれもロクロ不使用のものである。80は胴上半部に脹らみをもつものと考えられ、口縁部は強く短く外反する。口縁部は内外ともヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面には横方向のナデが施されている。81は口縁部が緩く外反する。口縁部は内外共ヨコナデが施されている。82は口縁部が強く外反し、外面にヘラケズリ、内面には斜方向のナデが施されている。83は口縁部が緩く外反し、一部折り返し気味である。外面にヘラケズリ、内面には横・斜方向のナデが施されている。84は口縁部が直立し外面にヘラケズリ、内面には横方向のナデが施されている。

鉄製品

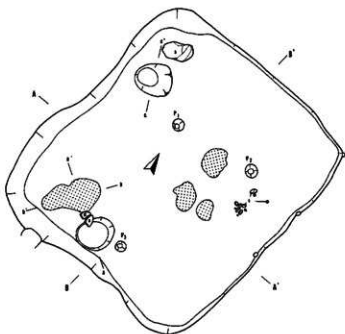
3・4は埋土から出土した紡錘車である。3は直径6.3cmで、中央部に貫孔を有する。4は軸も装填されたものである。軸の長さは3.6cmで端部が欠損したものと考えられる。紡錘車の直径は5.7cm前後と推定される。

縄文土器

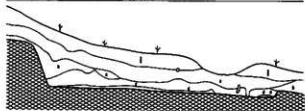
いずれも埋土から出土したもので、85は小型鉢形土器の口縁部片で、口縁部は短く外反する。無文である。86は深鉢の口縁部片でRLの単節斜縄文が施される。87は深鉢の底部片で、LRの単節斜縄文が施される。底部外面に網代痕をもつものである。

石器

16は埋土から出土した石鏃である。所謂凸基有茎鏃で、先端部の一部が欠損したものである。



A L=218.200 A'



- a. 10 YR 5/1 黒色土
しまりなし、弱い粘性あり。褐色土がブロックで散在。褐色土が明黄褐色の浮石粒が混入。
- b. 10 YR 5/6 褐色土
しまり、粘性共になし。暗褐色土がブロックで混入。明黄褐色浮石粒が10%程度混入。
- c. 10 YR 5/7 暗褐色土
しまり、粘性共になし。褐色土がブロックで混入30%。明黄褐色浮石粒が5%程度混入。
- d. 10 YR 5/8 暗褐色土
しまりなし、弱い粘性あり。粘土粒が若干混入。炭化材料が散在。明黄褐色浮石粒混入1%。
- e. 10 YR 5/9 黄褐色土
ややしまりあり、粘性あり。

B L=212.820 B'



- a. 2.5 YR 5/1 赤褐色土
b. 10 YR 5/6 暗褐色土

- c. 10 YR 5/7 暗褐色土
(小ビツ埋土)一埋土層

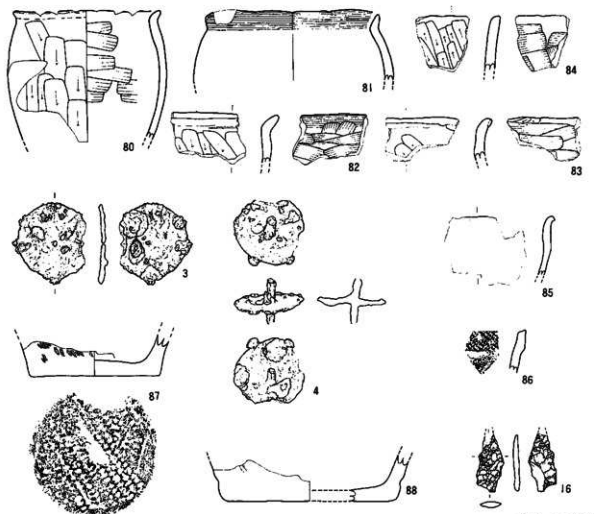
粘土。かたくしまる。暗褐色好。
ややしまりあり。炭化材及び埋土粒が混入。
しまりあり。粘性なし。粘土及び炭化材料が混入する。人為堆積層。



- a. 10 YR 5/9 黄褐色土
ややしまりあり。二次シラス褐色土のブロックとの混入。炭化材が多量に混入。人為的。人為堆積層。



図版第24図 DIV01住居跡



図版第25図 D IV 01住居跡出土遺物

(16-S = $\frac{1}{2}$)
他は S = $\frac{1}{3}$)

4. 住居跡状遺構

B IV 01住居跡状遺構 (図版第26図、写真図版第14図)

〈遺構〉

本遺構は調査区南側緩斜面の南端部に位置し、AIV01住居跡の東2.5mに隣接する。検出面は基本層序第 層である。本遺構はBIV101土坑と重複していると考えられるが、本遺構の斜面下位部分が削平されて遺存しないことから、新旧関係は不明である。

本遺構は残存する壁の状況から、平面形はほぼ方形を呈するものと考えられる。規模は北西

壁の長さが上端300cm・下端286cmで、壁高は最大21cmである。

床面は多少起伏があり、北東端から南西端に向かって緩やかに下がる。壁は床面から外傾して立ち上がる。カマドや柱穴等は検出されていない。貼り床や周溝は認められない。

埋土は上部から暗褐色土・褐色土の2層で構成される。層位状況から自然堆積と考えられる。

〈遺物〉

89～91は埋土から出土したものである。89は土師器高坏の底部片であり、内面には黒色処理が施されている。90・91は縄文土器で、90は鉢形土器の胴部片で、LRの単節斜縄文が施された後2条の平行沈線文が施される。91は底部片で無文である。

〈時期〉

本住居跡状遺構の時期は、比定し得る直接的資料がなく不明である。

5. 土坑

B III 101土坑

〈遺構〉(図版第27図、写真図版第15図)

本遺構は調査区南側の緩斜面に位置し、B III 02住居跡の北2.5mに隣接する。検出面は基本層序第V層である。検出面には礫が散在していた。

遺構は攪乱を受けているため詳細は不明であるが、平面形は上端・下端共に楕円形を呈するものと考えられる。短軸の断面形は逆台形を呈する。規模は上端長軸160cm前後・短軸130cm、下端長軸130cm前後・短軸105cmで深さは最大40cmである。長軸の方向はほぼ東西方向を示している。

底面は多少起伏はあるがほぼ水平である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は6層に細別されるが、層位状況から本遺構は人為的な埋め戻しの様相を呈している。

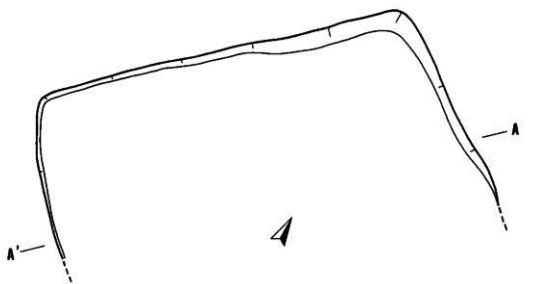
〈出土遺物〉(図版第32図、写真図版第28図)

埋土最上部から17の磨石が出土している。四角柱状の礫で、表裏両面の中央部に径5～7cmの擦痕が認められる。また4面の中央部付近に各々凹みが認められ、凹石としての機能も果していたと考えられる。

B IV 101土坑

〈遺構〉(図版第27図、写真図版第15図)

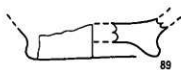
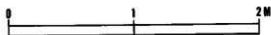
本遺構は調査区南側緩斜面の南端部に位置し、B IV 01住居跡状遺構と重複している。遺構の新旧関係はB IV 01住居跡状遺構の斜面下位部分が遺存しないことから不明である。検出面は基本層序第IV層である。



A L = 255.200M A'



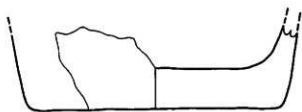
- a. 10 YR 5/1 暗褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石殻が若干混入。
- b. 10 YR 5/1 褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石殻が若干混入。



89



90



(遺物はS = 3/4)

図版第26図 B IV 01住居跡状遺構

平面形は上端・下端共ほぼ円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は上端直径110cm・下端直径90cmで、深さは最大30cmである。

底面はほぼ平坦であるが、北西端から南東端に向かって緩やかに下がる。傾斜方向は地形の傾斜方向に同じである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒色土・暗褐色土・褐色土の3層で構成され、層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D II 101土坑

〈遺構〉(図版第27図、写真図版第15図)

本遺構は調査区中央部東寄りの緩斜面に位置し、D II 102土坑に隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は上端が不整な円形で、下端が不整な隅丸長方形を呈する。長軸の断面形は長方形に近い。規模は上端直径125cm前後、下端長軸90cm・短軸70cmで深さ最大60cmである。長軸の方向はほぼ南北方向を示している。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面から外傾気味に立ち上がるが、東壁は崩落により底面から大きく外反して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土・褐色土の2層に大別される。褐色土は壁の崩落土を主体とし、暗褐色土は人為堆積の様相を呈している。このことから本土坑は若干放置されたあとに埋め戻されたものと考えられる。

〈出土遺物〉

人為堆積層から須恵器破片が2点出土している。これらはAIV02住居跡の埋土中から一括して出土した須恵器甕と接合している。

D II 102土坑

〈遺構〉(図版第28図、写真図版第16図)

本遺構は調査区中央部西寄りの緩斜面に位置し、D II 101土坑の南1.5mに隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は上端・下端共にほぼ円形で、断面形は浅い逆台形を呈する。規模は上端直径100cm・下端直径70cmで深さは最大32cmである。

底面は若干起伏するがほぼ水平である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は暗褐色土と褐色土で構成され、壁際には壁の崩落土が堆積する。層位状況から自然堆

積と考えられる。

〈出土遺物〉(図版第28図、写真図版第28図)

92・93は埋土から出土した鉢形土器の口縁部片で、92はRLの単節斜縄文が施され、93は無文地に横位の平行沈線文が施されている。18は不定形石器で、表面の側縁の一部に剝離調整が施されている。

D II 103土坑

〈遺構〉(図版第28図、写真図版第16図)

本遺構はD II区中央部の斜面に位置し、D II 104土坑に隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は上端・下端共にほぼ円形で、断面形は上端が開く「U」字状を呈する。規模は上端直径60cm・下端直径45cmで深さは最大60cmである。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別され、埋土下部及び壁際には壁の崩落土が堆積する。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D II 104土坑

〈遺構〉(図版第28図、写真図版第16図)

本遺構はD II区中央部北寄りの斜面に位置し、D II 103土坑の北2 mに隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は上端・下端共に円形で、断面形は上端が開く「U」字状を呈する。規模は上端直径70cm、下端直径40cmで、深さは最大78cmである。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面からやや外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別され、埋土下部の壁際には壁の崩落土が堆積する。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D III 101土坑

〈遺構〉(図版第29図、写真図版第17図)

本遺構は調査区東側斜面の東端部に位置し、D III 102土坑に隣接する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端の南側一部が攪乱を受けているが、上端が西側に脹らみをもつ隅丸方形で、下端は隅丸長方形を呈する。長軸の断面形は長方形である。規模は、上端が1辺200cm、下端長軸160cm・短軸140cmで深さは最大80cmである。下端長軸方向はほぼ南北方向を示している。

底面は壁隙での比高差はみられないが、西側部分が径130cm×110cm、深さ3～5cm程で楕円形状に浅く凹んでいる。壁は底面からほぼ垂直に近い立ち上がりを示すが、上端付近で斜面上位ほど外反する。

埋土はおもに黒色土・黒褐色土・明黄褐色土で構成される。埋土中部～下部にかけての黒褐色土には、十和田a火山灰と考えられる灰白色火山灰がブロック状及び帯状に含まれている。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D III 102土坑

〈遺構〉(図版第29図、写真図版第17図)

本遺構は調査区東側斜面の東端部に位置し、D III 101土坑の南西2.5mに隣接する。検出面は基本層序第V層である。

全体の形状はフラスコ状で、平面形は上端・下端共に不整な円形を呈する。規模は上端径100cm×90cm、下端径120cm前後で、深さは最大50cmである。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面から内湾して立ち上がり、中位付近から直立して上端に達する。

埋土は上部から明黄褐色土・褐色土・暗褐色土・褐色土で構成される。層位状況から人為的な埋め戻しの様相を呈する。

〈出土遺物〉(図版第29図、写真図版第28図)

94・95は埋土から出土した鉢形土器の破片で、いずれもLRの単節斜縄文が施されている。

D III 103土坑

〈遺構〉(図版第29図、写真図版第17図)

本遺構はD III 102土坑の南西4.5mで、調査区南東部に位置する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端・下端共にほぼ円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は上端直径64cm前後、下端直径40cm前後で、深さは最大30cmである。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土・褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D III 104土坑

〈遺構〉(図版第30図、写真図版第18図)

本遺構は調査区東側斜面の北東端部に位置する。検出面は基本層序第IV層である。検出面に黒色土がほぼ方形に広がっており、住居跡と考えて精査を行ったが、土取り穴状の凹地と考えられ、その埋土を切って本遺構が構築されている。また本遺構は凹地に堆積した十和田a火山灰を掘り込んで構築されているものである。

平面形は上端の長軸の一辺が遺存しないが、残存する部分の形状から、上端・下端共にほぼ長方形で、長軸の断面形も長方形を呈する。規模は上端長軸190cm・短軸130cm前後、下端長軸190cm・短軸120cmで、深さは最大100cmである。長軸の方向は北北西―南南東方向を示している。底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面から一部内傾気味に立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ちあがる。

埋土は上部から黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黒色土に大別される。埋土上部～下部の黒色土及び黒褐色土中には十和田a火山灰がブロック状で混入する。層位状況から自然堆積と考えられる。

〈出土遺物〉(図版第33図、写真図版第28図)

いずれも埋土から出土したものである。

土師器

96、1点の出土で、壺形土師の胴上半部の破片である。ロクロ不使用のもので、外面にハケメ内面にナデが施されている。

縄文土器

97は深鉢で底部は欠損している。器形は頸部が若干くびれ、口縁部が外反するもので、波状部下に2段施され、その下位には沈線による曲線文と磨消による波状文・渦巻文が施されている。98～101は鉢の口縁部片で、いずれも折り返し口縁である。98・100は無文地に沈線文が施されている。99は口唇部に沿って隆帯が巡らされ、その上にRLの単節斜縄文が施され、その下位は無文である。101は肥厚部が無文で、胴部にはLRの単節斜縄文が施されている。102は深鉢の胴部片で、無文地に低い隆帯が縦横に貼付され、隆帯上にはRLの単節縄文が施されている。103は小鉢形土器で、RLの単節斜縄文が施されている。

土製品

4・5は土偶である。4は土偶頭部で、顔面は逆台形を呈する。鼻部は隆起帯として表現され、鼻孔は刺突によっている。目・口は沈刻で表現され、頬部には縦に1条の沈線が施されて

いる。頭部は頭髪を表現したようなもので、短い沈線が施され、後頭部は外方に張り出している。5は板状土偶の肩部で、沈線文が施されているが詳細は不明である。肩部から斜位に穿孔が認められる。6は土器片利用の三角形土製品で、周縁全体が磨られている。施文はRLの単節斜縄文である。

石器

19は石鏃で凸基有基族で、小型である。20・21は掘器である。20は自然面を残すもので、片面の1端部と側縁に刃部の剝離調整が施されている。21は周縁全体に剝離調整が施され、表裏交互剝離によって刃部は鋸歯状を呈している。22は抉入石器で、片面1側縁に刃部の剝離調整が施されている。23は楔形石器の破片で、両極剝離痕が認められる。24は不定形石器で、1側縁の一部に剝離調整が施されている。25は凹石で、裏面は欠落している。表面中央部に2カ所の凹みが認められる。

D III 105土坑

〈遺構〉(図版第30図、写真図版第18図)

本遺構は調査区東側斜面で、D III 101土坑の西4 mに位置する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端・下端共にほぼ円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は上端直径120cm・下端直径98cmで、深さは最大20cmである。

底面は平坦であるが、西端から東端に向かって傾斜して下がる。傾斜の方向は地形の傾斜方向と同じである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は浮石の混入した黄褐色土の単層で、層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D III 106土坑

〈遺構〉(図版第30図、写真図版第18図)

本遺構は調査区東側斜面に位置し、D III 109土坑の南東に隣接する。検出面は基本層序第V層である。

全体の形状はフラスコ状で、平面形は上端・下端共に不整な円形を呈する。短軸の断面形は台形状である。規模は上端長軸110cm・短軸90cm、下端長軸150cm・短軸130cmで、深さは最大50cmである。長軸の方向は東西方向を示している。

底面は水平かつ平坦である。壁は底面から内弯気味に立ち上がる。

埋土は上部から褐色土・暗褐色土・黒褐色土の3層に大別される。埋土中部～下部は層位状

況から人為堆積層と考えられる。

〈出土遺物〉(図版第32図、写真図版第29図)

いずれも埋土から出土したもので、104～107は縄文土器の小型鉢形土器片である。104は頸部が若干くびれ、口縁部が外反するもので、平縁である。地文にLRの無節斜縄文が施された後、平行沈線文と沈線による曲線文・磨消によって波状文が施されている。105は波状口縁で、LRの単節斜縄文が施された後、沈線文と磨消が施されている。106は105と同一個体と考えられる。107は底部片で無文である。7は板状土偶の肩部で、乳房を表現するものとして貼付されたと考えられる突起の剥落痕が認められる。沈線文が施され、肩部から斜位方向の穿孔が認められるが、詳細は不明である。

D III 107土坑

〈遺構〉(図版第31図、写真図版第18図)

本遺構は調査区東側斜面の中央平坦部寄りに位置し、D III 108土坑の南1 mに隣接する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端・下端共に不整な楕円形で、短軸の断面形は不整な台形状を呈する。規模は上端長軸90cm・短軸60cm、下端長軸94cm・短軸64cmで、深さは最大20cmである。長軸の方向は南北方向を示している。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は東側の壁が底面から垂直気味に立ち上がるが、他は底面から内傾して立ち上がる。

埋土は上部から褐色土・黄褐色土・暗褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と考えられる。

〈出土遺物〉(図版第31図、写真図版第29図)

108は埋土から出土した鉢形土器の口縁部片である。平縁で、RLRの複節斜縄文が施されている。

D III 108土坑

〈遺構〉(図版第31図、写真図版第18図)

本遺構は調査区東側斜面に位置し、D III 107土坑の北1 mに隣接する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端・下端共に不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は上端直径70cm・下端直径50cmで、深さは最大25cmである。

底面はほぼ平坦であるが、西端から東端に向かって緩やかに下がる。傾斜の方向は地形の傾

斜方向に同じである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は褐色土を主体として構成される。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

D III 109土坑

〈遺構〉(図版第31図、写真図版第19図)

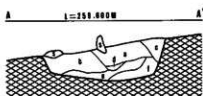
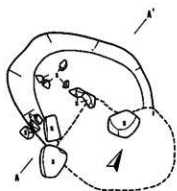
本遺構は調査区東側斜面に位置し、D III 106土坑の北東に隣接する。検出面は基本層序第V層である。検出面にかたくしまった褐色土がほぼ楕円形状に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。また検出面中央部から縄文土器の深鉢が潰れた状態で出土している。

平面形は上端・下端共にほぼ楕円形を呈するが、下端が西方向に張り出す形状を示す。長軸の断面形は不整な台形状を呈する。規模は上端長軸110cm・短軸90cm、下端長軸125cm・短軸80cmで、深さは最大55cmである。長軸の方向はほぼ東西方向を示している。底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は東側の壁は底面から外傾して立ち上がるが、西側の壁は底面から内弯気味に立ち上がり、上端付近で直立する。

埋土は上部から褐色土・にぶい褐色土・黄褐色土の3層に大別される。層位状況から、本遺構は人為的な埋め戻しの様相を呈している。

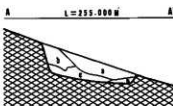
〈出土遺物〉(図版第32図、写真図版第29図)

109は検出面から潰れた状態で出土した深鉢である。ほぼ完形で、折り返し口縁をもち、平縁である。RLの単節斜縄文が施されている。110・111は埋土から出土したもので、110は鉢形土器の口縁部片で、燃系文が施されている。111は壺形土器の口縁部～胴上部破片で、頸部に隆帯が2段に渡って横位に巡らされ、隆帯に沿って沈線が施されている。隆帯間には縦位の橋状把手が付されている。26・27は埋土から出土した剥片石器で、26は石錐である。上端部が欠損しつまみをもつものかどうかは不明である。横断面形は三角形で、三方の側縁に刃部の剝離調整が施されている。27は楔形石器の破片で、両極剝離痕を有するものである。



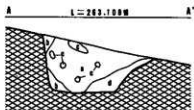
- a. 10 YR 6/ 褐色土 しまりなし。暗褐色土との混土。
 b. 10 YR 6/ 暗褐色土 しまりなし。褐色浮石混入1%。
 c. 10 YR 6/ におい黄褐色土 しまりなし。弱い粘性あり。
 d. 10 YR 6/ 褐色土 しまりなし。a層に類似するが暗褐色土の混入がa層より多い。
 e. 10 YR 5/ 暗褐色土 ややしまりあり。粘性あり。汚れた褐色土との混土。
 f. 10 YR 6/ 褐色土 ややしまりあり。弱い粘性あり。におい黄褐色土がアロックで混入。

B III 101土坑



- a. 10 YR 6/ 褐色土 しまり、粘性共になし。褐色土がアロックで混入。
 b. 10 YR 6/ 暗褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石混入2%。
 c. 10 YR 6/ 褐色土 しまり、粘性共になし。暗褐色土がアロックで混入。

B IV 101土坑



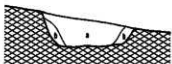
- a. 10 YR 6/ 暗褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石混入2%。地土混入1%。炭化材料が少量混入。
 b. 10 YR 6/ 褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石混入若干混入。
 c. 10 YR 6/ 褐色土 八甲火山塊アロック。明黄褐色浮石混入若干混入。
 d. 10 YR 6/ 褐色土 しまりなし。暗褐色土との混土。明黄褐色浮石混入若干混入。

D II 101土坑

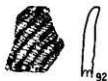
図版第27図



A L=293.000 M A'



- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 しまり、粘性共になし。褐色土がブロックで混入7%、明黄褐色浮石粒混入3%。織土及び炭化材小片が若干混入。
 b. 10 YR 5/ 褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石粒混入1%。炭化材小片が若干混入。



92



93



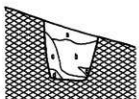
18

D II 102土坑

(遺物は S = 1/2)

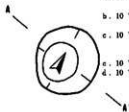


A L=263.200 M A'



- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 しまり、粘性共になし。褐色土ブロック及び明黄褐色浮石粒が混入。
 b. 10 YR 5/ 原褐色土 ややしりあり。粘性なし。明黄褐色浮石粒混入2%。
 c. 10 YR 5/ 1-2/ 暗褐色-褐色土 ややしりあり。粘性なし。明黄褐色浮石粒混入5%。
 d. 10 YR 5/ 1-2/ 褐色土 ややしりあり。硬固粘土。明黄褐色浮石粒混入2%。

D II 103土坑



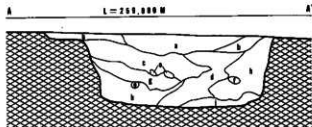
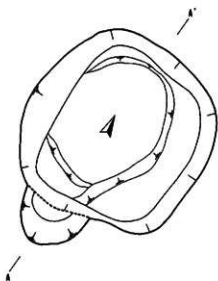
A L=263.200 M A'



- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 しまり、粘性共になし。褐色土ブロック及び明黄褐色浮石粒が混入。
 b. 10 YR 5/ 原褐色土 ややしりあり。粘性なし。明黄褐色浮石粒混入2%。
 c. 10 YR 5/ 1-2/ 暗褐色-褐色土 ややしりあり。粘性なし。明黄褐色浮石粒混入5%。
 d. 10 YR 5/ 1-2/ 褐色土 ややしりあり。硬固粘土。明黄褐色浮石粒混入2%。
 e 層に類似するが色調は若干平明い。

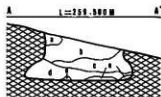
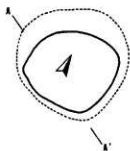
D II 104土坑

図版第28図



- a. 7.5 YR 5/1 黒色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石粒混入。
- b. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまり、粘性共になし。黒色土が層状に混入10%。褐色土がブロックで混入。しまり、粘性共になし。十和田の火山灰がブロックで散在。褐色土ブロック及び明黄褐色浮石粒が若干混入。
- c. 10 YR 5/1 黒褐色土 しまりなし。弱い粘性あり。中央部に十和田の火山灰が層状に混入。褐色土ブロックが若干混入。
- d. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまりなし。粘性共になし。十和田の火山灰がブロックで若干混入。
- e. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまりなし。弱い粘性あり。暗褐色土との混土。褐色土がブロックで混入。
- f. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまりなし。粘性共になし。十和田の火山灰がブロックで若干混入。
- g. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまりなし。弱い粘性あり。暗褐色土との混土。褐色土がブロックで混入。
- h. 10 YR 5/6 暗褐色土 しまり、粘性共になし。黒褐色土がブロックで混入。
- i. 10 YR 5/6 明黄褐色土 ややしまりあり。弱い粘性あり。暗褐色土。明黄褐色浮石粒が若干混入。

D-101土坑

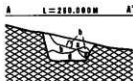


- a. 10 YR 5/6 明黄褐色土 かくくしまっている。明黄褐色浮石粒混入2%。
- b. 10 YR 5/6 褐色土 しまり、粘性共になし。黒褐色土との混土。明黄褐色浮石粒が多量に混入。
- c. 10 YR 5/6 褐色土 かくくしまっている。明黄褐色浮石粒が混入2%。
- d. 10 YR 5/6 暗褐色土 砂質土。かくくしまっている。褐色土との混土。
- e. 7.5 YR 5/6 褐色土 かくくしまっている。

D-102土坑



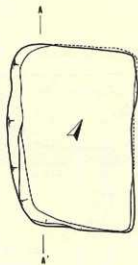
(遺物は S=1/2)



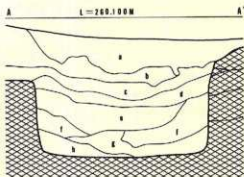
- a. 10 YR 5/6 黒褐色土 しまり、粘性共になし。明黄褐色浮石粒混入1%。
- b. 10 YR 5/6 褐色土 しまりなし。黒褐色土がブロックで混入。明黄褐色浮石粒が若干混入。
- c. 10 YR 5/6 黒褐色土 しまり、粘性共になし。a層に近似。褐色土がブロックで混入。
- b. 7.5 YR 5/6 褐色土 かくくしまっている。黒褐色土がブロックで混入。

D-103土坑

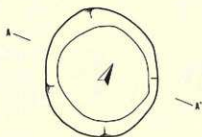
図版第29図



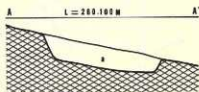
D III 104土坑



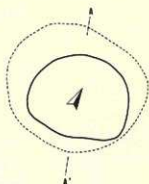
- a. 10 R 汚 褐色土 しまり、粘性弱になし、赤褐色土がブロックで混入、明黄褐色浮石粒が混入2%。
- b. 10 YR 汚 褐色土 しまり、粘性弱になし、褐色土及び干粒田・火山灰がブロックで混入、炭化材料が少量混入。
- c. 10 YR 汚 赤褐色土 しまり、粘性弱になし、明黄褐色浮石粒混入2%、褐色土がブロックで混入。
- d. 10 YR 汚 赤褐色土 しまり、粘性弱になし、褐色土が多数に混入、明黄褐色浮石粒混入2%。
- e. 10 YR 汚 赤褐色土 しまり、粘性弱になし、干粒田・火山灰がブロックで混入5%。
- f. 10 YR 汚 暗褐色土 しまりなし、褐色土との混入。
- g. 10 YR 汚 褐色土 しまりなし、干粒田・火山灰が混入。
- h. 10 YR 汚 赤褐色土 しまりなし、褐色土がブロックで混入、炭化材料が少量混入。



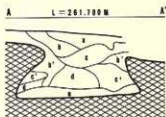
D III 105土坑



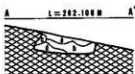
- a. 10 YR 汚 黄褐色土 しまりなし、暗褐色土がブロックで混入、明黄褐色浮石粒混入2%。



D III 106土坑



- a. 10 YR 汚 褐色土 しまり、粘性弱になし、明黄褐色浮石粒混入1%。
- b. 10 YR 汚 褐色土 しまり、粘性弱になし、明黄褐色浮石粒混入2%。
- c. 10 YR 汚 褐色土 b層に類似するが色調が若干暗い。
- d. 10 YR 汚 暗褐色土 しまり、粘性弱になし、褐色土との混入、明黄褐色浮石粒混入2%。
- e. 10 YR 汚 暗褐色土 c層に類似する、炭化材料が多数に混入。
- f. 10 YR 汚 赤褐色土 ややしまりあり、粘性なし、明黄褐色浮石粒及び炭化材料が若干混入。
- g. 10 YR 汚 暗褐色土 かたまりまって、粘性なし、細かい黄褐色土がブロックで混入、炭化材料が少量に混入。

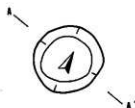


108

(遺物は $S = \frac{1}{2}$)

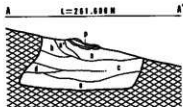
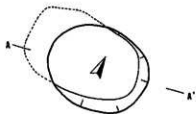
- a. 10 YR 5/ 褐色土 ややしまりあり。暗褐色土がブロックで混入20%。明黄褐色浮石粒混入3%。
- b. 10 YR 5/ 褐色土 a層に類似するか暗褐色土の混入がa層より多く40%程度。
- c. 10 YR 5/ 黄褐色土 ややしまりあり。粘性なし。硬弱活土。明黄褐色浮石粒が若干混入。
- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 かくしまっている。明黄褐色浮石粒混入3%。

D III 107土坑



- a. 10 YR 5/ 褐色土 かくしまっている。粘性なし。暗褐色の砂質土が混入50%。
- b. 10 YR 5/ 褐色土 かくしまっている。粘性なし。明黄褐色浮石粒混入1%。
- c. 10 YR 5/ 褐色土 かくしまっている。粘性なし。b層に類似するか色調が若干暗い。
- d. 10 YR 5/ 褐色土 かくしまっている。粘性なし。明黄褐色浮石粒が若干混入。

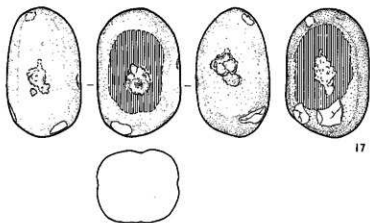
D III 108土坑



- a. 10 YR 5/ 褐色土 かくしまっている。粘性なし。濃い褐色土がブロックで混入。明黄褐色浮石粒混入。炭化材小片が混入。
- a'. 10 YR 5/ 褐色土 a層に類似するか色調が若干明るい。
- b. 10 YR 5/ 黒褐色土 砂質土。かくしまっている。褐色土がブロックで混入。明黄褐色浮石粒混入3%。
- c. 7.5Y 5/ 濃い褐色土 かくしまっている。強い粘性あり。黄褐色土がブロックで混入。
- d. 10 YR 5/ 褐色土 しまりあり。強い粘性あり。黒褐色土がブロックで混入。明黄褐色浮石粒が若干混入。
- e. 10 YR 5/ 黄褐色土 かくしまっている。強い粘性あり。明黄褐色浮石粒が若干混入。

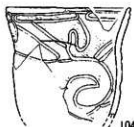
D III 109土坑

図版第31図



17

B III 101土坑(17)



104

D III 106土坑(104 - 107, 7)



105



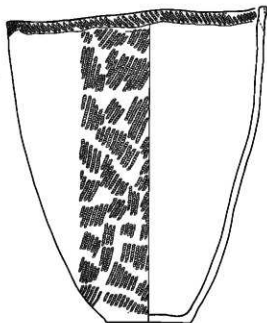
106



107



7



D III 109土坑(109-111, 26-27)



111



110



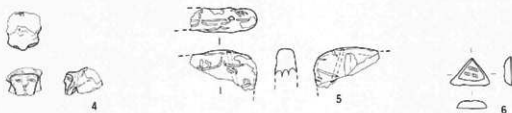
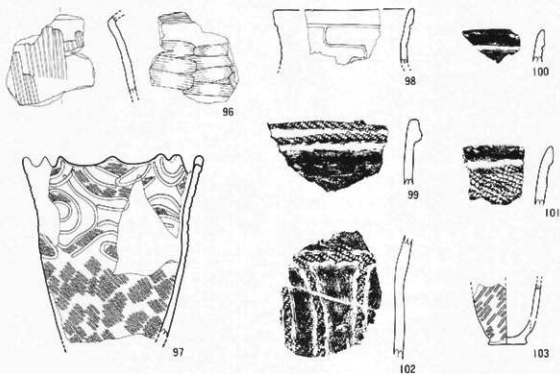
27



26

(109-S = $\frac{1}{4}$, 27-S = $\frac{1}{2}$)
他は S = $\frac{1}{3}$

图版第32图 土坑内出土遗物



D III 104土坑出土遺物

(4・5・19-21・24-S = $\frac{1}{2}$,
96-98・25 S = $\frac{1}{4}$, 他は S = $\frac{1}{2}$)

図版第33図

6. 陥し穴状遺構

C I 102陥し穴状遺構

〈遺構〉(図版第34図、写真図版第20図)

本遺構は調査区北西端部に位置しC I 103陥し穴状遺構と1.3mの間隔をおいて並列する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端・下端共に不整な溝状で、短軸の断面形は「V」字状を呈する。規模は上端長軸354cm・短軸50cm、下端長軸270cm・短軸20cmで、深さは最大84cmである。長軸の方向は北北西—南南東方向を示している。

底面は若干起伏しながら南南東端から北北西端に向かって傾斜して上がる。長軸両端の壁は南南東端では底面から外傾気味に立ち上がり、中位付近から外反して上端に達する。北北西端の壁は削平・崩落の度合いが大きく、底面から外傾して緩やかに上がる。

埋土は上部から暗褐色土・褐色土の2層に大別され、褐色土層は壁の崩落土を主体としている。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

C I 103陥し穴状遺構

〈遺構〉(図版第34図、写真図版第20図)

本遺構は調査区北西端部に位置し、C I 102陥し穴状遺構と並列する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は上端・下端共に不整な溝状で、斜面下位の南南東端部が脹らむ形状を示す。短軸の断面形は上端が開く「U」字状を呈する。規模は上端長軸350cm・短軸60cm、下端長軸276cm・短軸25cmで、深さは最大80cmである。長軸の方向は北北西—南南東方向を示している。

底面は起伏しながら蛇行気味に南南東端から北北西端に向かって傾斜して上がる。製軸両端の壁は、南南東端では底面から内傾して立ち上がり、北北西端では底面から外傾して緩やかに上がる。

埋土は暗褐色土と褐色土との互層で構成され埋土下部には壁の崩落土が堆積する。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

C II 101陥し穴状遺構

〈遺構〉(図版第34図、写真図版第20図)

本遺構はC III区中央部西寄り、C II 03住居跡の西3mに位置する。検出面は基本層序第VI

層である。検出面に中礫浮石を主体としたにぶい黄褐色土がほぼ円形状に広がっていたことから遺構の存在を確認した。

全体の形状はほぼ円筒形で、断面形は上端が開く「U」字状を呈する。規模は上端直径170cm、下端直径60cmで、深さは最大110cmである。底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。底面中央部から副穴が1基検出されている。上端が直径8cmの円形で、深さは28cmである。枕跡と考えられる。

埋土は上部から、にぶい黄褐色土・黒色土・黄褐色土・褐色土・にぶい褐色土の5層に大別される。埋土上部のにぶい黄褐色土は中礫浮石である。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

7. 炭竈跡

C I 101炭竈跡

〈遺構〉(図版第35図、写真図版第19図)

本遺構は調査区北西端部に位置し、C I 01住居跡の北に隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は上端・下端共に不整な長方形で、断面形は浅い逆台形を呈する。規模は上端長軸130cm・短軸100cm、下端長軸120cm・短軸80cmで深さは最大16cmである。長軸の方向はほぼ東西方向を示し、等高線にほぼ平行する。

底面はほぼ水平かつ平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は黒褐色土の単層で、埋土下部には炭化材片が多量に混入している。

遺物は出土していない。

B IV 102炭竈跡

〈遺構〉(図版第35図、写真図版第19図)

本遺構は調査区南側緩斜面に位置し、B III 02住居跡の南東0.5mに隣接する。検出面は基本層序第V層である。

本遺構は斜面下位の一部分が擾乱を受けているが、平面形は上端・下端共に不整な楕円形と推定される。規模は上端長軸240cm前後・短軸200cm、下端長軸210cm前後・短軸160cmで、深さは最大38cmである。長軸の方向は真北から12度西偏し、等高線にほぼ直交する。

底面は中央部がやや高くなっており、その部分に径33cm×30cmで焼土が広がっており、燃焼部と考えられる。焼土の斜面上方及び両脇は浅く凹んでおり、製炭部と考えられる。長軸方向の底面は地形斜面に沿って、南端から北端に向かって緩やかに上がる。壁は外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土・褐色土・暗褐色土の3層に大別される。埋土下部及び底面から栗の炭化材が多量に出土している。層位状況から自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

8. 焼土遺構 (図版第35図、写真図版第21図)

D II F 焼土

本焼土はC II 02住居跡の北1 mに位置する。検出面は基本層序第V層である。

焼土は径60cm×48cmの範囲に広がっているが、焼成は不良である。遺物は出土しておらず、周辺状況等からも本遺構の時期や性格を示すものは得られていない。

D II V 焼土

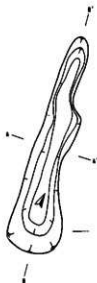
本焼土はD II 101土坑の北西50cmに位置する。検出面は基本層序第V層である。

焼土は径45cm×42cmの範囲に広がっており、焼成は良好である。遺物は出土しておらず、周辺状況等からも本遺構の時期や性格を示すものは得られていない。

D III K 焼土

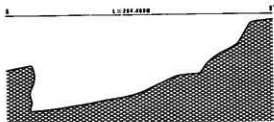
本焼土はD III 106土坑の南2 mに位置する。検出面は基本層序第V層である。

焼土は径33cm×35cmの範囲に広がっており、焼成は良好である。遺物は出土しておらず、周辺状況等からも本遺構の時期や性格を示すものは得られていない。



- a. 10 YR 7/1 暗褐色土 ややしまりあり、粘性なし。褐色土との混入。明黄褐色浮石粒混入3%。
- b. 10 YR 7/1 褐色土 かくしまっている。明黄褐色浮石粒混入1%。
- c. 10 YR 7/1 褐色土 しまりなし。硬質腐土。
- d. 10 YR 7/1 褐色土 かくしまっている。粘性あり。硬質腐土。明黄褐色浮石粒若干混入。

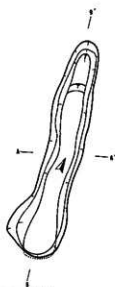
C I 102陥し穴状遺構



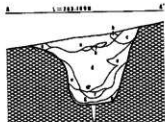
- a. 10 YR 7/1 暗褐色土 ややしまりあり、粘性なし。褐色土との混入。明黄褐色浮石粒混入2%。
- b. 10 YR 7/1 褐色土 ややしまりあり、粘性なし。明黄褐色浮石粒混入1%。
- c. 10 YR 7/1 暗褐色土 かくしまっている。a層に類似するが色調が若干明るい。明黄褐色浮石粒混入1%。
- d. 10 YR 7/1 褐色土 かくしまっている。強い粘性あり。にじい黄褐色土との混入。灰白色浮石粒が若干混入。硬質腐土。



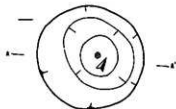
C I 103陥し穴状遺構



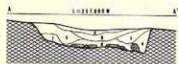
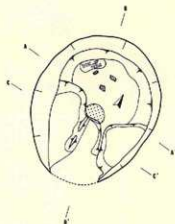
- a. 10 YR 7/1 にじい黄褐色土 砂質の中核浮石層でかくしまっている。径2-3mmの黄褐色浮石も混入。
- b. 10 YR 7/1 明黄褐色土 径2-5mmの明黄褐色浮石を主体とする中核浮石層。灰白色浮石が混入5%。
- c. 7.5 YR 7/1 褐色土 しまりなし。明黄褐色浮石が混入2%。
- d. 10 YR 7/1 黒色土 褐色土が混入。褐色浮石粒及び明黄褐色浮石粒が混入。
- e. 10 YR 7/1 黄褐色土 ややしまりあり、強い粘性あり。暗褐色土がブロックで混入20%。明黄褐色浮石粒混入1%。
- f. 10 YR 7/1 褐色土 しまりなし。強い粘性あり。暗褐色土が混入10%。
- g. 10 YR 7/1 褐色土 しまりなし。強い粘性あり。暗褐色土が若干混入。壁の腐落土。
- h. 7.5 YR 7/1 にじい褐色土 ややしまりあり、粘性あり。壁の腐落土。



C II 101陥し穴状遺構



図版第34図



- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 しまり、粘性なし。褐色土がブロックで散在。炭化材小片が少量混入。
- b. 10 YR 5/ 暗褐色土 ややしまりあり。粘性なし。a層に類似するが、a層より炭化材片が多い。
- c. 10 YR 5/ 褐色土 しまりなし。暗褐色土との混土。明黄褐色浮石混入1%。炭化材小片が若干混入。
- d. 10 YR 5/ 暗褐色土 ややしまりあり。粘性なし。炭化材片が多量に混入。焼土がブロックで散在。
- e. 10 YR 5/ 褐色土 しまり、粘性なし。明黄褐色浮石混入2%。
- 10 YR 5/ 黄褐色土 しまりなし。明黄褐色浮石粒が若干混入。

B IV 102 炭灰跡



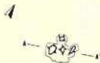
- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 しまりあり。炭化材片が多量に混入。焼土粒が散在。

C I 101 炭灰跡



- a. 2.5 YR 5/ 明赤褐色土 焼土。もろくずれやすい。
- b. 7.5 YR 5/ 褐色土 ややかたい。若干焼成を受けている。

D II F 焼土



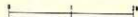
- a. 5 YR 5/ 明赤褐色土 焼土。かたくなっている。浮石が若干混入。
- b. 10 YR 5/ 褐色土 かたくなっている。褐色土との混土。明黄褐色浮石粒混入10%。

D II V 焼土



- a. 10 YR 5/ 暗褐色土 焼土が混入する。
- b. 5 YR 5/ 明赤褐色土 焼土。非常にかたくなっている。
- c. 10 YR 5/ 褐色土

D II K 焼土



V 遺構外の出土遺物

本遺跡から出土した遺構外の遺物は殆んど遺物包含層から出土したものであり、縄文土器、縄文時代の土製品、石器、石製品、古代の土師器・須恵器及び鉄滓である。以下、順をおってその概要を述べる。

1. 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器

全体の90%以上を占める縄文土器片は20,000点弱である。それらは遺物包含層から出土したもので、層的に区別がつけられるものではなく、大半が粗製の土器片である。しかし、時期的には後期初頭から所謂十腰内I式土器の範疇に属するものと考えられる。以下文様構成等の違いから7群に分けて記述する。

〈第1群土器〉(図版第36図～37図、写真図版第30図～31図)

本群には地文に縄文を施文した後、沈線文のみ施すものを一括した。112～122はすべて波状口縁である。112は頸部が若干くびれ、口縁部が外反するもので、4つの波頂部をもつ。地文にLRの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿って2条の平行沈線文が巡らされ、胴上部に1条、胴中部に2条の沈線文が横位に巡らされ、その間に2段の文様帯が構成される。いずれも沈線によって波状文が施され、三角形の区画が施されている。底部は欠損している。113は口縁部が僅かに外反するもので、4つの波頂部をもつ。地文にRLの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿って2条の平行沈線文が巡らされ、その下位で波頂部下位にあたる部分に沈線による逆「J」字状文が施される。胴部には数条の沈線文が横位に巡らされ、その間に弧状の短い沈線で区切られている。114は直線的な胴部をもち、口縁部が外反するもので、4つの波頂部をもつものと思われ、波頂部に刻み目をもつものである。RLの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿って2条の平行沈線文が巡らされ、波頂部下位には沈線による蛇行文が施される。胴部には方形に沈線文が施されるものようである。115はほぼ完形の小型の深鉢である。器形は胴上部に脹らみをもち、頸部が若干くびれ、口縁部がやや外反するもので、5つの波頂部をもつ。波頂部には各々1個の刻み目をもつものと思われる。施文は地文にRLRの複節斜縄文が施された後、口唇部に沿って波頂間に横位の沈線文が施される。胴中央部にも1条の沈線文が横位に巡らされ、胴上部の文様帯を区切るものようである。文様帯には沈線による波状文・渦巻文が施される。底部外面に網代痕をもつものである。116～122は口縁部片で、116はLRの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿った沈線文と沈線による蛇行文が施される。117はRLの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿って2条の平行沈線文が施され、その下に沈線による蛇行

文が施される118は地文にLRの単節斜縄文が施され、波頂部に弧状の短い隆帯が貼付され、沈線による波状文が施される。119は地文に摺糸文が施された後、口唇部に沿って1条の沈線文が施される。120はLRの単節斜縄文が施され、波状の沈線文が施される。121・122は地文にRLの単節斜縄文が施された後、121は口唇部に沿った2条の平行沈線文が施され、122は波状及び方形状の沈線文が施される。123～126は平縁で、123は地文にLrの無節斜縄文が施された後、口唇部に沿って3条の平行沈線文が巡され、その下位には沈線による入組風の波状文と蛇行文が施されている。124はRLの単節斜縄文が施された後、2条の平行沈線文と斜位の沈線文が施される。125はLrの無節斜縄文が施された後、3条の平行沈線文が施される。126はLrの無節斜縄文が施された後、口唇部に沿って2条の平行沈線文が施され、その下位は沈線による波状文が施される。一部磨消される部分はあるが顕著ではない。127・128所胴部片で、127はRLの単節斜縄文が施された後、平行沈線文と沈線による連鎖状の「S」字文が施される。128はRLの単節斜縄文が施された後、横位楕円状の沈線文が施される。なお、第I群土器の器種は深鉢及び鉢形土器に限られるものようである。

〈第2群土器〉(図版第38図～40図、写真図版第32図～35図)

本群には、第I群土器の文様構成に磨消の手法が加えられたものを一括した。器種は深鉢及び鉢形土器である。130・131・133・136～145は平縁で、132・134・146・150～164は波状口縁をもつものである。129は口縁部が欠損した深鉢で、地文にLRとRLの単節斜縄文が施文部位をかえて施された後、胴上半部が、沈線による縦位の蛇行文で4区画される。区画された内側は斜位の平行沈線文と磨消が施されるが、その文様構成に規則性は見られない。130は束ね縄による縄文が施された後、口唇部下位と胴上部に各々2条の平行沈線文が横位に巡らされ、文様帯が区切られる。二段の平行沈線の間は斜位の平行沈線文と磨消により、三角形の区画が施され、その区画内に、沈線による蛇行文や波状文が施される。131は頸部にくびれをもち、口縁部が外反するもので、地文はLRの単節斜縄文である。頸部から胴上部にかけては沈線文が横位に施され、胴中央部は沈線による曲線文と磨消が施される。132は口縁部～胴下半部約2分の1の残存で、波状口縁を呈し、波頂部は2個の突出部をもつものと1個の突出部をもつものに分けられ、対面する波頂部が対をなすものと考えられ、波頂部下位にはボタン状突瘤が貼付される。地文にLRの単節斜縄文が施された後、口唇部に沿って2条、胴中央部に3条の平行沈線文が巡らされ、その間が文様帯となる。文様帯には半楕円状の沈線文が縦位に施され、その中に沈線による「J」字状文が施文され、一部磨消が施される。133は折り返し口縁をもつもので、地文にRLの単節斜縄文が施された後、沈線文と磨消による波状文が施され、横位に巡らされる平行沈線文によって区切られる。134は小型の深鉢で、地文に口縁部と胴部にそれぞれ原体の異なるLRの単節斜縄文が施された後、沈線文と磨消による波状文が施される。また波頂部下位に

は沈線による蛇行文が施される。135は胴部片で、RLの単節斜縄文が施された後、2条の平行沈線文が2段にわたって横位に巡らされ、その間は沈線文と磨消による波状文が施される。136は口縁部が外反するもので折り返し口縁である。LRとRLの単節斜縄文が施された後、肥厚部直下に2条の平行沈線文が施され、沈線間は磨消されている。137～145は口縁部片で、口唇部に沿った沈線文が1条～3条巡らされるものである。137は文様要部にボタン状突瘤が貼付され、沈線による平行曲線文と磨消が施される。138は弧状の短沈線で区切られた平行沈線文の下位には斜位の沈線文と磨消が施される。139はRLの単節斜縄文が施された後、胴部に横位及び斜位の平行沈線文と磨消が施される。140はLRの単節斜縄文が施された後、胴部に平行沈線文と磨消が施される。141は胴部に斜位の平行沈線文と磨消が施される。142～145は横位の沈線文と磨消が施される。147・148は胴部片で、147はRLの単節斜縄文が施された後、平行沈線文と沈線による蛇行文が施され、平行沈線の間は磨消されている。148は沈線文と磨消による波状文が施される。149は胴下部へ底部の破片で、Lrの無節斜縄文が施された後、沈線文と磨消による方形の区画文が施される。146は口縁部が肥厚するもので、肥厚部にLrの無節斜縄文が施された後、口唇部に沿って沈線文が施される。150～161は沈線による平行曲線文と磨消によって波状文が施される。154・155、157～161は波状口縁の波頂部下位にボタン状突瘤が貼付されている。162～164は平行沈線文と磨消が施される。

〈第3群土器〉(図版第41図～44図185～199、写真図版第36図～39図197～199)

本群には、第II群土器の文様手法がさらに発展し、磨消の手法がより多用され、文様モチーフもパターン化されてきたものを一括した。器種には深鉢及び鉢形土器と壺形土器がある。

深鉢及び鉢形土器

165は底部が欠損しているもので、胴上半部に脹らみをもち、頸部が若干くびれ、口縁部が外反するもので、8つの波頂部をもつ波状口縁である。波頂部直下に縦位の低い突起が貼付される。地文はLRの単節斜縄文が施された後、口縁部～頸部には磨消部が五角形状をなす区画が沈線文と磨消によって横位に8単位施される。胴上半部～胴中央部には沈線による平行曲線文と磨消により横位に5単位の三角形区画文が施される。胴下半部も文様帯を構成するものようであるが詳細は不明である。166は口縁部が欠損しているもので、頸部に2本、胴下半部に1本の隆帯が巡らされ、その間に文様帯が構成される。地文にRLの単節斜縄文が施された後、沈線による平行曲線文と磨消によって、同心円状の文様と渦巻文が施される。167は胴上半部に脹らみをもち、頸部がくびれ、口縁部が内弯気味に外反するもので、折り返し口縁で波状を呈し、5つの波頂部をもつものである。口縁の肥厚部には、波頂部下位に縦位の突起、波頂部間の中央には刺突のあるボタン状突瘤が貼付される。地文にはLRの単節斜縄文が施され、文様帯は胴下半部にまで及び、平行沈線文及び横位の沈線文によって三段に分けられる。

頸部付近は沈線文と磨消による方形区画文が横位に展開され、胴中央部は沈線文と磨消により、磨消部が眼鏡状を呈する文様が横に5単位施される。胴下半部は平行沈線文と1条の横位の沈線文に区切られた間に、沈線文と磨消による波状文が施される。底部外面端部に縄文原体の圧痕が認められる。168は胴上半部に脹らみをもち、頸部がくびれ、口縁部が内弯気味にやや外反するもので、4つの波頂部をもつ波状口縁である。波頂部は各々2個1対の突出部をもつものである。施文は地文にLRの単節斜縄文が施された後、口縁部には2条からなる弧状の沈線文が横位に4単位施され、頸部と胴中央部に2条の平行沈線文が巡らされ、それらの間に2段の文様帯が構成される。文様帯には沈線文と磨消による波状文が施される。169は鉢形土器で、頸部が若干くびれ、口縁部が僅かに外反するものである。口縁部が肥厚するもので、地文にRLの単節斜縄文が施された後、胴中央部に1条の沈線文を巡らし、その上部が文様帯となるものである。文様帯は沈線文と磨消によって磨消部が「工」字状を呈する区画文が横位に4単位の展開を示すものと考えられる。170は深鉢で波状口縁である。施文は地文にLrの無節斜縄文が施された後、口縁部と胴上部及び胴中央部下位に各々3条からなる平行沈線文を巡らし、それらの間に2段の文様帯が構成される。文様帯は2段共、斜位の平行沈線文と磨消により平行四辺形状に区画され、その中に波状文が施される。171・174～176は平行沈線文と磨消により三角形の区画が施され、その中に波状文や沈線による渦巻文が施されるものである。172・173は波状口縁沈線文と磨消が施される。177～188は平鉢で、縦横の沈線文と磨消によって方形の区画文が施されるものである。189～191は波状口縁で同一個体と思われる。地文にRLの単節斜縄文が施された後、沈線文と磨消による区画が施され「T」字状文が施される。192は口縁部に横位に刺突列が施される。193～195は隆帯が横位に巡られるもので、沈線文と磨消による半円状の文様が施される。

壺形土器

196は頸部に刻み目をもつ隆帯が2本巡らされ、胴部はLrの無節斜縄文が施される。197は口縁部～胴上部の破片で、口縁部はLRの単節斜縄文が施された後、磨消されている。頸部～胴部には沈線文が施され、貫孔のある把手が付されている。198は胴部片で、沈線文とLRの単節斜縄文が施されている。199は胴上部の破片で、指頭圧痕状の刻み目をもつ隆帯が縦横に巡らされ、その中に斜位の平行沈線文が施される。地文はRLの単節斜縄文である。

〈第4群土器〉(図版第44図～第46図、写真図版第39図～第42図240～244)

本群には無文地に隆帯及び沈線文のみ施されるものを一括した。所謂十腰内I式土器に相当すると考えられる土器群である。器種には深鉢及び鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器がある。

深鉢及び鉢形土器

200～203は波状口縁で、200は平行沈線文と波状文が施される。201・203は沈線文による方形状

の区画文が施され、202は平行沈線文が施される。204～210は平縁である。204～206・208は沈線による方形の区画文が施される。209は小型の深鉢で口縁部～胴上部約3分の1の残存である。口縁部が内弯気味に脹らむもので、施文は沈線による平行曲線文が施され、浅い短い沈線がその間に施される。210は小型鉢形土器で底部は欠損している。施文は浅い沈線文が弧状・半円状及び斜位に施されるもので規則性はみられない。

浅鉢形土器

211は底部が欠損するもので、沈線による方形の区画文が2段にわたって横位に施されるものである。橋状の把手が相対する2個所に付されている。212～214は沈線による楕円状の区画文が施される。215は約2分の1の残存である。無文で内外面共によく研磨されている。外面に橋状把手が付されたものと思われるが、欠落している。

壺形土器

216～233は沈線文が施されるものである。216は頸部が強くくびれ、口縁部が内弯気味に外反するもので、頸部に沈線文が巡らされ、その下位は沈線による平行曲線文が施される。貫孔のある把手が付されたものと思われるが、欠落している。217・218・222～224・226～229は沈線による曲線文が施される。219・221は横位の沈線文が巡らされるもので、220・225は無文である。221・225は貫孔をもつものである。230～232は小型の壺形土器の口縁部片で、233は底部片である。230・232は把手の付されるものである。いずれも沈線文の施されるもので、232は頸部に方形の沈線文が施され、口縁部内面に刺突が施される。216・217・222・225には朱塗りの痕跡が認められる。234～239は隆帯と沈線文の施されるものである。234は頸部が若干くびれ、口縁部がやや外反するもので、器高は24.2cmである。頸部と胴中央部に各々1本の隆帯が巡らされ、頸部の隆帯の上下に浅い沈線文が施される。器表面はよく研磨されている。底部外面に笹葉様の圧痕が認められる。235は口縁部が欠損している。頸部付近と胴最腹部に各々1本の隆帯が巡らされ、その間は4本の縦位の隆帯で4区画が構成される。各区画内は平行沈線文による「X」字状の文様が施されその中心部で沈線文の一端が渦巻状に施されるものである。236は口縁部～胴上部の破片で、口唇部直下にボタン状の突瘤が貼付され、口唇部に平行に1本の隆帯を巡らし、その下に縦位及び斜位に隆帯が施される。隆帯に沿って浅い沈線文が施される。237～239は胴部片で、237は縦位の隆帯で方形の区画が施されるもので、238・239は隆帯と沈線文による波状文が施されるものである。239は横走する2本の隆帯に縦位の橋状把手が付されている。237・238は朱塗りの痕跡が認められる。240～244は底部片である。240・241は底部外面に沈線文が施される。243・244は底部外周に刻み目が施されるもので、244は相対する位置2箇所に施される。

〈第5群土器〉(図版第47図～48図、写真図版第42図～43図)

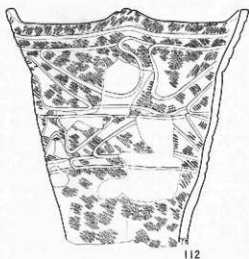
本群には網目状燃糸文が施されるものを一括した。器種は深鉢及び鉢形土器である。245～251は平縁で、252～262は折り返し口縁をもつもので平縁である。245は口縁部が直立気味のもので、底径9cmである。246は口縁部が外反するものである。252・253は胴部から口縁部に向かってほぼ直線的に開く器形を呈する。254は胴上半部が内弯気味に外反するもので、255は口縁部が外反する。256は口縁部が短く外反する。257は小型のもので、口縁部は内弯する。

〈第6群土器〉(図版第49図～52図292～295、写真図版第44図～46図)

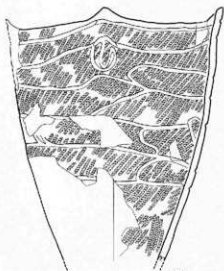
本群には縄文のみ施される粗製の土器を一括した。器種は深鉢形土器が主体である。263・264は波状口縁で、263は器高19.2cm、口径15.6cmで、LRの単節斜縄文が施されている。264はRLの単節斜縄文が施される。265～276は平縁である。265は器高26.9cmで、Lrの無節斜縄文が施される。266は器高41.4cmでRLの単節斜縄文が施されるもので、底部外面に網代痕が認められる。267・269はLRの単節斜縄文、268・273・274はRLの単節斜縄文が施される。270は器高27.6cm口径22.3cmで、LRの単節斜縄文が施され、施文時における原体先端の回転によって施されたと思われる縦位の綾絡文風の縄文が施される。底部外面に網代痕が認められる。271はRLの単節斜縄文が施され、縦位の綾絡文風の縄文が施される。272・276はLRの単節斜縄文、275はRLの単節斜縄文が、各々口縁部付近と胴部とでは回転の方向を変えて施される。275口唇部にも施され、276は口唇部直下に縄文原体圧痕文が1条巡らされる。277～289は折り返し口縁をもつものである。277・281・282・287はLrの無節斜縄文が施される。283・284は肥厚部が無文で、胴部に燃糸文が施される。278はLRの単節斜縄文が、肥厚部と胴部とでは回転の方向を変えて施される。279・280・285・286・288・289はRLの単節斜縄文が施される。285は器高41.6cmで、胴下半部から口縁部にかけて直線的に開く器形を呈する。290～295は底部外面に290～293は網代痕、294・295は笹葉様圧痕が認められる。胴部には、291・293はRLの単節斜縄文が施され、292はRLRの複節斜縄文が施される。

〈第7群土器〉(図版第52図296～310、写真図版第47図)

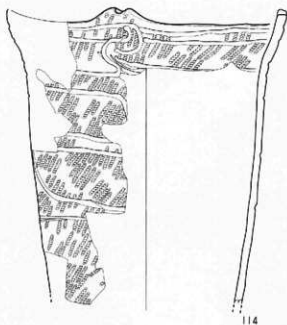
本群には切断土器・異形土器・ミニチュア土器を一括した。296～302は切断土器である。296・302は胴部下半の切り離して、他は胴部上半の切り離しと考えられる。302は無文で、他は沈線文が施される。297・301は貫孔のある把手が付されている。303は異形土器で、1点の出土である。全体の形状は頭のない鳥の胴体に似ており、長軸の一端が開口するもので、底部は円形である。粗製で胎土・焼成とも不良で、無文である。底部外面には笹葉様の圧痕が認められる。304～310は所謂ミニチュア土器で、粗製である。304は底部外面に網代痕が認められる。



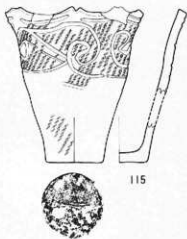
112



113



114



115



116



117



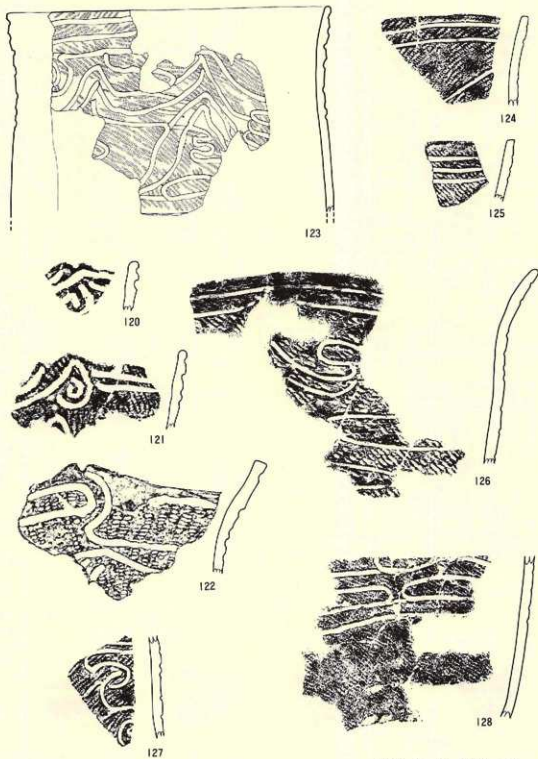
118



119

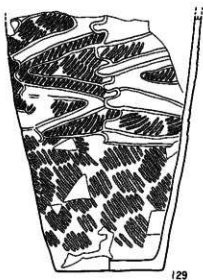
(113, 114-S = ¼, 他は S = ½)

図版第36図 第I群土器(1)

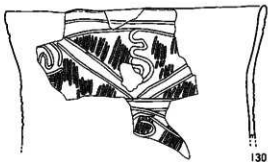


(123-S = ¼, 他は S = ½)

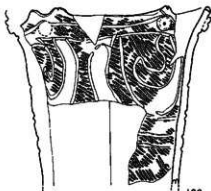
図版第37図 第1群土器(2)



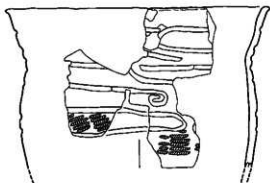
129



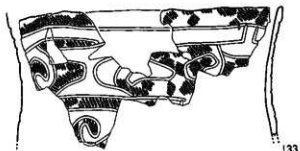
130



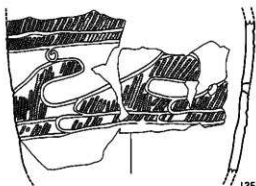
132



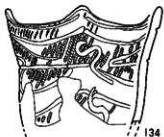
131



133



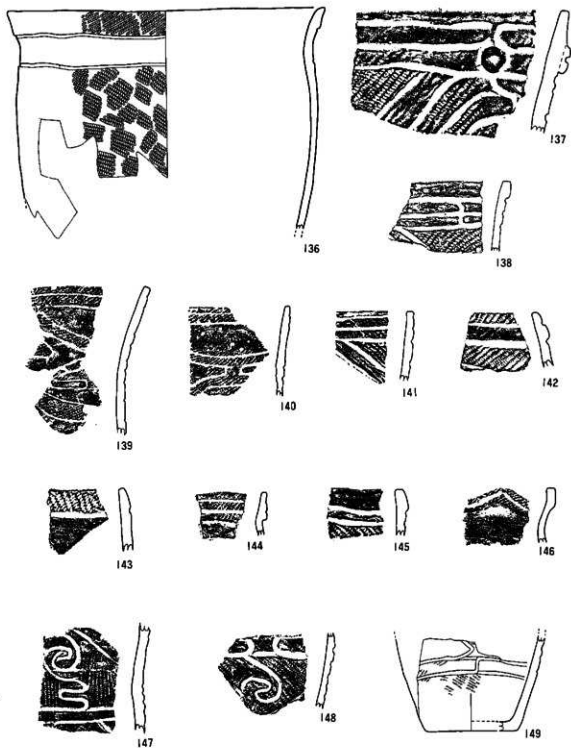
135



134

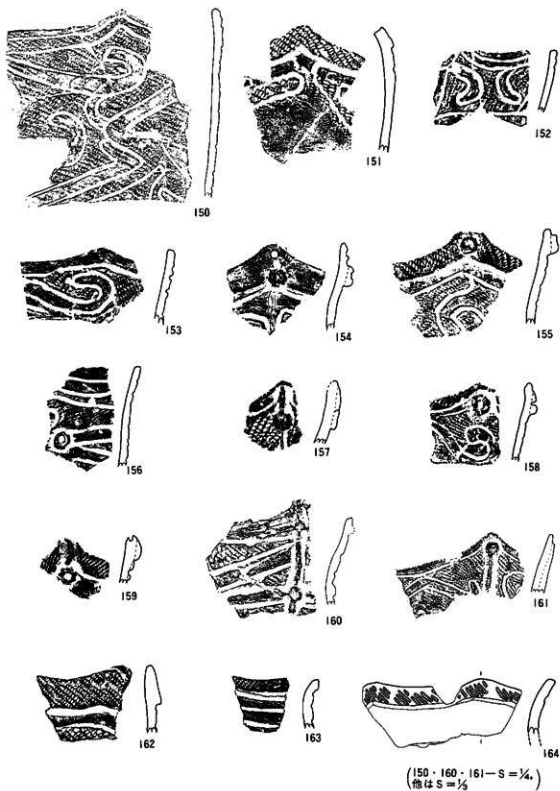
(129・130・135-S = $\frac{1}{4}$,
133-S = $\frac{1}{6}$, 他は S = $\frac{1}{5}$)

図版第38図 第2群土器(1)



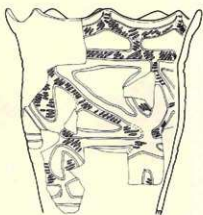
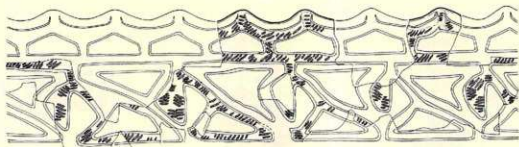
(136-S = $\frac{1}{4}$),
 (他は S = $\frac{1}{5}$)

圖版第39圖 第2群土器(2)

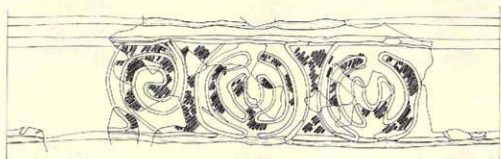


(150・160・161-S = ¼, 他は S = ½)

図版第40図 第2群土器(3)



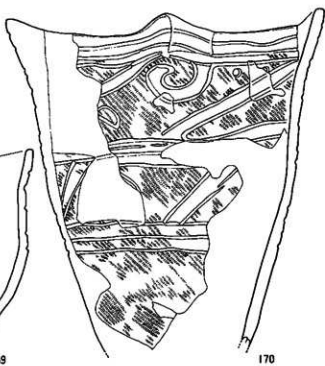
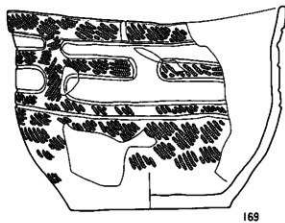
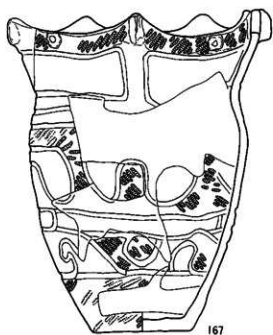
165



166

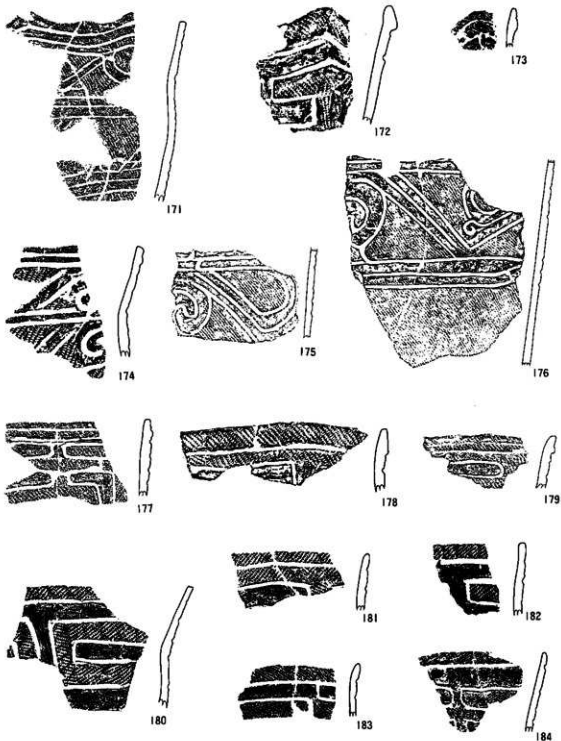
(S = 1/4)

图版第41图 第3群土器(1)



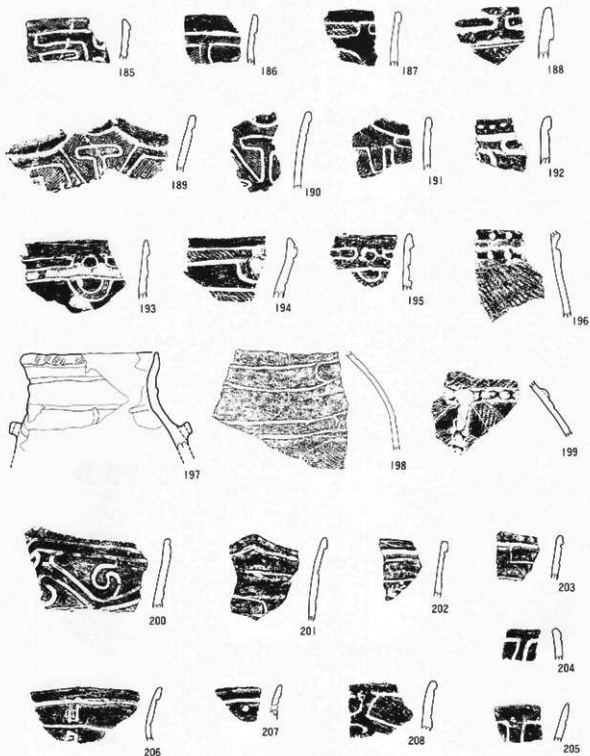
(S=1/4)

图版第42图 第3群土器(2)



(171・175・176・179-S=1/4.)
 他はS=1/2

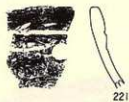
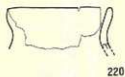
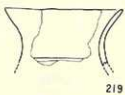
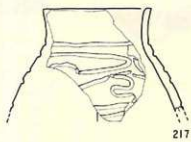
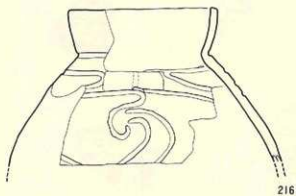
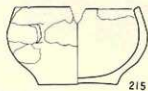
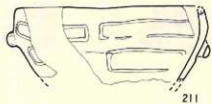
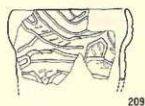
図版第43図 第3群土器(3)



(198-S = $\frac{1}{4}$.)
 (他は S = $\frac{1}{2}$.)

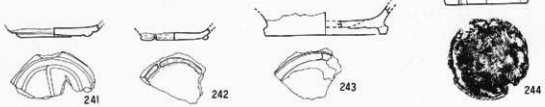
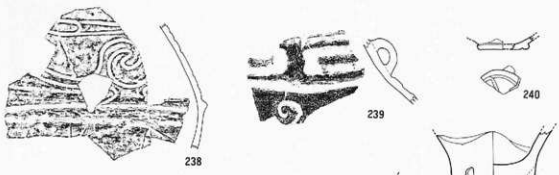
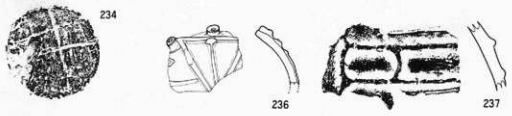
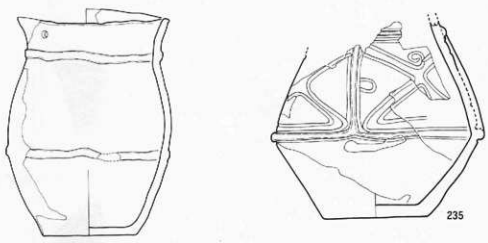
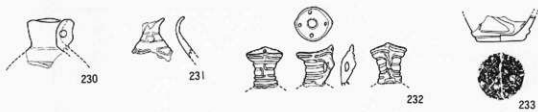
図版第44図 第3群土器(4) 185-199

第4群土器(1) 200-206



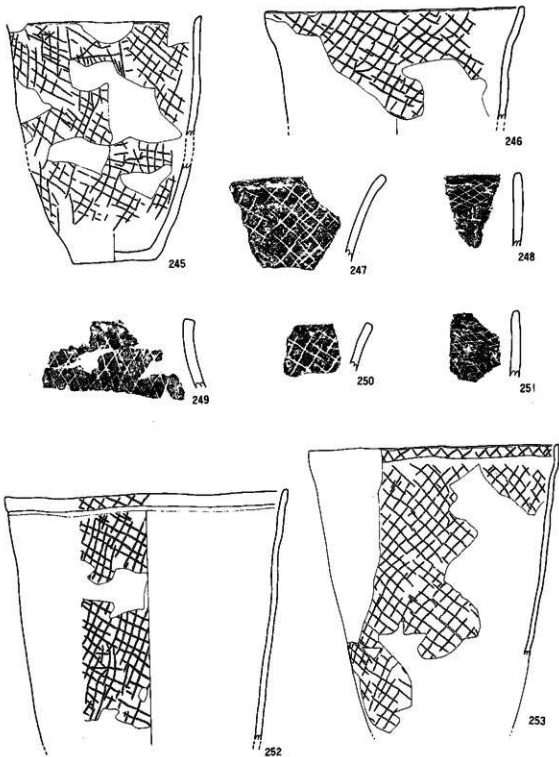
(S = 1/5)

圖版第45圖 第4群土器(2)



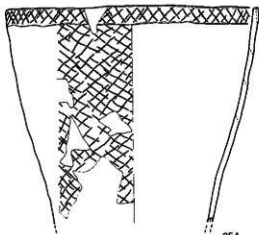
(234 · 238 · 239 - S = 1/4, 他は S = 1/5)

図版第46図 第4群土器(3)

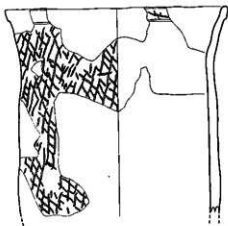


(252・253-S = $\frac{1}{2}$)
 (245・246-S = $\frac{1}{2}$)
 (他は S = $\frac{1}{5}$)

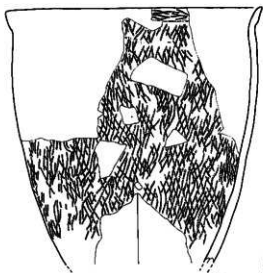
図版第47図 第5群土器(1)



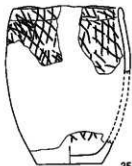
254



255



256



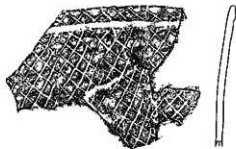
257



258



259



260



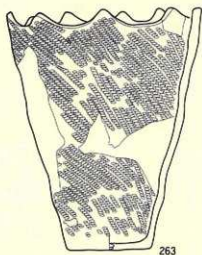
261



262

(254-S = $\frac{1}{6}$
256・260-S = $\frac{1}{4}$
他は S = $\frac{1}{5}$)

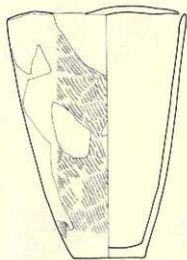
図版第48図 第5群土器(2)



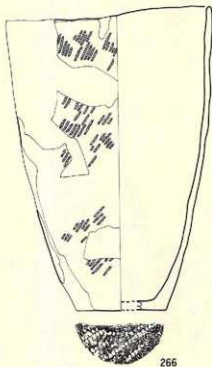
263



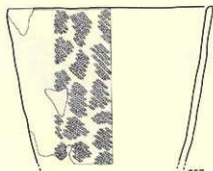
264



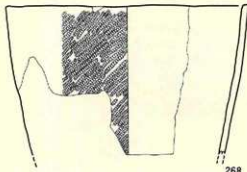
265



266



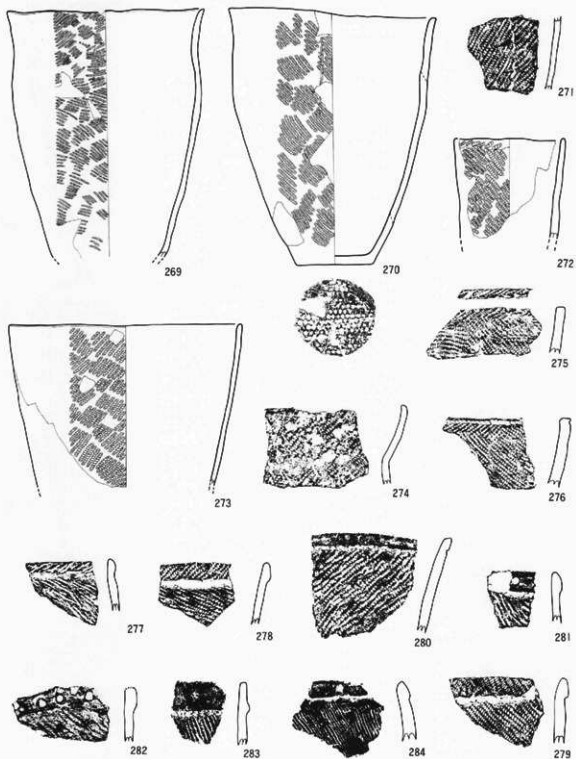
267



268

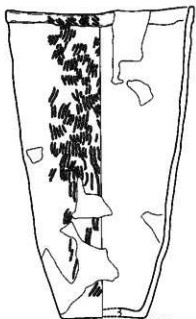
(263 · 264 - S = 1/3, 266 - S = 1/6,
265 · 267 · 268 - S = 1/4)

図版第49図 第6群土器(1)

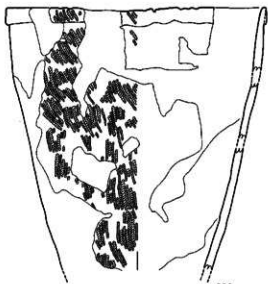


(269 - S = 1/6, 270 · 273 - S = 1/4, 他は S = 1/3)

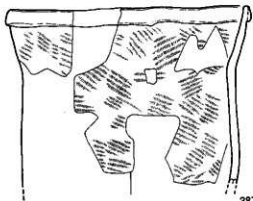
図版第50図 第6群土器(2)



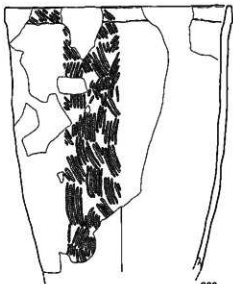
285



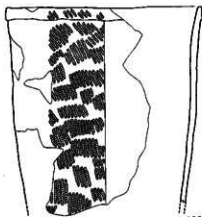
286



287



288



289



290

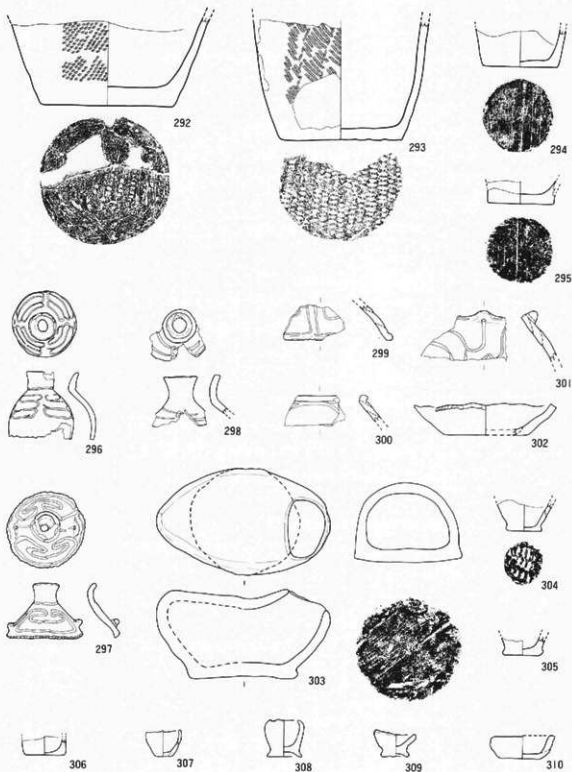


291



(285-S = $\frac{1}{4}$,
291・287-S = $\frac{1}{2}$,
他は S = $\frac{1}{4}$.)

図版第51図 第6群土器(3)



第6群土器(4) 292-295 第7群土器 296-310 (292・293-S=1/4,
 他はS=1/3)

图版第52图

(2) 土製品

遺構外から出土した土製品は、土偶、蓋形土製品、スタンプ状土製品、きのこ形土製品、球状土製品、板状土製品、円盤状土製品である。

土偶 (図版第53図、写真図版第48図)

8～13の6点が出土している。所謂板状土偶の破片である。8・10・12は肩部の破片で、9・11・13は脚部の破片である。8は乳房を表現するものとして貼付されたと考えられる突起の欠落痕が認められる。8・12は沈線文が施され、10は沈線文と刺突文の施されるものであるが、詳細は不明である。9・11は沈線文と刻み目が施されるもので、11は脚部が外方に張り出す形状を呈している。13は無文で中央部に1箇所貫孔の認められるものである。

蓋形土製品 (図版第53図、写真図版第48図)

14～18の5点が出土している。14・15はつまみ部に2個の貫孔を有するもので、14はかき部に同心円状の沈線文が施され、15には沈線による曲線文が施される。16～18は無文のもので、17はつまみ部中央に1個の貫孔を有するものである。

スタンプ状土製品 (図版第53図、写真図版第48図)

19、1点の出土である。形状は直径6.6cmの円盤状を呈し、橋状の把手が付されていたものと考えられるが、基部の一部が残存するだけである。表裏両面及び周縁には沈線による曲線文が施され、把手の基部の周囲には刺突文が環状に施されている。

きのこ形土製品 (図版第53図、写真図版第48図)

20、1点の出土で完形である。かさは半球状を呈し、柄は「J」字状に曲がるものである。最大径5.7cm、高さ4.6cmである。

球状土製品 (図版第53図、写真図版第48図)

21、1点の出土である。一部欠損しているが、残存部から直径5.4cmの球状を呈するものと考えられる。表面にはミガキが施されている。

板状土製品 (図版第54図、写真図版第49図)

22、1点の出土である。半分欠損しているが、円形で偏平状のものと考えられる。現存部から、直径4.2cm、厚さ0.8cmと推定される。表裏両面共、沈線文が同心円状に施され、沈線間に刺突文が環状に施される。耳飾りの一種なのかもしれない。

円盤状土製品（図版第54図～55図、写真図版第49図～50図）

23～84の62点の出土で、以下のように分類される。

1類 土器破片を利用したものでないもの。(23～26)

23はほぼ完形で、表面には格子目状の沈線文が施され、裏面には裏面には沈線による曲線文が施される。周縁部に1個の貫孔を有するものである。24は無文で、25は一部に縄文が施され、26は周縁部が波状を呈するものである。

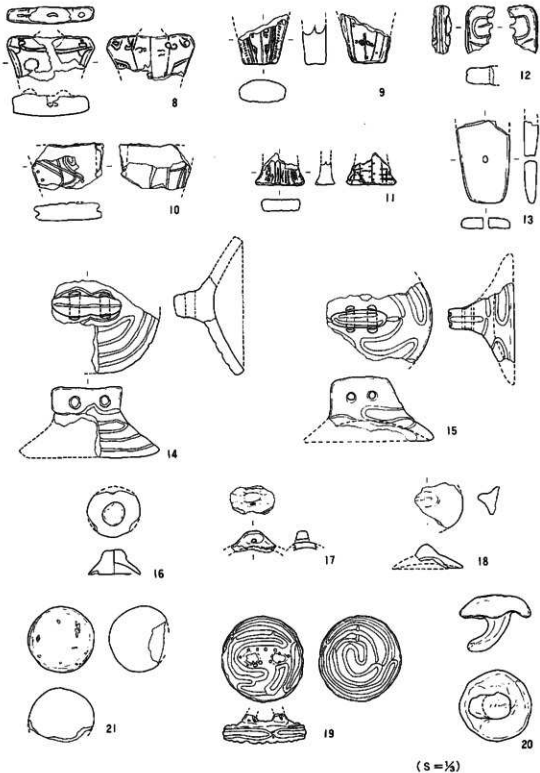
2類 土器破片を打ち欠いて再加工したもの。(27～84)

a. 打ち欠きだけのもの。27～44

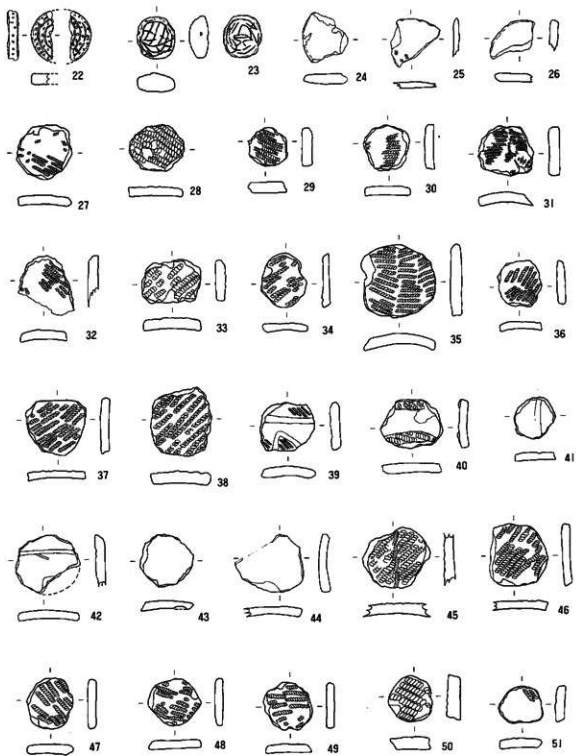
b. 周縁の一部が磨られているもの。45～64

c. ほぼ全周が磨られているもの。65～84

形状は円形を呈するもの、方形を呈するもの、三角形を呈するもののほかに、不整形円形や五角形を呈するものもあるが、人為的に打ち欠いたり、磨ったりしているものである。大きさは径2cm前後～6cm前後、重さは3.9g～33.9gと様々である。利用されている土器片は、深鉢形土器の胴部破片が大半を占める。地文の文様には単節斜縄文、異節斜縄文、網目状燃糸文、沈線文、隆帯貼付等がある。

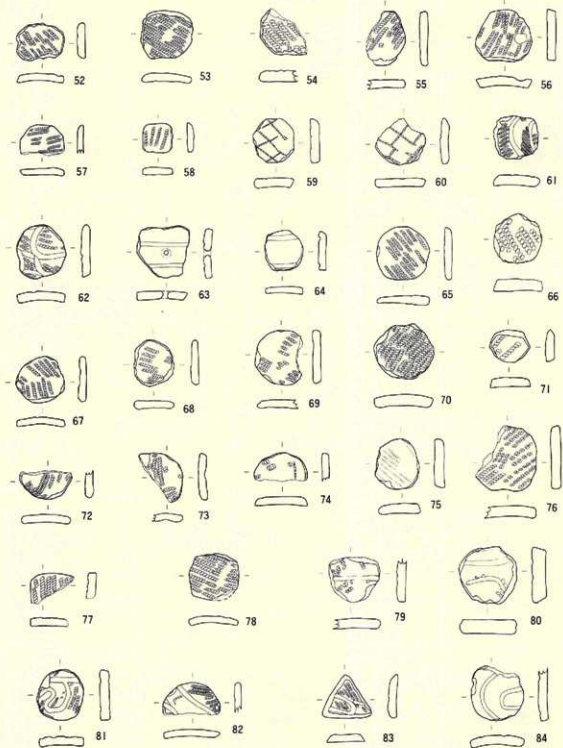


图版第53图 土製品(1)



(S = 1/2)

図版第54図 土製品(2)



(S = 1/2)

図版第55図 土製品(3)

(3) 石器

遺構外から出土した石器は、石鏃、石錐、搔・削器、抉入石器、楔形石器、不定形石器、磨製石斧、磨石、凹石、敲石、石皿、石棒である。以下器種毎に記述する。

石鏃（図版第56図、写真図版第51図）

28、1点の出土である。所謂凸基有茎鏃で、茎部は一部欠損している。

石錐（図版第56図、写真図版第51図）

29～36の8点が出土しているが、29はつまみをもつもので、30～36は不定形な剝片の一端のみに剝離調整が施され、錐部が作り出されるものである。35・36は錐部先端が欠損しているものである。

搔・削器（図版第56図～61図、写真図版第51図～54図）

37～103の67点が出土している。

37～43は片面端部に刃部剝離調整が施されるものである。44・45は1端部に両面から剝離調整が施されるもので、表裏交互剝離により刃部が鋸歯状を呈している。46～64は片面端部と側縁に刃部剝離調整が施されるものである。51は端部に表裏両面からの剝離調整が施されている。65～67は片面端部と2側縁に刃部剝離調整が施されるものである。68～84は片面1側縁に刃部剝離調整が施されるものである。85～87は1側縁に表裏両面から刃部剝離調整が施されるものである。87は表裏交互剝離により、刃部が鋸歯状を呈している。88～102は2～3側縁に刃部剝離調整が施されるものである。89・96は表裏両面から剝離調整が施され、91は1側縁のみ表裏両面から剝離調整が施される。98・101・102は両面の異なる1側縁に剝離調整が施される。103は片面のほぼ周縁部に刃部剝離調整が施されるもので、一部欠損している。

抉入石器（図版第61図、写真図版第54図）

104～106の3点の出土で、剝片の側縁一部が抉り込まれて剝離調整が施されるものである。

楔形石器（図版第61図、写真図版第54図）

107～116の10点が出土している。両極剝離痕と2個1対の刃部を有し、小形で四辺形の石器（聖山遺跡）という観点から分類したものである。107・108・110・111・113はその観点からほぼ該当するもので、他は製作途中及び使用後の破片と考えられる。109・116を除いたすべてが一部に自然面を残すものである。石材は107～110・113・115がチャートで、111・112・114・116が泥質チャートである。

不定形石器 (図版第62図・写真図版第54図)

不定形な剥片の一部に剝離調整痕の認められるものを一括した。117～124の8点が出土している。117は三角板状の剥片の1頂部に剝離調整が施されるものである。119は縦長で短軸の断面形が不整四辺形を呈する剥片の各稜部の一部に剝離調整が施されるものである。他は側縁の一部に剝離調整が施されるものである。

磨製石斧 (図版第63図・写真図版第55図)

125～135の11点が出土している。125・126は小型の磨製石斧で、125は頭部のみの残存で、126は刃部が欠損している。125・126共全面がよく研磨され、両側縁の稜線が比較的明瞭である。129・133～135は胴部破片である。127・128は刃部が欠損しているもので、全面に粗い研磨が施されている。131は刃部付近の残存で、よく研磨されている。127・128・131は刃部が欠損した後、敲石として使用されたものと考えられ、敲打痕が認められる。盤30は頭部及び刃部が欠損しているもので、残存部は全面ともよく研磨されている。残存部の両端部及び両側縁部には多面にわたる敲打痕が認められ、敲石としても使用されたものと考えられる。132は胴部片と思われるもので、表裏共研磨面が残存するが、周縁部には多面にわたる敲打痕が認められ、欠損後、敲石として使用されたものと考えられる。

磨石 (図版第64図～65図、写真図版第55図～57図)

136～152の17点が出土している。146～148・150・151は表面1面に擦痕が認められるものである。150は下端部と裏面が欠損している。148は端部の一部に弱い擦痕が認められる。147は表面中央部に1箇所、151は裏面に2箇所の凹みが認められるものである。146は両側縁に敲打痕が認められ、表裏両面に各々2箇所の凹みが認められる。143は表面と下端部に擦痕が認められるもので、擦面間の稜線は比較的明瞭である。上端部には敲打痕が認められる。152は横断面形が三角形の2面に擦痕の認められるもので、3稜部に敲打痕が認められる。137・139・141・142・144・145・149は表裏両面に擦痕が認められるものである。137は1側縁と端部に敲打痕が認められる。139は周縁部に敲打痕が認められ、表裏両面に各々1箇所の凹みを有するものである。141は両側縁と端部に敲打痕が認められ、表裏両面に各々1箇所の凹みを有するものであるが、下端部は欠損している。142は表裏両面に各々1箇所の凹みが認められる。144・145・149は1側縁に敲打痕が認められるもので、144は表面に1箇所、裏面に2箇所の浅い凹みが認められ、145は表面に2箇所、裏面に1箇所の凹みが認められる。149は表裏両面に各々2箇所の凹みが認められるが、下端部は欠損している。138は上端部と両側縁に擦痕が認められ、140は横断面形が三角形の1稜部に擦痕が認められ、他の1稜部に敲打痕を有するものである。

凹み石 (図版第66図～68図、写真図版第57図～59図)

153～172の20点が出土している。153・159・160・162・164・170・171は表面1面に凹み認められるもので、159・162・164は裏面が欠落しているものである。153は横断面形が四角形状の1面に1箇所の凹みが認められる。159・162・164は表面に各々1箇所の凹みが認められ、160・170・171は表面に各々2箇所の凹み認められる。155～158・163・165～169・172は表裏両面に凹みが認められるものである。154・156・158・163・167は表裏両面に各々1箇所の凹みを有するもので、167は1側縁に擦痕が認められる。157・165は表面に2箇所、裏面に1箇所の凹みを有し、166・168・172は表面に1箇所、裏面に2箇所の凹みが認められる。155は偏平な礫の表面中央部に2箇所、裏面中央部から上端部にかけて3箇所の凹みが認められるものである。161は四角柱状の礫で、4面に1～2箇所の凹みが認められる。169は偏平な礫で、表面に4箇所、裏面に3箇所の深い凹みが認められるものである。

敲石 (図版第68図～69図、写真図版第59図～60図)

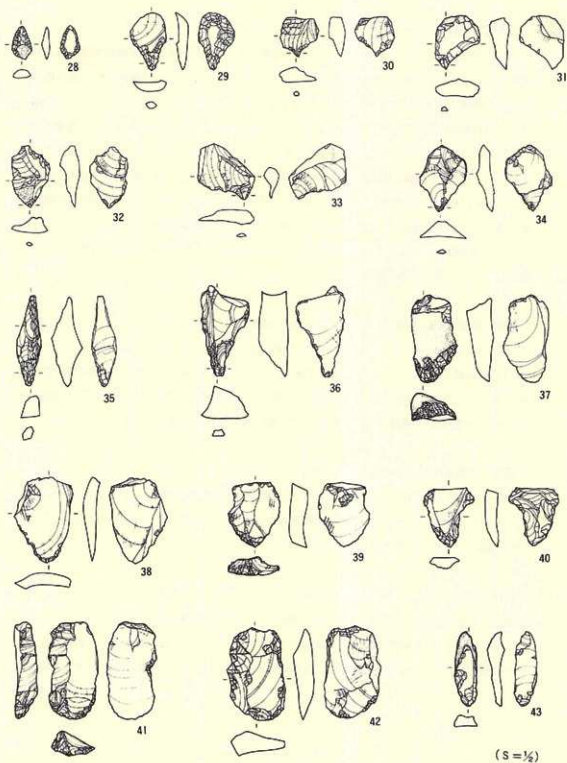
173～182の10点が出土している。いずれも礫の端部や側縁部に敲打痕の認められるものである。175は石核を利用したもので、ほぼ周縁にわたって敲打痕が認められる。石材は凝灰質珪質泥岩である。176は1側縁と1端部に敲打痕が認められるもので、石材はチャート質淡緑凝灰岩である。182は偏平で細長い千枚岩の1端部に敲打痕の認められるものである。

石皿 (図版第69図～第70図、写真図版第61図)

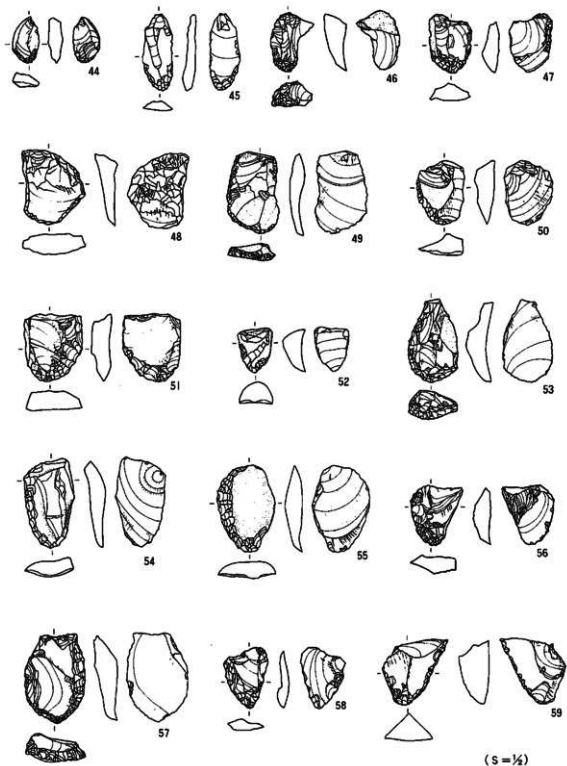
183～189の7点が出土している。183～185は縁帯をもつものである。183・185は中央付近が浅く凹むものと考えられる。187・188は縁帯をもたないものようで、186・189は不明である。183～189はいずれも石材は砂質凝灰岩である。

石棒 (図版第70図、写真図版第61図)

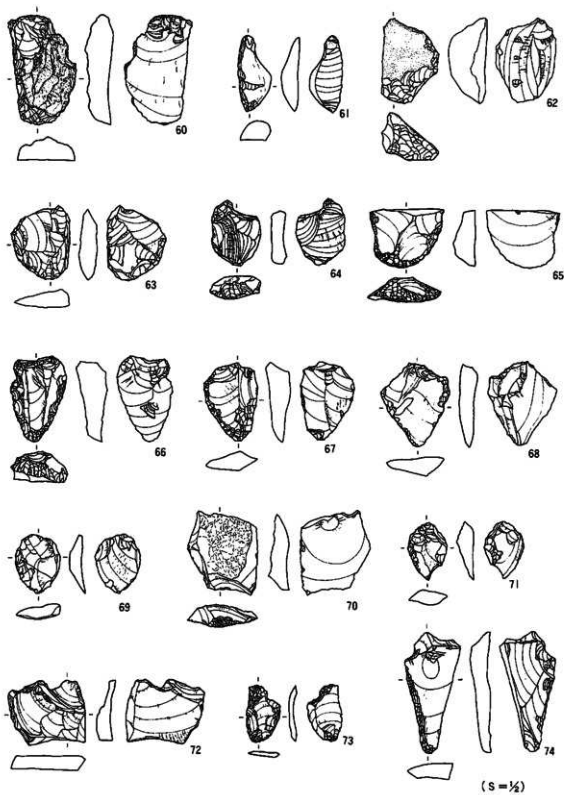
190～192の3点の出土である。190は五角柱状で、1面に擦痕が認められるものである。191は2面に擦痕を有し、端部に敲打痕が認められるものであるが、欠損のため詳細は不明である。192は横断面形を呈するもので、1面に擦痕を有するものであるが、欠損のため詳細は不明である。



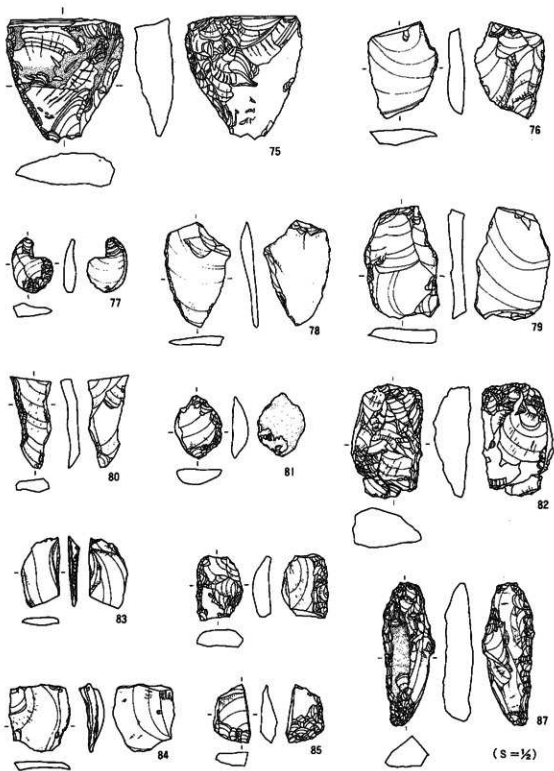
图版第56图 石器(1)



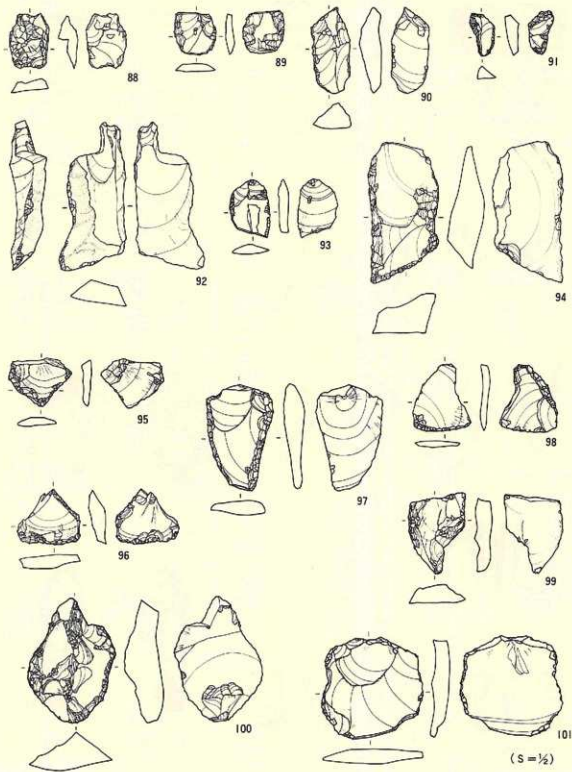
图版第57图 石器(2)



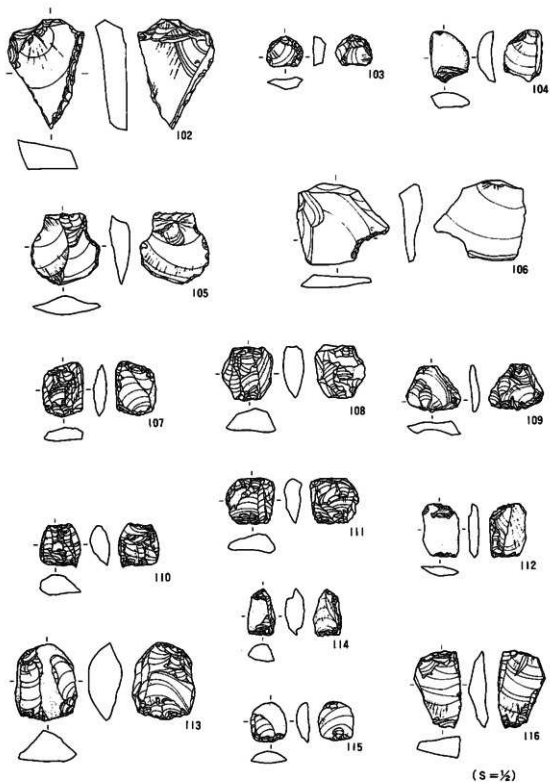
图版第58图 石器(3)



图版第59图 石器(4)



图版第60图 石器(5)



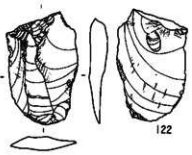
圖版第61圖 石器(6)



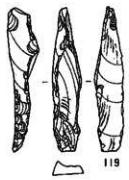
117



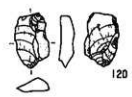
118



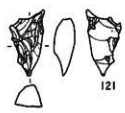
122



119



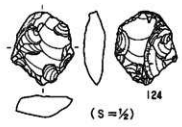
120



121



123



124

(S = 1/4)

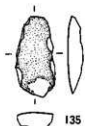
图版第62图 石器(7)



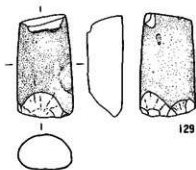
125



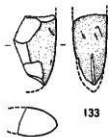
126



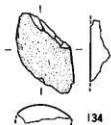
135



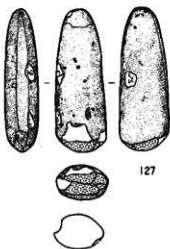
129



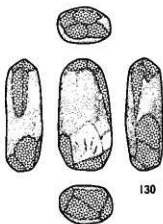
133



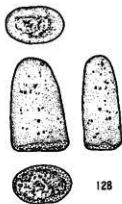
134



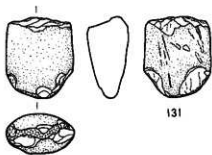
127



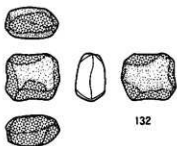
130



128



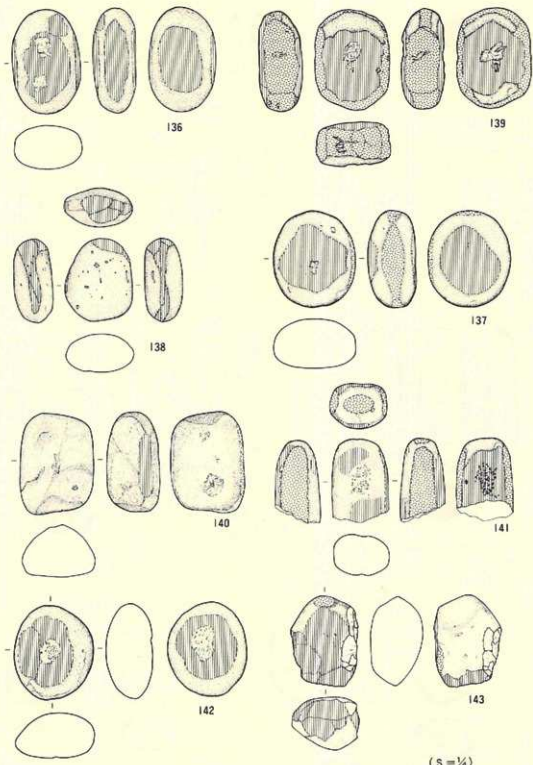
131



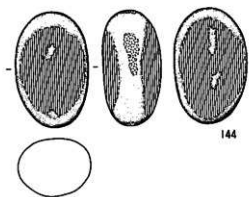
132

(s = 1/2)

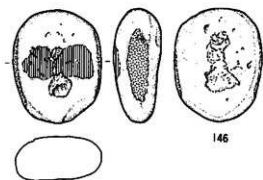
圖版第63圖 石器(8)



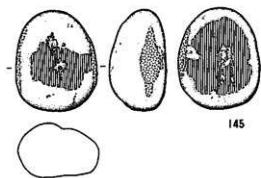
圖版第64圖 石器(9)



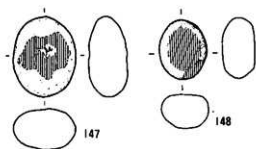
144



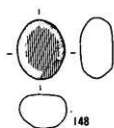
146



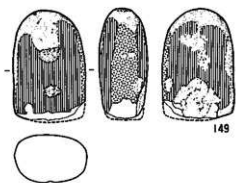
145



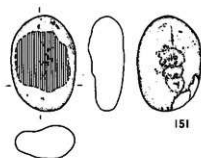
147



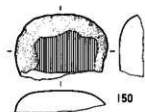
148



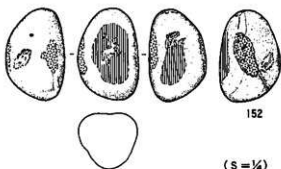
149



151



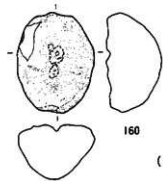
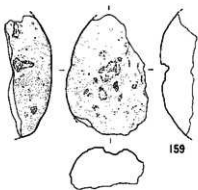
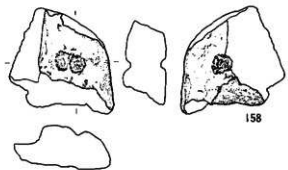
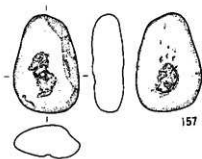
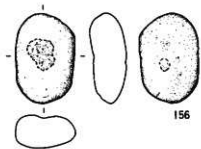
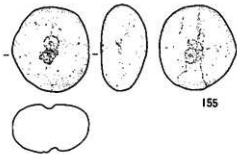
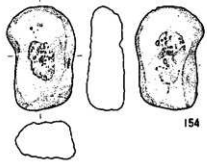
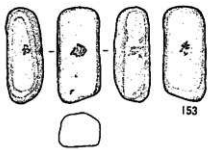
150



152

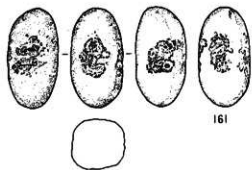
(S=1/4)

图版第65图 石器(10)

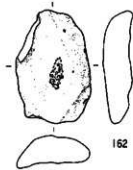


(s = 1/4)

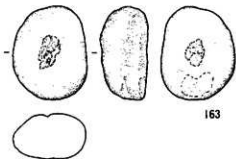
图版第66图 石器(11)



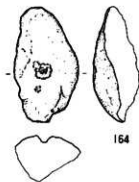
161



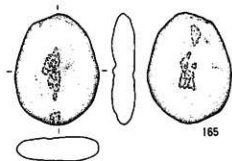
162



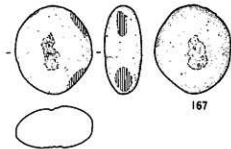
163



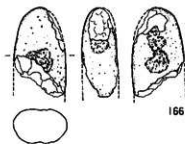
164



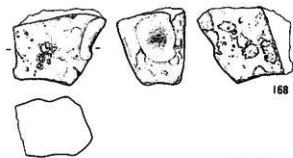
165



167



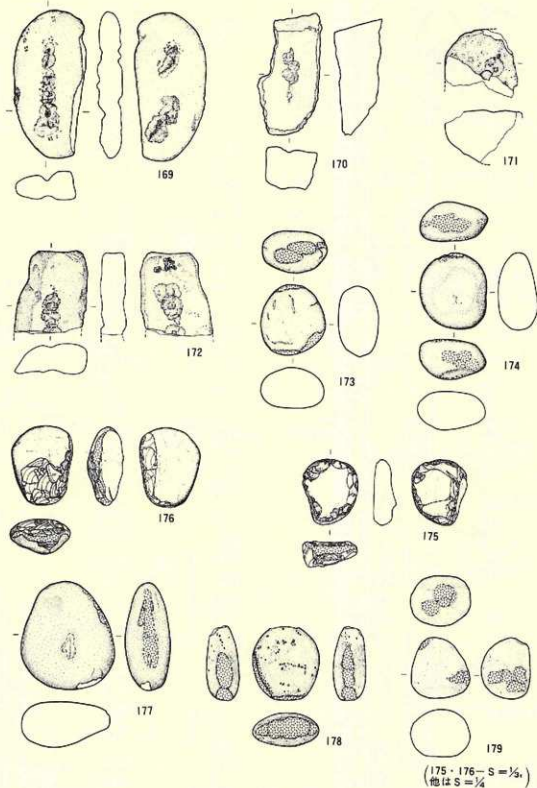
166



168

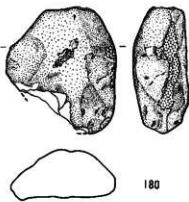
(S=1/4)

圖版第67圖 石器(12)

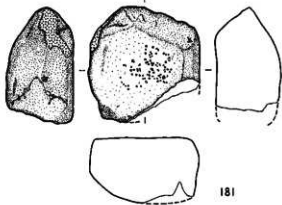


(175・176-S = 1/5,
他は S = 1/4)

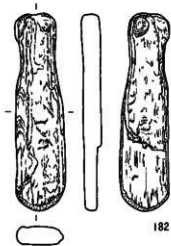
図版第68図 石器(13)



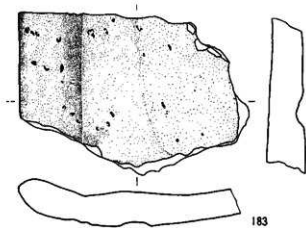
180



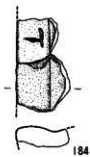
181



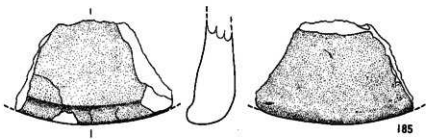
182



183



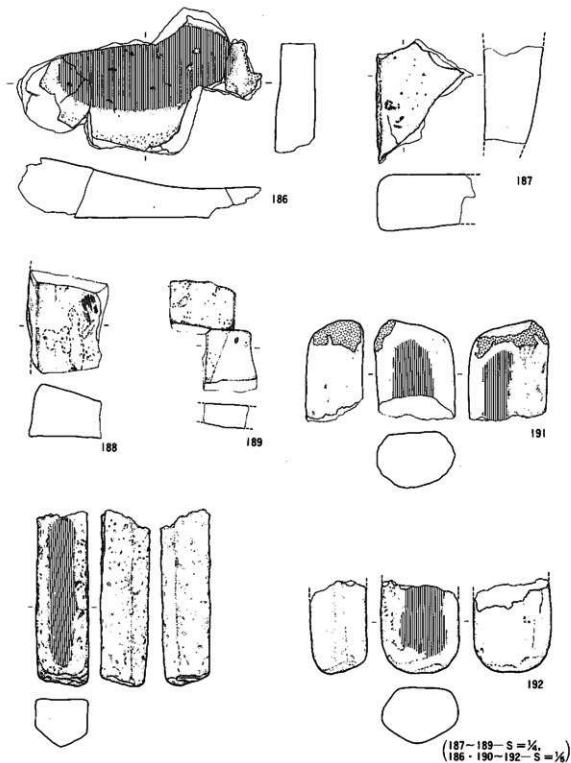
184



185

(S=1/4)

图版第69图 石器(14)



图版第70图 石器(15)

(4) 石製品

遺構外から出土した石製品は、線刻石製品、有孔石製品、石製円盤、球状石製品、不明石製品等である。

線刻石製品 (図版第71図、写真図版第62図)

1・2の2点が出土している。1はほぼ完形で、形状は変形菱形状を呈し、板状である、最大長9.3cm、最大幅5.9cmで、厚さは1.6cmである。表面には細い沈線によって草花様の文様が施され、周縁には1条の細い沈線文が巡らされるものである。石材は白色細粒凝灰岩で、軟質である。2は上端部のみの残存であるが、形状は1とほぼ同様で、変形菱形状を呈するものと考えられる。残存部の最大幅は8cmで、厚さは2.7cmである。表面には細い沈線によって草花様の文様が施されるものである。石材は白色細粒凝灰岩で、軟質である。

有孔石製品 (図版第71図、写真図版第62図)

3・4の2点の出土で、垂飾品と考えられる。3は一部欠損しているが、残存部から形状は長楕円形を呈するものと考えられる。中央付近に1箇所貫孔を有し、周縁中央部には溝状の沈刻が巡らされるものである。4はほぼ楕円形を呈し、中央上部に1箇所貫孔を有するものである。3・4共に石材は白色細粒凝灰岩である。

板状石製品 (図版第71図、写真図版第62図)

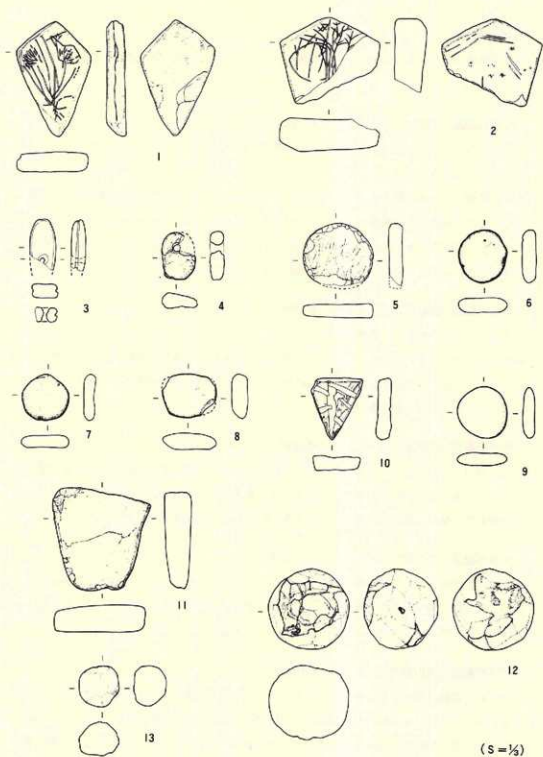
5～11の7点が出土している。5～7・9はほぼ円形状に形が整えられ、5は一部欠損しているが、全面がよく研磨されるものである。8は長方形状で、11は逆台形状を呈している。10は三角形状を呈し、縦位及び斜位に浅い沈刻が施されるものである。

球状石製品 (図版第71図～72図、写真図版第63図)

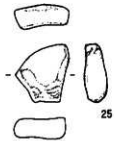
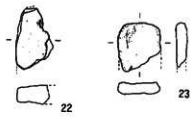
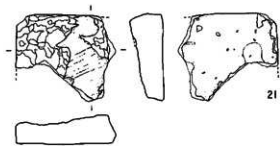
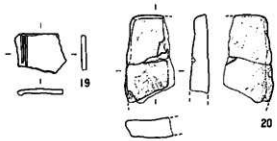
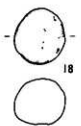
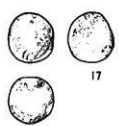
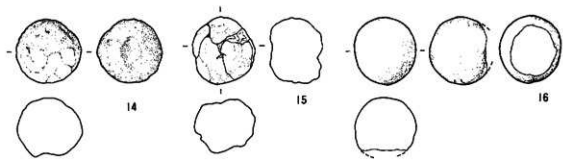
礫の一部が磨られ、形状が球状に整えられているものを一括した。12～18の7点が出土している。12・15は若干自然面を残すが、ほぼ全体が磨り巡らされるものである。13・14・16～18は礫の一部が磨られ、ほぼ球状に整えられるものである。

不明石製品 (図版第72図、写真図版第63図)

いずれの器種に属するものかは不明であるが、調整痕が認められるものを一括した。19～27の9点が出土している。20～24は周縁部に形状を整える縁取りの痕跡が認められるものである。25・26は一部に研磨面の認められるもので、25は表面と周縁の一部に、26は表面の一部に認められる。27は表面中央部が凹むように調整されるものである。19は表面一部に縦位の沈刻が認められるものである。



圖版第71圖 石製品(1)



(S = 1/2)

図版第72図 石製品(2)

2. 古代の遺物（図版第73図、写真図版第64図）

遺構外から出土した遺物は、土師器・須恵器・鉄滓であり、出土量は少ない。

土師器

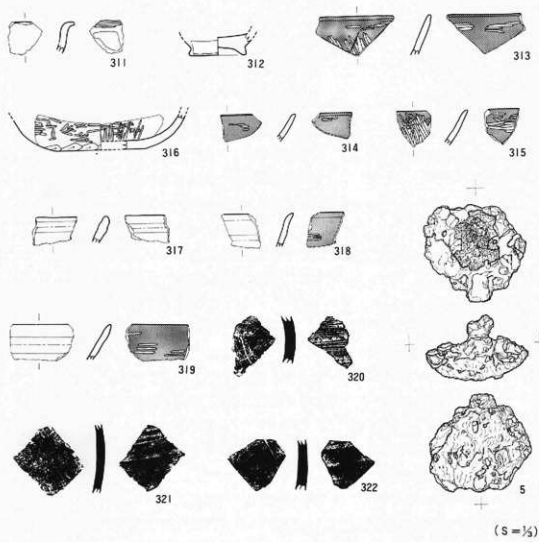
311は甕形土器の口縁部片で、ロクロ不使用のものである。口縁部が強く短く外反する。312は高坏の底部でロクロ不使用のものである。内面にはミガキ調整後、黒色処理が施されている。313～319は坏形土器の破片で、313～316はロクロ不使用のもので、317～319はロクロ使用のものである。313～315は口縁部片で、口縁部はほぼ直立する。いずれも内外面共にミガキ調整後、黒色処理が施されている。316は底部片で、外面にケズリとミガキが施され、内面にはミガキが施されている。317～319は口縁部片で、317・319は口縁部がほぼ直立し、318は口縁部がやや外反する。318・319は内面にミガキ調整後、黒色処理が施されている。

須恵器

320～322の3点のみの出土で、いずれも甕形土器の胴部片と考えられる

鉄滓

5の1点が出土している。形状は碗形を呈するものである。



図版第73図 古代の遺物

VI まとめ

1. 遺構

(1) 住居跡

〈縄文時代〉

縄文時代の住居跡は2棟であるが、いずれも壁は遺存しないものである。1棟は床面の一部かと考えられる堅い部分と炉を残すだけであり、他の1棟は石囲い炉だけのものである。よって形状・規模等その全容を把握することはできなかった。土壌の流失等によって壁は破壊されたものと考えられるが、周辺から出土している縄文土器は殆どが縄文時代後期初頭のものであり、この2棟もその時期に属する可能性がある。また遺物の量や出土状況から、遺跡の主体は調査区北西の斜面上方に存在する可能性があげられるほか、土壌の流失や畑地造成に伴う削平により2棟以外は既に消滅していることも考えられる。

〈奈良時代〉

奈良時代の竪穴住居跡は5棟検出され、3棟は調査区中央平坦部に位置し、2棟は南側に張り出す緩斜面に位置する。5棟共、平面形はほぼ隅丸方形を呈し、規模は1辺が300cm~410cmの範囲である。埋土にはいずれも十和田a火山灰がレンズ状に厚く堆積しており、自然堆積の様相を呈している。また、十和田a火山灰が埋土上部に堆積するものと埋土中部から下部にかけて堆積するものとの違いは、廃棄後の埋没の度合が占地する地形の関係から異なったためと考えられる。床面には貼り床や周溝等は認められず、柱穴と考えられるものも、CII02住居跡以外からは検出されていない。CII02住居跡のものも上屋構造を把握し得るものではない。また5棟共、床面や埋土下部から多量の炭化材が出土していることや、CIII01住居跡の壁の一部が焼成を受けていること等から、これらはいずれも焼失を受けたものと考えられる。カマドは北西壁のほぼ中央に設けられている。煙道部はCII03住居跡のものが上部削平のため明確ではないが、他の4棟は朝貫き式であり、CII03住居跡も同様だったものと考えられる。煙道部は北西方向へのびている。BIII02住居跡はカマドが作り変えられたものと考えられ、旧煙道部の一部が残存し、新煙道部より若干北方向へのびている。出土遺物は非常に少なく、カマド及び床面から出土したものは甕形土器、坏形土器、高坏の破片が若干である。AIV01住居跡のカマドから出土した甕形土器は頸部に段を有するもので、底部内面は球面である。胴部外面にはハケメが施されている。BIII02住居跡のカマドから出土した甕形土器は、口縁部が欠損している。頸部に段を有し、底部内面は球面である。胴部外面にはヘラミガキが施されている。CIII01住居跡の床面から出土した甕形土器の破片は口縁部が内湾気味のもの、外反するもの、頸部に段を有するもの等が見られるが、破片であり、詳細は不明である。これらはいずれもロクロ不使

用のものである。C II02住居跡のカマド脇床面から出土した坏形土器はロクロ不使用のもので、平底である。内面には黒色処理が施されている。C II03住居跡のカマド脇床面から出土した坏形土器はロクロ不使用のもので、平底である。体部に段を有するが、特に内面の段は形骸化している。内面にはミガキ調整後に黒色処理が施されている。

これまで述べてきた状況から考えて、これら5棟の住居跡はほぼ同時期に存在したものと考えられ、遺物等からみて奈良時代後半（8世紀後半）の時期と推定される。

〈平安時代〉

平安時代の竪穴住居跡は5棟検出された。そのうち4棟は調査区中央平坦部から南側に張り出す緩斜面に、ほぼ一直線で等間隔に占地し、他の1棟は、調査区東端の丘陵突端部に占地している。また南側斜面のAIV02住居跡とBIII01住居跡は奈良時代の住居跡と壁を接するように構築されており、住居本体とは重複していない。これは、AIV01住居跡など現在でも周辺地形よりくぼんで見えることから、AIV02住居跡構築時にはそのくぼみがより明確であったものと考えられ、前時代の住居跡と考えられるくぼみを避けて構築されたものと考えられる。これは北海道縄文文化期の集落形成に類似している。また、C II01住居跡がC II03住居跡を切って構築されていることについては、構築時点で、C II03住居跡は埋没してしまっていたものと考えられる。以下、5項目について簡単にまとめる。

① 形状・規模

平面形は、隅丸方形が2棟（AIV02住居跡・C III02住居跡）で、他は隅丸長方形を呈する。またB III01住居跡は北西の壁隅部が半円状に外側に張り出している。規模は、C II01住居跡が当遺跡最大のもので、一辺が555cm～575cmである。他の4棟は一辺が350cm～425cmの範囲である。

② 埋土

いずれも自然堆積の様相を呈しており、十和田^a火山灰の混入は認められない。

③ 床面

いずれも貼り床や周溝は認められない。柱穴と思われるものはC II01住居跡とDIV01住居跡から検出されているが、いずれも上屋構造を把握し得るものではない。またC II01住居跡とC III02住居跡の床面や埋土下部からは多量の炭化材が出土しており、これらは焼失したものと考えられる。

④ カマド

カマド本体はいずれも崩壊しており、僅かに痕跡を残すだけのものも含めて4棟から検出された。AIV02住居跡は南東壁の中央北寄りに設けられたものと考えられ、掘り込み式の煙道部をもつ。B III01住居跡は東壁中央北寄りに、C III02住居跡は南東壁の中央南寄りに設けられ、

C II01住居跡は南東壁隅部に設けられたものと考えられる。煙道部はAIV01住居跡以外は検出されず、B III01住居跡、C II01住居跡は特に煙道部をもたないタイプの可能性がある。

⑤ 附帯施設

4棟の床面から土坑が検出されている。B III01住居跡・C II01住居跡ではカマド脇に位置し前者は不整形円形、後者は楕円形を呈する。C III02住居跡では北面壁際に位置し、楕円形を呈する。DIV01住居跡では南壁中央壁際と西壁際中央北寄りから各々1基検出されており、不整形円形を呈する。

⑥ 出土遺物

カマド、床面及び埋土から出土した土師器甕形土器はすべてロクロ不使用のものである。胴上半部に脹らみをもつもの、胴中央部に脹らみをもつもの、口縁部が緩く外反するもの、強く外反するもの等種々認められるが、口縁部は概して短い。B III01住居跡、C II01住居跡、C III02住居跡の床面及びカマドから出土した土師器環形土器はすべてロクロ使用成形のもので、底部切り離しは回転糸切りである。底部外面に再調整の認められるものと無調整のものがある。須恵器は3棟から出土しているが、量は少ない。

以上の状況から平安時代の竪穴住居跡が存在した時期を比定することは、遺物の量が少なく、また破片が多く器形等全容の把握できるものが少ないという点等から非常に困難である。しかし、C II01住居跡はC II03住居跡の埋土である十和田a火山灰を切っていることや、床面から出土したロクロ使用の環形土器等の遺物からみて10世紀前半以降の時期に比定することは可能であろう。また当遺跡の奈良時代の竪穴住居跡の埋土の状態とあわせ、AIV02住居跡をはじめ5棟の自然埋没と考えられる埋土に十和田a火山灰が含まれていないことから考慮すると、これら5棟はいずれも十和田a火山灰が降下した以前に廃棄されたものではないということが推定できよう。とすれば、これら5棟は十和田a火山灰降下以降（10世紀前半以降）の時期に存在したものと考えることができる。また、これら5棟が同一時期の存在であるかどうかについては、住居跡の形状・規模が異なる点や、カマドが検出された4棟はほぼ東壁及び南東壁に設けられることはほぼ類似するにしても、煙道部をもつものやもたないタイプのもの等があり、断定はできない。

(2) 土坑

土坑は15基検出されており、そのうち13基が調査区の北東から東にかけての斜面に位置している。全体の形状で分類すると、ほぼ直方体を呈するものが3基、円筒形のものが2基、フラスコ状が4基、皿状が6基である。

ほぼ直方体を呈するもの（D II101土坑・D III101土坑・D III104土坑）のうち、上端平面形が

D II 101土坑は不整形円形、D III 101土坑が隅丸方形を呈しているが、壁の崩落や下端の形状からみて、全体の形状は直方体に近いものと推定される。検出面はD II 101土坑とD III 101土坑が基本層序第四層である。D III 104土坑は十和田 a 火山灰を切って構築されている。規模はD II 101土坑が他の2基に比べて小さいものである。長軸の方向はD II 101土坑とD III 101土坑が南北方向、D III 104土坑が北北西—南南東方向を示しており、等高線にほぼ平行している。埋土はD III 101土坑とD III 104土坑に十和田 a 火山灰が含まれ、自然堆積状況を呈している。D II 101土坑は一部人為堆積の様相を呈している。遺物はD III 104土坑では土師器、縄文土器、石器が出土し、D II 101土坑の人為堆積層からは須恵器片が出土し、AIV02住居跡から出土した壜形土器と接合している。これらの検出状況・出土遺物等から、これら3基は平安時代に属する土坑と考えられる。

他の12基は縄文時代に属する土坑と考えられる。これらのうち平面形が円形ないし不整形円形を呈するものが9基、楕円形を呈するものが3基である。楕円形を呈するもののうち、B III 101土坑とD III 109土坑は、埋土がいずれも人為堆積の様相を呈している。また、B III 101土坑の検出面には礫が散在し、配石の痕跡が認められることや、D III 109土坑の検出面中央から1個体の土器が潰れた状態で出土していること等から、B III 101土坑とD III 109土坑は墓壇類の可能性が考えられる。

(3) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は3基検出されており、全体の形状で分類すると、円筒形が1基、溝状が2基である。円筒形のもの(C II 101陥し穴状遺構)は調査区南西側斜面に位置し、規模は上端直径170cmで、検出面からの深さは最大110cmである。底面中央部から副穴が1基検出されており、深さは28cmである。これは道茂木の跡と推定される。埋土は検出面から埋土上部にかけて、にぶい黄褐色・明黄褐色の中礫浮石が、最大層厚23cmで堆積している。同様の陥し穴状遺構は近接する大久保遺跡からも検出されている。

溝状のもの(C I 102・C I 103陥し穴状遺構)は調査区北西端部の斜面に位置し、2基並列して占地しており、規模は2基共に上端長軸350cm前後・下端長軸270cm前後で、深さは80cm前後である。長軸の方向はいずれも北北西—南南東方向を示しており、この方向は等高線にほぼ直交する。埋土は自然堆積状況を呈し、2基共にほぼ同様のあり方を示している。以上のことから、溝状のものは形状に若干の違いはあるものの、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。

以上の諸状況や検出状況等から各遺構の時期を推定してみると、円筒形のものには埋土に中礫浮石が堆積しており、中礫浮石降下以前に構築されたものと考えられ、縄文時代前期以前と推定される。溝状のものは検出状況等から、円筒形のものよりは新しい時期の構築と考えられ、

形状等からは縄文時代後期のものと推定される。

(4) 炭窯跡

2基のうち調査区北西部から検出された1基は、上端130cm×100cmの長方形を呈し、深さは最大16cmである。形状及び占地状況から近世以降の構築と考えられる。他の1基は調査区南側緩斜面から検出され、平面形は楕円形を呈する。焼成部の前方及び両脇に製炭部が設けられる構造を示す。遺構の時期は明らかではない。

(5) 焼土遺構

3基の焼土遺構は、径33cm～60cmの範囲で焼成を受けているものであるが、その時期や性格等は不明である。

2 遺構外の出土遺物

遺構外から出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器、縄文時代の土製品、石器、石製品等である。そのなかで数的に大半を占めるのが縄文土器である。ここでは縄文土器を中心に記述する。

(1) 縄文土器

縄文土器については文様モチーフ等の相違から便宜上第1群から第7群に分類したが、これは編年順を意味するものではない。しかしこれらはすべて、後期初頭から所謂十腰内I式期の範疇に属するものと考えられものである。第1群土器は地文に縄文を施した後、沈線文のみが施されるものである。第2群土器は第1群土器の文様構成に磨消の手法が加えられたものであるが文様モチーフに明確なパターンがみられないものである。第3群土器は文様手法は第II群土器と同様であるが、磨消の手法がより多用され、文様モチーフもパターン化されるものである。これら第1群～第3群土器は蜷沢第1群～第3群土器に相当するものであり、関東地方の堀之内式、東北地方南東部の宮戸I式、南境式に併行するものと考えられる。また文様手法についてみると、第2群土器は第1群土器と第3群土器との中間的な位置にたつものと思われ、第1群土器から第3群土器は発展段階をあらわすものとみることでもできる。第4群土器は所謂十腰内I式土器に相当するものである。第5群土器は網目状燃糸文が施されるものである。第6群土器は縄文のみが施されるもので、第5群・第6群土器は第1群土器から第IV群土器に伴う土器群と考えられる。第7群土器は切断土器、異形土器、ミニチュア土器を一括したが、切断土器は文様モチーフ等から十腰内I式土器に伴うものと考えられる。異形土器はこれまで他に類例のみられないものであるが、出土状況や胎土等からは出土している縄文土器群と同一時期

のものと考えられる。

(2) その他の遺物について

出土した土製品、石器、石製品は土製品の文様や出土状況等からみて、縄文土器群に伴うものと考えられる。これらの中で、ここでは線刻石製品として分類したものについて若干述べてみたい。線刻石製品としたものは2点出土しているが、ほぼ完形である1点（図版番号1）について考えてみたい。これは調査区北東側斜面の基本層第IV層中部で、縄文土器等の遺物包含層から出土している。形状は変形菱形を呈し、板状である。表面には細い沈線によって草花様の文様が施されているもので、根・茎・葉・花を意味すると思われる表現がなされている。周縁には1条の沈線が巡らされている。これと形状が類似する石製品として二戸市上里遺跡E-22住居跡出土の岩偶や、青森県熊沢遺跡出土の岩偶があげられる。しかし、熊沢遺跡のそれは頭部や肩部等明らかに人体表現がなされるものであり、上里遺跡出土のものも微妙ではあるが頭部表現等がなされるものである。そういう意味では当遺跡のものはそういう表現がなされず、文様も草花以外のものとは考えられないことから、岩偶類ではないと考えられ、線刻石製品として分類したものである。またその用途等についても、出土状況や周辺の状況等からは判断の材料は得られておらず、不明である。

おわりに

調査の結果、当遺跡は縄文時代、奈良時代、平安時代の複合遺跡であることが判明した。断面図（図版第2図）からも明らかなように、三方が深い沢と丘陵崖に、他の一方が急に高度を上げる丘陵に限られる舌状の尾根上に集落が形成されている。ここで問題となるのは、生活を営む場合不可欠のものである水の確保ということである。近くに湧水のある場所は確認されておらず、南西側及び北東側の沢か沢内川から水を得るということになるであろう。（現在でも遺跡の北側にある民家では北東側の沢から水を機械的に汲み上げて使用している状況である。）その場合、沢は深く急斜面をなしていること等から、水を確保するためには多大な困難を伴ったものと推定されるのである。それにも拘らず、そこに生活の場を求めたことにはそれなりの意味が考えられる。たとえばある程度の広がりをもつ平坦地が周辺にあまり見受けられないということもあろうし、また地形的には外敵からの防御という観点からすれば適しい場所ということとも関係するかもしれないが、いずれも推測の域をでるものではない。さらに古代の集落にあっては生業的な側面、たとえば製鉄関係、木工関係等からも当遺跡の集落の性格を考察する必要があるであろうが、現時点では資料が不足しており、不明である。しかし古代の集落については、高地に営れていることや住居跡の配置状況に特徴があること等、該期の集落に

ついでに好資料が得られた。

参 考 文 献 等

- 藤本 強 「北辺の遺跡」 教育社
林 謙作編集 「図説発掘が語る日本史1」 新人物往来社
関 豊 「駒場遺跡緊急発掘調査報告書」 二戸市教育委員会
今井富士雄他 「十腰内遺跡」(「岩木山」所収) 岩木山刊行会
葛西 勳他 「蛭沢遺跡」 青森市蛭沢遺跡発掘調査団
中村良幸 「立石遺跡」 大泊町教育委員会
鈴木道之助 「石器の基礎知識III」 柏書房
芹澤長介編 「聖山」 東北大学文学部考古学研究会
岡村道雄 「ピエス・エスキューについて」(「東北考古学の諸問題」所収) 寧楽社
工藤泰博他 「熊沢遺跡」 青森県教育委員会
高橋与右エ門他 「上里遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財センター

表2 石器一覽表(1)

遺物 番号	器 種	出土地点	法 量				石質・生成年代	図版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
001	石 鏃	DIII104土坑	23	11	4	0.85	泥質チャート、北上山地、古生界	19
002	石 鏃	DII・N区	18	11	4	0.70	珧質泥岩、磐石西部、新第三系中新統	28
003	石 鏃	DIV01住	32	13	3	1.25	泥質チャート、北上山地、古生界	16
004	石 匙	BIII01住	39	20	7	4.65	チャート質淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	8
005	不定形石器	AVI01住	41	25	8	7.20	凝灰質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	1
006	石 鏃	DIII109土坑	68	9	9	4.75	凝灰質珧質泥岩、磐石盆地西部、新第三系中新統	26
007	石 鏃	CIII・B区	30	19	5	2.90	チャート、北上山地、古生界	29
008	石 鏃	DII・DE区	21	20	9	3.10	チャート、北上山地、古生界	30
009	石 鏃	DII・B区	29	24	11	6.55	泥質チャート、北上山地、古生界	31
010	石 鏃	DIII・N区	32	20	11	5.15	泥質チャート、北上山地、古生界	32
011	刺 片	BIII02住	26	12	4	1.30	チャート、北上山地、古生界	
012	石 鏃	DIII・R区	25	31	8	6.35	チャート、北上山地、古生界	33
013	石 鏃	DII・O区	48	13	15	7.35	粘板岩、田山兄畑地区、古生界	35
014	石 鏃	CII・KL区	46	23	16	15.75	凝灰質珧質泥岩、磐石盆地西部、新第三系中新統	36
015	撥・削器	DIII・HI区	31	24	9	5.25	珧質泥岩、磐石西部、新第三系中新統	69
016	撥・削器	DII・NO区	22	13	7	1.75	チャート、北上山地、古生界	91
107	撥・削器	CI・W区	43	28	15	21.20	泥質チャート、北上山地、古生界	66
018	撥・削器	CII・KL区	40	33	12	10.50	チャート、北上山地、古生界	48
019	撥・削器	CII・A区	31	20	11	6.25	泥質チャート、北上山地、古生界	46
020	撥・削器	DII・MN区	24	14	8	2.45	チャート、北上山地、古生界	44
021	撥・削器	DII・NO区	31	23	9	6.05	チャート、北上山地、古生界	47
022	撥・削器	DIII・HI区	43	28	9	9.85	凝灰質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	49
023	撥・削器	DIII・KL区	34	25	11	9.15	泥質チャート、北上山地、古生界	50
024	撥・削器	DII・FG区	35	30	10	16.55	珧質泥岩、磐石西部、新第三系中新統	51
025	撥・削器	DII・Q区	24	18	12	4.15	チャート、北上山地、古生界	52
026	撥・削器	CIII・MX区	31	36	14	15.85	凝灰質珧質泥岩、磐石盆地西部、新第三系中新統	65
027	撥・削器	DII・ $\frac{S}{X}$ 区	45	29	6	10.95	凝灰質珧質泥岩、磐石盆地西部、新第三系中新統	38
028	撥・削器	DIII・RS区	40	28	14	10.40	凝灰質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	67
029	撥・削器	CII・KL区	46	21	12	9.20	珧質泥岩、磐石西部、新第三系中新統	90
030	撥・削器	DIII・FG区	45	26	12	13.20	珧質泥岩、磐石西部、新第三系中新統	53
031	撥・削器	CII・A区	45	37	10	11.00	粘板岩、田山兄畑地区、古生界	68
032	撥・削器	DII・G区	46	23	13	16.85	チャート、北上山地、古生界	37
033	撥・削器	CIII・B区	48	27	11	11.90	凝灰質珧質泥岩、磐石盆地西部、新第三系中新統	54
034	撥・削器	CII・A区	31	21	9	4.20	チャート質淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	71
035	撥・削器	DIII104土坑	32	13	8	2.95	泥質チャート、北上山地、古生界	20

表3 石器一覧表(2)

遺物 番号	器 種	出土地点	法 量				石質・生成年代	図版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
036	掻・削器	DII・NO区	30	27	3	1.95	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	73
037	掻・削器	DIII・KL区	34	27	10	8.60	泥質チャート、北上山地、古生界	39
038	掻・削器	DIII・R区	46	31	9	14.05	チャート、北上山地、古生界	55
039	掻・削器	DII・R区	31	16	7	5.30	チャート、北上山地、古生界	40
040	掻・削器	DII・R区	22	22	5	2.45	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	89
041	掻・削器	DII・IJ区	31	26	10	7.85	チャート、北上山地、古生界	56
042	掻・削器	DII・UV区	47	33	12	18.85	凝灰質硬質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	57
043	掻・削器	DIII・HI区	51	26	11	13.85	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	41
044	掻・削器	CII・B区	40	12	10	3.85	泥質チャート、北上山地、古生界	43
045	掻・削器	DII・K区	32	23	7	2.90	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	58
046	掻・削器	DIII104土坑	29	14	5	2.65	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	21
047	掻・削器	CII・AB区	35	27	14	11.95	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	59
048	掻・削器	BIII・NO区	72	32	12	39.70	粘板岩、田山兄畑地区、古生界	92
049	剥片	DIII・MN区	43	45	13	15.60	凝灰質硬質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	
050	掻・削器	DII・E区	33	39	8	15.65	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	72
051	掻・削器	DIII・HI区	64	28	10	15.90	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	74
052	剥片	DIII・HI区	34	13	9	4.75	泥質チャート、北上山地、古生界	
053	不定形石鏝	DII・U区	27	17	7	2.85	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	120
054	掻・削器	CII・N区	40	37	11	17.55	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	70
055	剥片	CIII・ST区	51	39	13	13.45	輝緑凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	
056	掻・削器	CIII02住	42	45	11	13.35	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	15
057	掻・削器	DII・S区	57	37	15	29.15	チャート質淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	60
058	掻・削器	DIII・CD区	66	64	21	100.00	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	75
059	掻・削器	CIII・KL区	56	27	16	31.60	チャート、北上山地、古生界	87
060	掻・削器	CII・E区	59	42	14	37.20	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	102
061	掻・削器	DIII・UV区	74	37	21	53.70	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	94
062	掻・削器	DIII・AB区	41	17	9	6.45	チャート、北上山地、古生界	61
063	掻・削器	DII・K区	40	17	8	3.25	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	45
064	掻・削器	DIII・PQ区	56	36	12	20.15	凝灰質硬質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	97
065	掻・削器	CII・E区	46	37	9	17.05	凝灰質硬質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	96
066	掻・削器	表土	66	41	19	46.30	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	100
067	掻・削器	DII・ $\frac{S}{X}$ 区	28	21	8	4.35	泥質チャート、北上山地、古生界	77
068	掻・削器	BIV・C区	34	24	10	11.15	粘板岩、田山兄畑地区、古生界	85
069	掻・削器	CIII・B区	58	39	11	23.65	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	79
070	掻・削器	CII・M区	55	35	7	10.35	凝灰岩質硬質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	78

表4 石器一覧表(3)

遺物 番号	器 種	出土地点	法 量				石質・生成年代	図版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
071	鏃・削器	DII・U区	48	20	6	7.05	チャート質淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	80
072	鏃・削器	AIV02住	57	29	9	19.25	凝灰質硬質泥岩、宇石西部、新第三系中新統	6
073	抉入石器	DIII104土坑	47	29	9	10.10	地質泥岩、宇石西部、新第三系中新統	22
074	削 片	CII・UV区	53	47	11	19.90	輝緑凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	
075	鏃・削器	DIII・ $\frac{S}{X}$ $\frac{T}{Y}$ 区	40	30	10	12.45	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	99
076	鏃・削器	DIII・ $\frac{S}{X}$ $\frac{T}{Y}$ 区	54	54	9	31.75	凝灰質硬質泥岩、宇石西部、新第三系中新統	101
077	鏃・削器	CII・O区	35	31	4	4.60	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	98
078	抉入石器	DII・NO区	37	36	9	7.95	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	105
079	抉入石器	CII・R区	27	20	8	5.10	泥質チャート、北上山地、古生界	104
080	抉入石器	CII・N区	43	49	11	18.85	凝灰質硬質泥岩、宇石西部、新第三系中新統	106
081	楔形石器	DIII・R区	29	21	6	5.35	チャート、北上山地、古生界	107
082	楔形石器	BIII01住	20	23	10	3.20	凝灰質珪質泥岩、宇石盆地西部、新第三系中新統	9
083	楔形石器	DII・R区	28	25	11	10.65	チャート、北上山地、古生界	108
084	楔形石器	BIII01住	35	31	8	9.10	泥質チャート、北上山地、古生界	10
085	楔形石器	DIII・KL区	21	19	6	2.80	チャート、北上山地、古生界	115
086	楔形石器	CII・FG区	25	28	7	4.65	チャート、北上山地、古生界	109
087	削 片	DIII・KL区	34	25	13	9.75	泥質チャート、北上山地、古生界	
088	削 片	DII・M区	27	28	9	6.95	チャート、北上山地、古生界	
089	楔形石器	DIII・HI区	28	18	5	3.35	泥質チャート、北上山地、古生界	122
090	削 片	DIII・PU区	50	44	11	31.25	チャート、北上山地、古生界	
091	削 片	CII・FG区	26	23	9	5.75	チャート、北上山地、古生界	
092	楔形石器	CIII・I区	24	26	8	6.30	泥質チャート、北上山地、古生界	111
093	楔形石器	DII・R区	22	22	11	5.20	チャート、北上山地、古生界	110
094	削 片	AIV02住	30	33	8	9.10	チャート質淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	
095	楔形石器	DIII104土坑	36	21	9	8.75	泥質チャート、北上山地、古生界	23
096	削 片	CII・UV区					輝緑凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	
097	楔形石器	CI・UV区	41	33	17	21.00	チャート、北上山地、古生界	113
098	楔形石器	CIII・ST区	25	15	10	3.40	泥質チャート、北上山地、古生界	
099	楔形石器	DII・N区	41	24	11	11.25	泥質チャート、北上山地、古生界	116
100	削 片	CII・FG区	22	23	8	3.60	粘板岩、田山兄畑地区、古生界	
101	不定形石器	BIII01住	24	18	8	3.15	チャート、北上山地、古生界	11
102	楔形石器	DIII109土坑	25	10	4	1.60	泥質チャート、北上山地、古生界	27
103	不定形石器	BIII01住	17	18	9	2.50	泥質チャート、北上山地、古生界	12
104	削 片	CII・KL区					凝灰質珪質泥岩、宇石盆地西部、新第三系中新統	25
105	不定形石器	CH02住	27	17	4	2.00	泥質チャート、北上山地、古生界	3

表5 石器一覧表(4)

遺物 番号	器種	出土地点	法 量				石質・生成年代	図版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
106	剥片	DII・NO区	20	15	10	2.55	チャート、北上山地、古生界	
107	掻・削器	CII02住	25	16	8	2.55	チャート、北上山地、古生界	2
108	掻・削器	DIII・O区	15	19	6	2.20	チャート、北上山地、古生界	103
109	掻・削器	DIII・UV区	34	25	8	6.70	チャート、北上山地、古生界	81
110	掻・削器	BII・O区	39	31	4	12.30	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	63
111	不定形石器	CIII・A区	29	33	8	7.65	粘板岩、田山兄弟地区、古生界	96
112	不定形石器	DIII・CD区	33	24	6	5.65	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	118
113	不定形石器	DIII・PU区	22	36	7	5.25	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	117
114	掻・削器	CII・KL区	47	29	12	16.95	輝綠凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	42
115	掻・削器	DIII・MN区	28	21	6	3.60	凝灰質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	93
116	剥片	CII・FG区	60	48	24	56.95	輝綠凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	
117	不定形石器	DII・R区	40	33	10	13.85	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	124
118	掻・削器	DII・O区	60	37	23	50.60	輝綠凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	82
119	掻・削器	CII・KL区	25	33	7	4.25	輝綠凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	95
120	掻・削器	表土	34	26	8	8.35	泥質チャート、北上山地、古生界	64
121	掻・削器	CII・N区	33	20	5	3.45	凝灰岩質硬質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	83
122	掻・削器	CII・P区	29	21	10	5.55	輝綠凝灰岩質チャート、北上山地、古生界	88
123	掻・削器	CII・KL区	36	32	5	8.15	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	84
124	剥片	DIII104土坑	41	26	15	12.75	凝灰岩質珪質泥岩、礫石盆地西部、新第三系中新統	
125	不定形石器	CIII・B区	76	15	7	11.85	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	119
126	掻・削器	CII・I区	32	29	7	5.80	チャート、北上山地、古生界	86
127	石 鏃	DII・M区	35	24	9	5.55	泥質チャート、北上山地、古生界	34
128	不定形石器	DII・NO区	35	19	12	5.40	泥質チャート、北上山地、古生界	121
129	剥片	DIII104土坑					流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	
130	不定形石器	DIII104土坑	22	20	7	3.40	チャート、北上山地、古生界	24
131	剥片	DII・NO区					チャート、北上山地、古生界	
132	不定形石器	CII・FG区	14	21	7	2.35	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	123
133	剥片	DII・NO区					流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	
134	掻・削器	CII・KL区	43	30	19	22.15	流紋岩質極細粒凝灰岩、二戸郡西部、新第三系中新統	62
135	不定形石器	DII・MN区	57	37	11	19.05	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	122
136	不定形石器	DII102土坑	26	15	5	1.80	珪質泥岩、礫石西部、新第三系中新統	18

表6 石器一覽表(5)

遺物 番号	器 種	出土地点	法 量				石質・生成年代	圖版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
201	石 斧	BIII01住	55	32	11	30	暗綠色凝灰質粘板岩、北上山地、古生界	13
202	石 斧	DII・K区	28	25	14	10	輝石★岩、北上山地、古生界	125
203	石 斧	DII・G区	27	18	9	5	粘板岩、北上山地、古生界	126
204	石 斧	DII・B区	115	40	28	210	輝石★岩、北上山地、古生界	127
205	石 斧	CII・UV区	74	47	29	15	輝石★岩、北上山地、古生界	128
206	石 斧	CIII・D区	83	45	28	180	輝石★岩、北上山地、古生界	129
207	石 斧	CII・A区	89	43	31	180	輝石★岩、北上山地、古生界	130
208	石 斧	CII・R区	65	54	31	165	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	131
209	石 斧	DIII・HI区	38	42	22	70	輝石★岩、北上山地、古生界	132
210	石 斧	CII・FG区	55	34	23	55	凝灰質硬砂岩、北上山地、古生界	133
211	石 斧	CII・B区	49	43	16	40	暗綠色凝灰質粘板岩、北上山地、古生界	134
212	石 斧	DIII・RS区	94	31	12	35	凝灰質硬砂岩、北上山地、古生界	135
213	磨 石	CII・AB区	112	73	47	580	凝灰質硬砂岩、北上山地、古生界	136
214	磨 石	BIII・E区	103	89	52	740	珪岩、北上山地、古生界	137
215	磨 石	DIII・KL区	73	89	41	465	粘板岩、北上山地、古生界	138
216	磨 石	CII・KL区	108	81	47	655	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	139
217	磨 石	CII・I区	107	79	55	710	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	140
218	磨 石	CII・AB区	88	60	43	350	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	141
219	磨 石	BIII01住	89	61	40	265	粘板岩、北上山地、古生界	14
220	磨 石	BII・T区	101	55	50	615	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	142
221	磨 石	DII・DE区	97	71	56	535	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	143
222	磨 石	CII・KL区	124	78	62	900	閃綠岩、北上山地、中生界	144
223	磨 石	CII・FG区	86	67	43	315	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	147
224	磨 石	CII・A区	107	87	57	700	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	145
225	磨 石	CII・KL区	121	94	48	890	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	146
226	磨 石	DIII・HI区	117	76	32	745	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	149
227	磨 石	CII・E区	48	38	27	70	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	147
228	敲 石	DIII・HI区	82	71	43	350	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	174
229	敲 石	CII・DIN区	76	69	43	315	珪岩、北上山地、中生界	173
230	磨 石	CI・Y区	68	98	25	225	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	150
231	凹 石	CII・O区	109	46	36	290	砂質凝灰岩、二戸郡奥羽山地、中新統	153
232	凹 石	CII・UV区	110	74	39	435	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	154
233	凹 石	CIII01住	94	78	54	560	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	5
234	凹 石	CII・M区	91	81	48	510	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	155
235	凹 石	CII・DIN区	95	63	36	315	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	156
236	凹 石	CII・AB区	105	70	35	370	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	157
237	凹 石	CII・B区	90	102	34	460	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	158

表7 石器一覽表(6)

遺物 番号	器種	出土地点	量				石質・生成年代	図版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
237	凹石	C II・R区	130	88	40	415	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	159
239	凹石	D III・Q V区	107	82	59	570	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	160
240	凹石	C III・D _I E _J 区	106	56	55	250	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	161
241	凹石	C II・U V区	121	80	28	360	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	162
242	凹石	C II・B区	100	79	48	510	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	163
243	凹石	B II・O _K 区	124	69	49	340	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	164
244	凹石	C II・F G区	85	55	38	255	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	166
245	凹石	C II・K区	118	90	25	390	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	165
246	凹石	B III 101土坑	103	67	60	565	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	17
247	凹石	D III 104土坑	103	91	54	600	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	
248	凹石	C II・M区	81	98	63	620	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	168
249	凹石	B III・E区	157	78	27	460	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	169
250	凹石	C II・N区	94	82	43	480	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	167
251	凹石	C II・M区	113	55	49	495	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	170
252	凹石	C II・B区	63	78	54	290	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	171
253	凹石	C II・A B区	89	73	31	265	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	172
254	磨石	C II・K L区	101	69	36	375	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	151
255	敲石	C II・K L区	52	44	18	55	凝灰質珪質泥岩、磐石盆地西部、新第三系中新統	175
256	敲石	B IV・C区	63	48	29	110	チャート質淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	176
257	敲石	C II・M区	65	62	49	290	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	179
258	會石	C II・M区	98	54	59	555	凝灰質硬砂岩、北上山地、古生界	152
259	敲石	D III・H I区	79	72	36	320	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	178
260	敲石	A IV 02住	156	65	39	575	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	7
261	敲石	C II・I区	100	95	49	820	閃緑岩、北上山地、中生界	177
262	敲石	C II・A B区	101	88	38	495	淡緑色凝灰岩、北上山地、古生界	180
263	敲石	C II・U V区	92	90	51	525	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	181
264	敲石	C I・W区	158	40	15	145	千枚岩、北上山地、古生界	182
265	石皿	C II・A B区	84	126	32	330	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	185
266	石皿	D III・M区	127	185	27	780	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	183
267	石皿	D III・P Q区	74	43	16	40	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	184
268	石皿	B II・O _K 区	118	104	62	810	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	187
269	石皿	C II・A B区	118	97	29	300	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	189
270	石皿	C II・K L区	101	88	52	720	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	188
271	石皿	C I・Y区	189	320	73	3,730	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	186
272	石棒	C II・E区	237	67	65	1,790	角閃石英安山岩、名久井岳、新第三系中新統	190
273	石棒	C II・F G区	136	108	74	1,520	角閃石英安山岩、名久井岳、新第三系中新統	191
274	石棒	C II・A B区	126	105	75	1,280	角閃石英安山岩、名久井岳、新第三系、中新統	192

表 8 石製品一覽表

遺物 番号	器 種	出土地点	法 量				石質・生成年代	図版 番号
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
301	線刻石製品	D II・D 区	93	59	16	51.30	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	1
302	線刻石製品	D II・S 区	(63)	80	27	70.00	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	2
303	有孔石製品	C III・S T 区	(41)	11	12	11.65	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	3
304	有孔石製品	C II・A B 区	37	27	12	9.05	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	4
305	板状石製品	B II・O 区	69.0	56	11.5	41.60	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	5
306	板状石製品	C II・B 区	43	39	11	15.45	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	6
307	板状石製品	D II・M 区	37	38	10	7.85	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	7
308	板状石製品	D II・K L 区	36	44	13	16.10	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	8
309	不明石製品	C II・D E 区	30	33	16	10.25	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	26
310	不明石製品	C II・D E 区	(46)	(40)	18	22.40	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	25
311	板状石製品	C II・J 区	41	40	10	25.55	粘板岩、北上山地、古生界	9
312	球状石製品	C II・B 区	51	52	45	69.00	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	14
313	球状石製品	C II・F G 区	65	65	60	203.00	砂質凝灰岩、二戸郡下奥羽山地、中新統	12
314	球状石製品	C II・A B 区	53	50	41	67.00	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	15
315	球状石製品	C II・B 区	33	32	27	19.60	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	13
316	球状石製品	B III・N O 区	55	50	(42)	142.00	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	16
317	球状石製品	C II・A B 区	40	36	37	71.00	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	17
318	球状石製品	C II・F G 区	45	41	36	61.00	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	18
319	不明石製品	D III・C 区	(31)	(38)	3	9.00	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	19
320	不明石製品	C II・A B 区	(75)	(40)	15	23.35	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	20
321	板状石製品	C II・A B 区	50	42	12	12.70	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	10
322	板状石製品	C II・J 区	81	79	21	111.00	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	11
323	不明石製品	C II・J 区	(58)	(80)	21	56.40	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	21
324	不明石製品	C II・A B 区	(38)	40	17	16.45	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	24
325	不明石製品	C II・U V 区	(38)	34	9	10.70	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	23
326	不明石製品	C II・A B 区	34	44	9	7.95	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	27
327	不明石製品	D II・D 区	(49)	(30)	15	16.25	白色細粒凝灰岩、礫石西南部、新第三系中新統	22

表9 土師器・須恵器一覽表(1)

(順)一須恵器

遺跡 番号	遺跡名	種類	出土地点	外 形 調 査			内 形 調 査			底 部 (外観)	法 量 (cm)			備 考	図帳 番号
				口縁部	杯 部 上 半	杯 部 下 半	口縁部	杯 部 上 半	杯 部 下 半		口 径	底 径	高 度		
1	A IV 01 住	甕	カマド	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘズリ	15.0	7.7	17.3	口縁部改修 痕跡に似	1
2	#	甕	埴土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	2
3	#	甕	埴土			ヘズリ		ヘラナデ				6.5		底 部	3
4 (順)	A IV 02 住	甕	埴土	ロクロ	ロクロ	ヘズリ	ロクロ	ロクロ	ヘラナデ		15.6				42
5	B III 01 住	甕	カマド 土灰	ヨコナデ	ヘズリ	ヘズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘズリ	15.7	6.8	16.6		45
6	#	甕	カマド	ヨコナデ	ヘズリ	ヘズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		(12.8)				46
7	#	甕	灰 甕	ヨコナデ	ヘズリ		ヨコナデ	ヘラナデ (ナデ)			(20)				47
8	#	甕	カマド			ヘズリ			ヘラナデ		10	2.3		底 部	48
9	#	坏	灰 甕	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ			13			口 縁 部	49
10	#	坏	灰 甕	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ						口 縁 部	50
11	#	坏	灰 甕	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ						口 縁 部	51
12	#	坏	灰 甕	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ						口 縁 部	52
13	#	坏	埴土	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ						口 縁 部	54
14	#	坏	埴土			ロクロ								底 部	55
15	#	坏	灰 甕			ロクロ								底 部	53
16 (順)	#	甕	埴土	ロクロ			ロクロ								57
17 (順)	#	甕	灰 甕		ヘズリ			ロクロ							56
18	B III 02 住	甕	カマド	ヨコナデ	ヘズリ ミガキ	ヘズリ ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ		ヘズリ	7.8			口縁部欠	7
19	#	甕	埴土						ヘラナデ		7.8			底 部 痕跡に似	8
20	#	坏	埴土	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ			(12.1)			口 縁 部 内 底 部	9
21	C II 01 住	甕	カマド			ヘズリ			ヘラナデ			11.2			61
22	#	甕	埴土	ヨコナデ	ヘズリ		ヨコナデ	ヘラナデ						口 縁 部	65
23	#	甕	土質埴土	ヨコナデ	ヘズリ		ヨコナデ							口 縁 部	64
24	#	甕	埴土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ							口 縁 部	66
25	#	甕	カマド	ヨコナデ	ヘズリ		ヨコナデ							口 縁 部	62
26	#	甕	埴土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	67
27	#	甕	埴土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	68
28	#	甕	埴土	ヨコナデ			ヨコナデ								69
29	#	坏	灰 甕	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	底 部 痕跡に似	14.2	6.8	5.1		63

表10 土師器・須恵器一覧表(2)

(順)一須恵器

器物 番号	遺跡名	群	出土地点	外 面 装 飾			内 面 装 飾			总 部 (内径)	法 量(cm)			備 考	図版 番号
				口縁部	体 部 上 半	体 部 下 半	口縁部	体 部 上 半	体 部 下 半		口径	底径	器高		
30	C II 01 住	环	埴 土	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ			13.6			口縁~下半 内	70
31 (順)	#	埴	コマド												71
32	C II 02 住	环	灰 土	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		(14.5)		5.8	内 底	12
33	C II 03 住	环	灰 土	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		(19.3)	5.4	9.2	口 縁 上 外 底 共 底	15
34	#	环	埴 土											口 縁 部	16
35	C III 01 住	集	埴 土	タズリ	タズリ	タズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		15.8	6.6	8.8		34
36	#	高	埴 土			ミガキ			ミガキ			4.8		内 底	17
37	#	高	灰 土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ			20			口 縁 部	18
38	#	高	灰 土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	19
39	#	高	灰 土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	20
40	#	高	埴 土	ヨコナデ			ヨコナデ	ヘラナデ						口 縁 部	21
41	#	高	埴 土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ						口 縁 部	22
42	#	高	埴 土	ヨコナデ	タズリ		ヨコナデ	ヘラナデ						体 部 上 半	23
43	#	高	埴 土	ヨコナデ	タズリ		ヨコナデ							口 縁 部	24
44	#	高	埴 土	ヨコナデ			ヨコナデ	ヘラナデ						口 縁 部	25
45	#	高	埴 土	ヨコナデ	タズリ		ヨコナデ							口 縁 部	26
46	#	高	埴 土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	27
47	#	高	埴 土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ							口 縁 部	28
48	#	高	埴 土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	29
49	#	高	埴 土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	30
50	#	高	埴 土	ヨコナデ			ヨコナデ							口 縁 部	31
51	#	高	埴 土	ヨコナデ	タズリ		ヨコナデ	ヘラナデ						口 縁 部	32
52	#	高	埴 土			タズリ		ヘラナデ				9		底 部	33
53	#	环	灰 土	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	器底余切痕	13.4	6	2.8	内 底	35
54	#	环	埴 土	ロクロ			ロクロ							口 縁 部 内	36
55	#	环	埴 土			タズリ			ミガキ	タズリ		6.0		底 部 内	37
56	#	环	埴 土	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ						口 縁 部	38
57	#	环	埴 土	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ						口 縁 部	39
58 (順)	#	高	埴 土												40

表11 土師器・須恵器一覧表(3)

(明)一郡市縣

遺物 番号	遺物名	器種	出土地点	外 函 蓋 敷			内 函 蓋 敷			底 部 (外蓋)	法 量(cm)			備 考 図版 番号	
				口縁部	体 蓋 上 半	体 蓋 下 半	口縁部	体 蓋 上 半	体 蓋 下 半		口 徑	底 径	器 高		
59	C III 01 住 壺	カマド	ヨコナテ	ナズリ	ナズリ	ヨコナテ	ヘラナテ	ヘラナテ		18.6			底 部 欠	72	
60	〃	壺	カマド	ヨコナテ	ナズリ	ナズリ	ヨコナテ	ヘラナテ	ヘラナテ		14.4	9.4	22.7		73
61	〃	壺	カマド	ヨコナテ	ナズリ		ヨコナテ	ヘラナテ							74
62	〃	坏	カマド			コテコ ナズリ			1.5ナキ	底縁全切破 内蓋敷	4.8			裏 部	75
63	D IV 01 住 甕	埴 土	ヨコナテ	ナズリ		ヨコナテ	ヘラナテ			11.0					80
64	〃	甕	埴 土	ヨコナテ			ヨコナテ			(14)				口 縁 部	81
65	〃	甕	埴 土	ヨコナテ	ナズリ		ヨコナテ	ヘラナテ						口 縁 部	82
66	〃	甕	埴 土	ヨコナテ	ナズリ		ヨコナテ	ヘラナテ						口 縁 部	83
67	〃	甕	埴 土		ナズリ			ヘラナテ						口 縁 部	84
68	B IV 01 住 炊 高坏	埴 土												底 部 切 破	89
69	D III 104 土 甕	埴 土	ヨコナテ	ハナメ		ヨコナテ	ヘラナテ							口 縁 部	96
70	D III・FG区	甕		ヨコナテ			ヨコナテ							口 縁 部	311
71	C III・ST区	甕		ヨコナテ			ヨコナテ							口 縁 部	
72	C II・C区	坏		1.5ナキ			1.5ナキ							口 縁 部 外 共 蓋	313
73	D III・ST・XY区	坏		1.5ナキ			1.5ナキ							口 縁 部 外 共 蓋	314
74	C III・AB区	坏		1.5ナキ			1.5ナキ							口 縁 部 外 共 蓋	315
75	D II・XY区	坏		コテコ			コテコ							口 縁 部 外 共 蓋	318
76	D III・DUR区	坏		コテコ			コテコ							口 縁 部	317
77	B IV・F区	坏		コテコ 1.5ナキ			コテコ 1.5ナキ							口 縁 部 外 共 蓋	319
78	B III・E J区	坏			ナズリ			1.5ナキ	ナズリ		(3.5)			内 部	316
79	B IV・F区	高坏						1.5ナキ			4.8			内 部	312
80 (底)	D III・ST・XY区	甕													
81 (底)	D III・MN区	甕												裏 部	320
82 (底)	C I U区	甕												裏 部	322
83 (底)	D III・NO区	甕												裏 部	321

写 真 图 版



青ノ久保遺跡航空写真（南東上空から撮影）



青ノ久保遺跡近景（調査前、北西から）

第1図



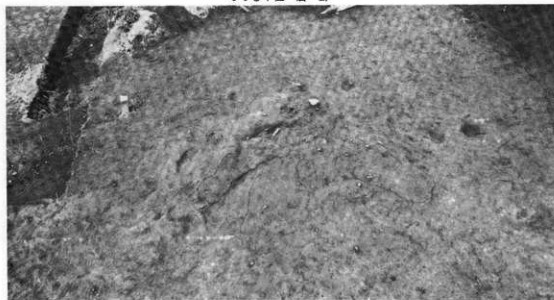
基 本 土 層



調 査 風 景

第 2 図

C101住 居 跡



全 景

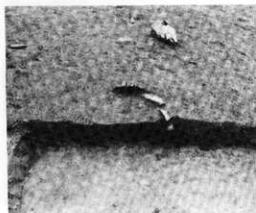


炉 全 景



炉 断 面

C1104住 居 跡



全 景



炉 断 面

第3図



全 景



埋 土 断 面



カ マ ド 全 景



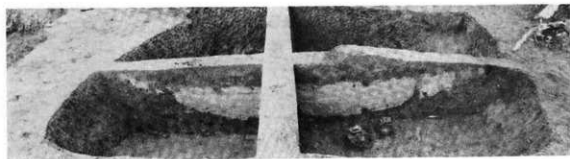
カ マ ド 断 面

AM01住 居 跡

第4図



全 景



埋 土 断 面



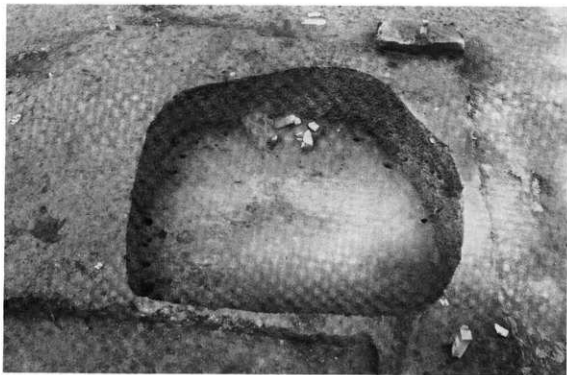
十和田 a 火山灰堆積状況



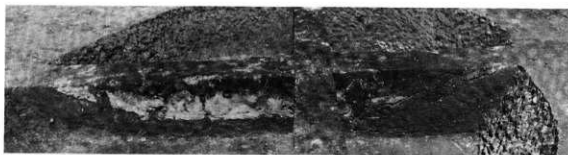
カ マ ド 全 景

B III O 2 住 居 跡

第 5 図



全 景



埋 土 断 面



検 出 状 況



カ マ ド 全 景

C1102住 居 跡

第6図



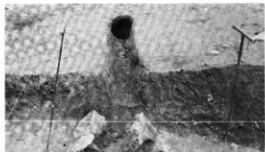
全 景



埋 土 断 面

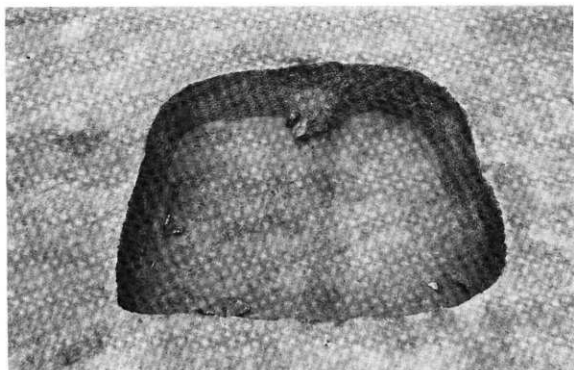


カ マ ド 断 面

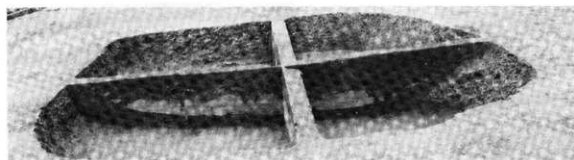


カ マ ド 全 景

C1103住居跡
第7図



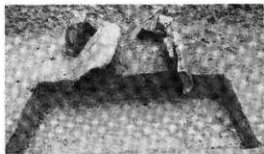
全 景



埋 土 断 面



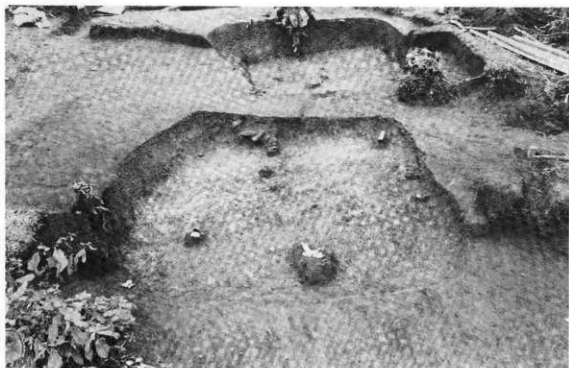
カ マ ド 全 景



カ マ ド 断 面

CIII01住居跡

第8図



全 景



埋 土 断 面



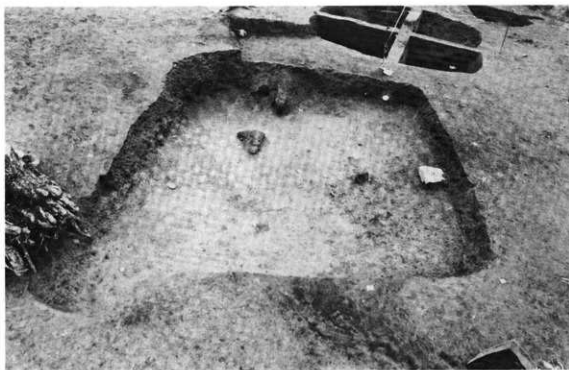
カ マ ド 全 景



カ マ ド 断 面

AVO2住 居 跡

第9図



全 景



埋 土 断 面



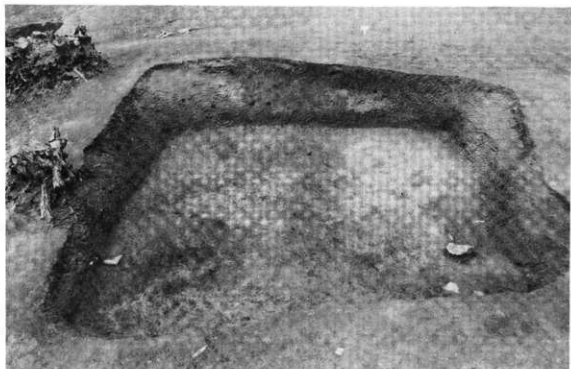
カ マ ド 断 面



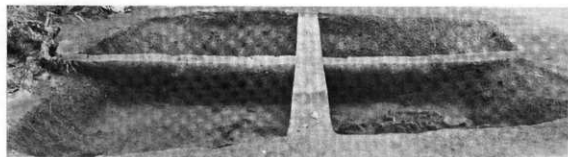
煙 道 断 面

BIII01住居跡

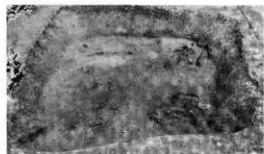
第10図



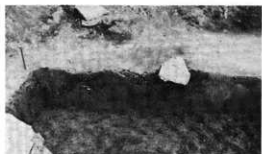
全 景



埋 土 断 面

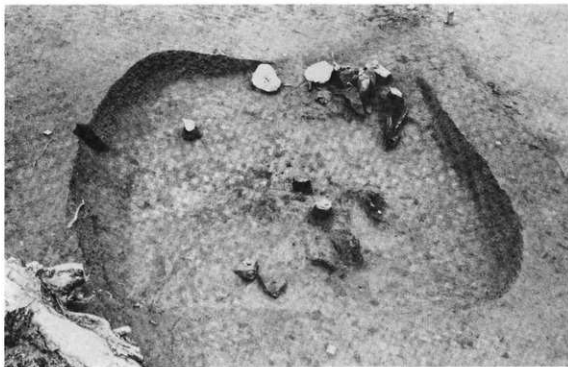


炭化材分布状況



C1101住 居 跡 カ マ ド 断 面

第11図



全 景



埋 土 断 面



検 出 状 況



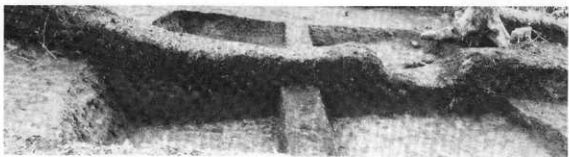
カ マ ド 全 景

CIII02住 居 跡

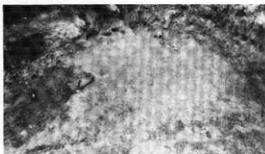
第12図



全 景



埋 土 断 面



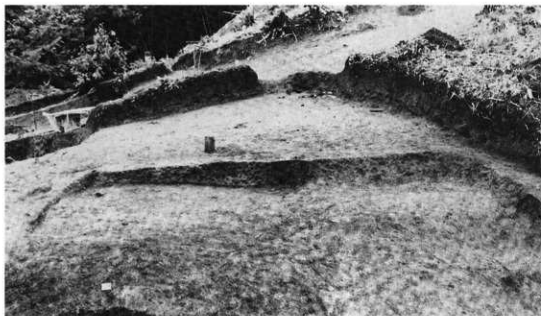
床 面 烧 土



烧 土 断 面

DV01住 居 迹

第13图



全 景



埋 土 断 面

出 土 遺 物



89



91



90

BVO 1 住居跡状遺構
第14図

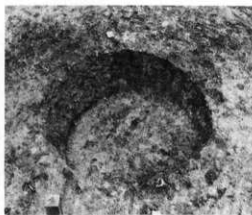


全 景

B III 101 土坑



埋 土 断 面

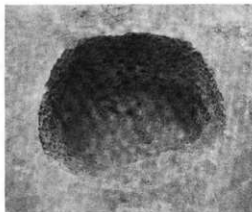


全 景

B V 101 土坑

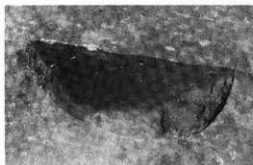


埋 土 断 面



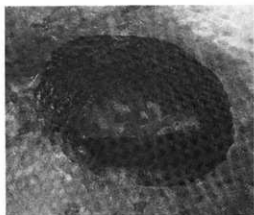
全 景

D II 101 土坑



埋 土 断 面

第15图 土坑(1)

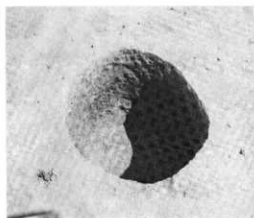


全 景

D II 102 土坑

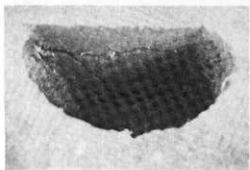


埋 土 断 面

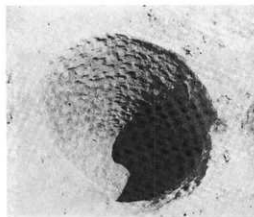


全 景

D II 103 土坑



埋 土 断 面



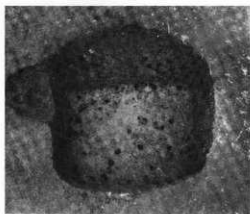
全 景

D II 104 土坑



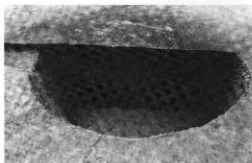
埋 土 断 面

第16图 土坑(2)

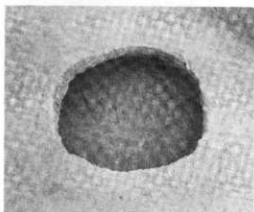


全 景

D III 101 土坑



埋 土 断 面

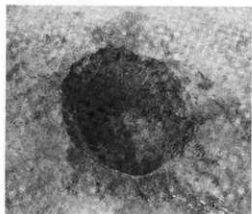


全 景

D III 102 土坑



埋 土 断 面



全 景

D III 103 土坑



埋 土 断 面

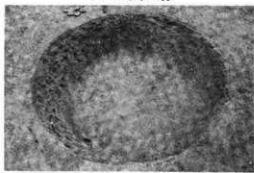
第17图 土坑(3)

D III 104 土坑

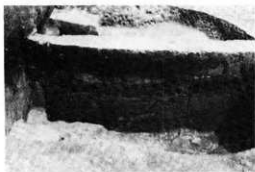


全 景

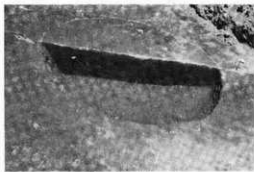
D III 105 土坑



全 景



埋 土 断 面



埋 土 断 面



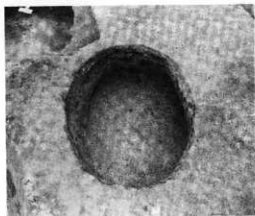
D III 106 土坑埋土断面



D III 107 土坑埋土断面



D III 108 土坑埋土断面



全 景

D III 109 土坑



埋 土 断 面

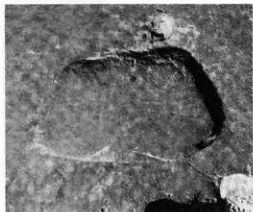


全 景

B IV 102 炭窯跡



埋 土 断 面



全 景

C I 101 炭窯跡



埋 土 断 面

第19圖 土坑(5)・炭窯跡



全 景

C1101 陥し穴状遺構



埋 土 断 面

C1102 陥し穴状遺構

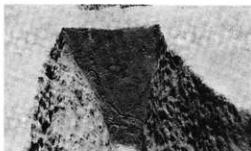


全 景

C1103 陥し穴状遺構



全 景

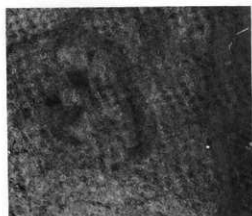


埋 土 断 面



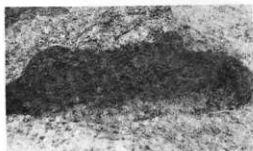
埋 土 断 面

第20図 陥し穴状遺構

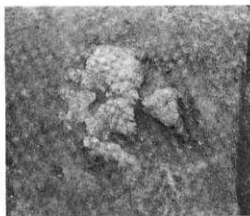


全 景

D II F 烧土遺構



断 面



全 景

D II V 烧土遺構



断 面



全 景

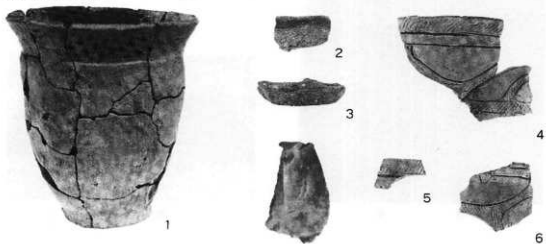
D III K 烧土遺構



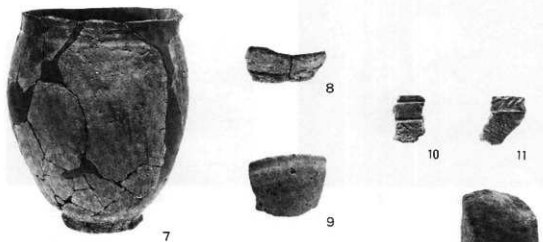
断 面

第21図 烧土遺構

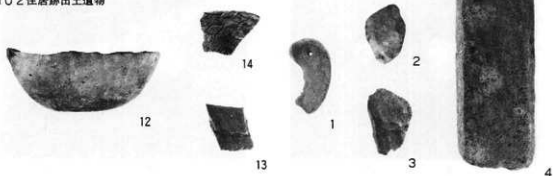
AⅣO1住居跡出土遺物



BⅢO2住居跡出土遺物



CⅡO2住居跡出土遺物



第22図 遺構内出土遺物(1)

C II O 3 住居跡出土遺物



15



16

C III O 1 住居跡出土遺物



18



19



20



21



24



22



23



25



31



26



27



28



29



32



30



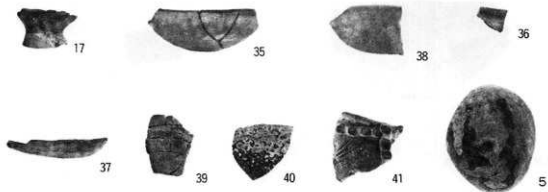
33



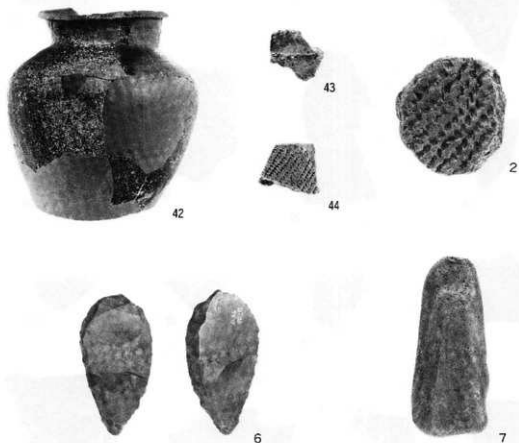
34

第23図 遺構内出土遺物(2)

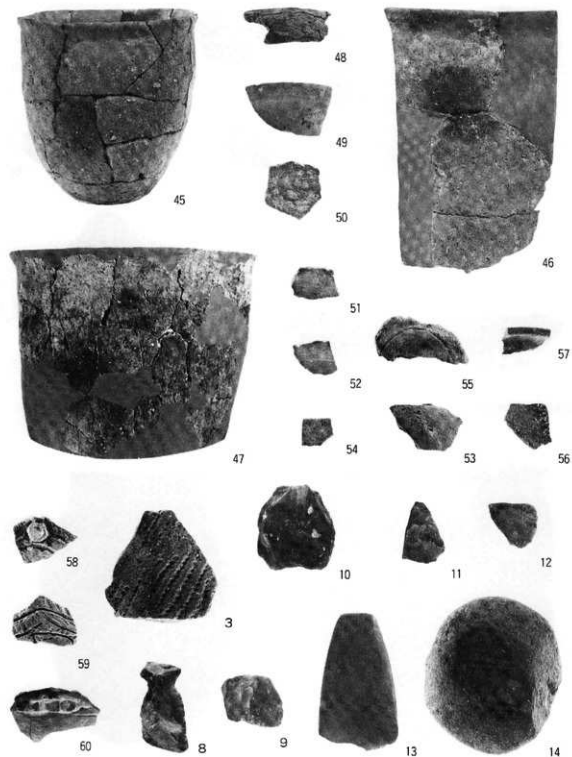
C III O 1 住居跡出土遺物



A V O 2 住居跡出土遺物

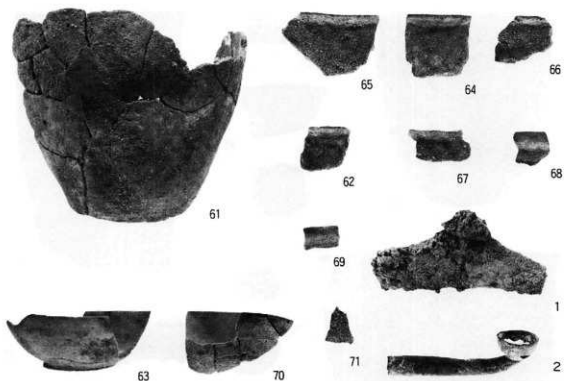


第24図 遺構内出土遺物(3)



第25圖 遺構内出土遺物(4)

C II O 1 住居跡出土遺物

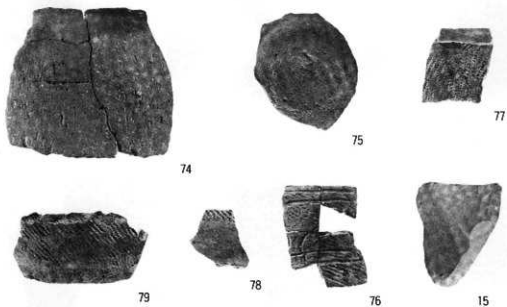


C III O 2 住居跡出土遺物

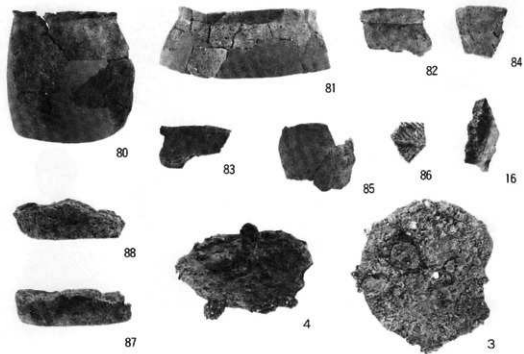


第26図 遺構内出土遺物(5)

C III O 2 住居跡出土遺物



D IV O 1 住居跡出土遺物



第27図 遺構内出土遺物(6)

B III 1 0 1 土坑出土遺物



17

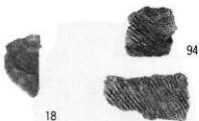
D II 1 0 2 土坑出土遺物



93

92

D III 1 0 2 土坑出土遺物



18

94

95

D III 1 0 4 土坑出土遺物



96



97



98



100



101



103



99



102



22



19



20



24



5



4



6



21



23



25

第28図 遺構内出土遺物(7)

D III 106 土坑出土遺物



104



105

107

106



7

D III 107 土坑出土遺物



108

D III 109 土坑出土遺物



111



110



27



26



109

第29図 遺構内出土遺物(8)



112



113



114



115



116



117



118



119

第30図 縄文土器(1)



120



122



121



124



125



123



127



128



126

第31図 縄文土器(2)



129



130



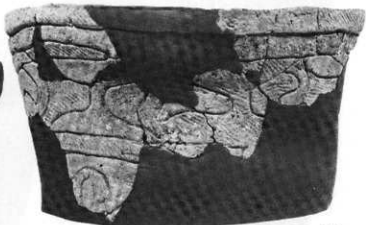
131



132



134



133

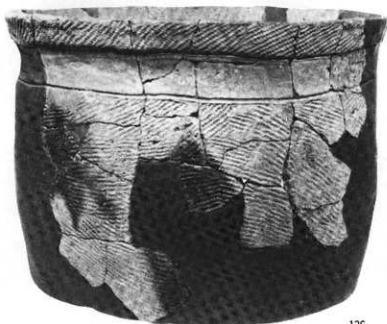
第32図 縄文土器(3)



135



137



136



139



138



140



141



142

第33図 縄文土器(4)



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154

第34図 縄文土器(5)



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164

第35図 縄文土器(6)



165



166



167



168



169

第36図 縄文土器(7)



170



171



173



172



174



175



176

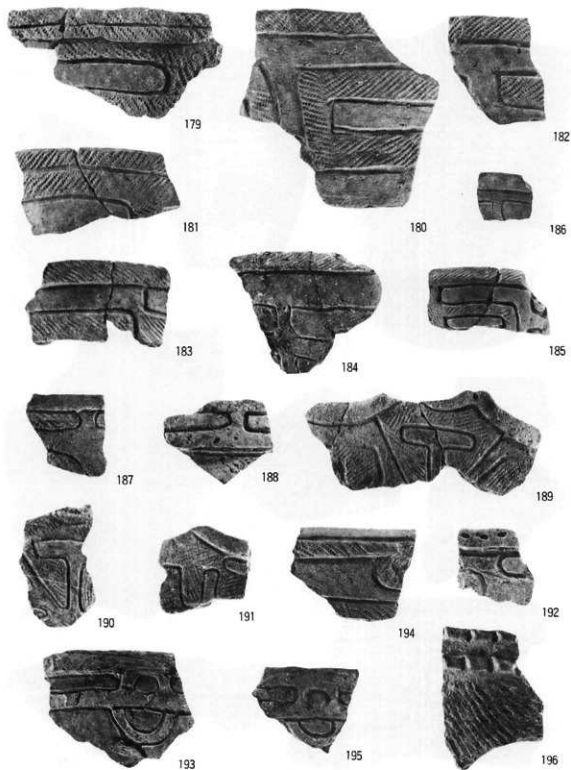


177

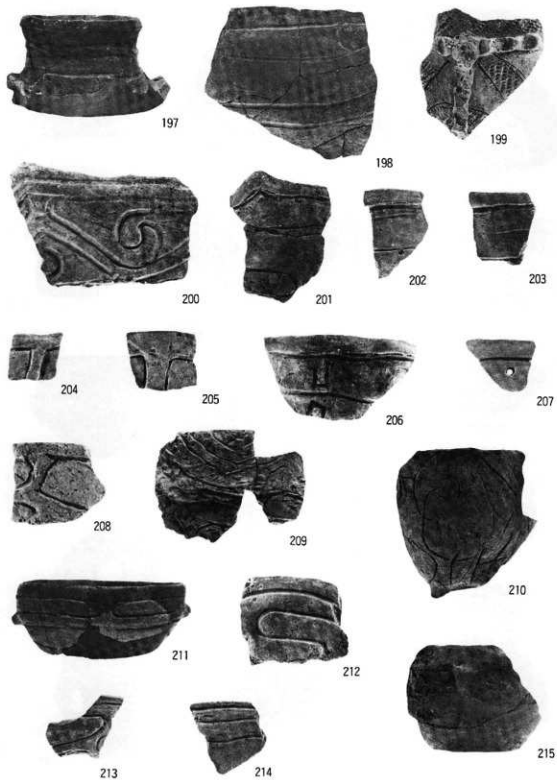


178

第37図 縄文土器(8)



第38図 縄文土器(9)



第39図 縄文土器(10)



216



217



218



219



220



221



222



223



224



226



225



227



228



229



230



231



232

第40図 縄文土器(1)



235



234



237



233



238

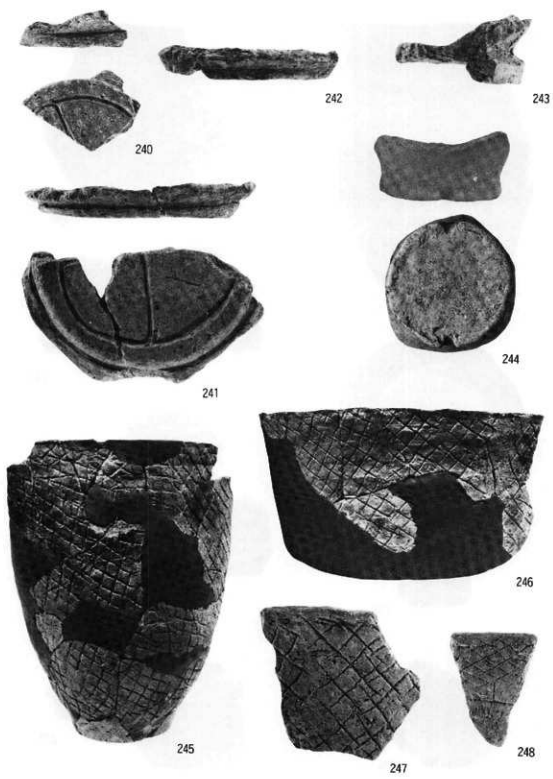


236

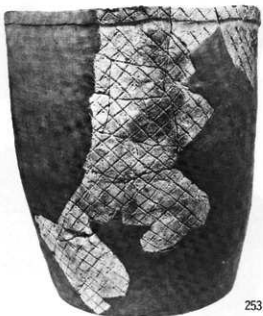
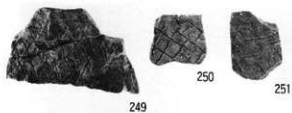


239

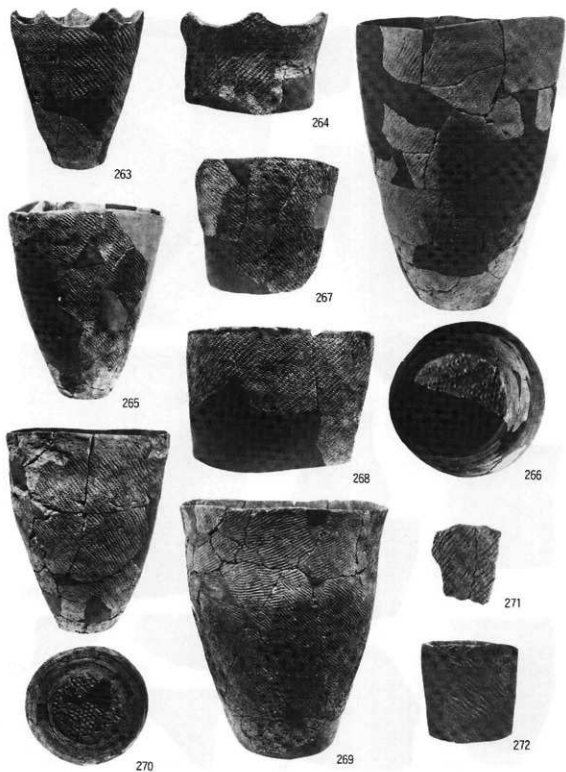
第41図 縄文土器(12)



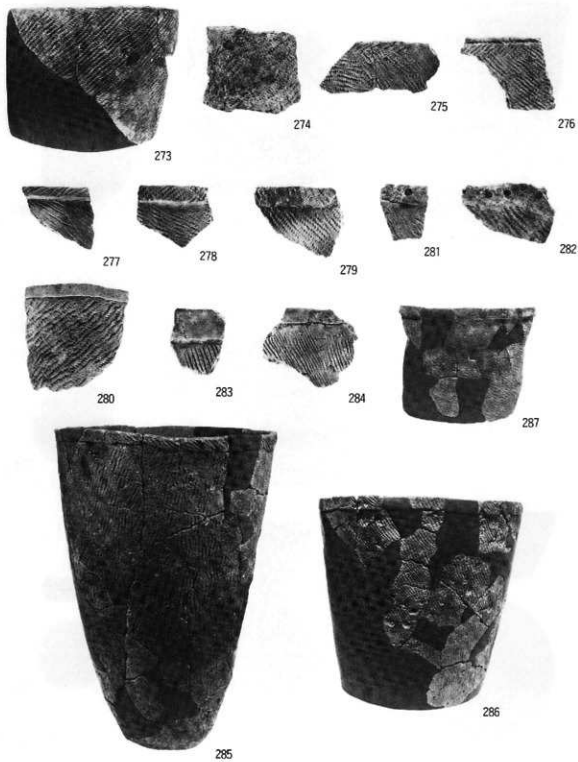
第42図 縄文土器(13)



第43図 縄文土器(14)



第44図 縄文土器(5)



第45図 縄文土器(16)



288



289



290



291



294



292

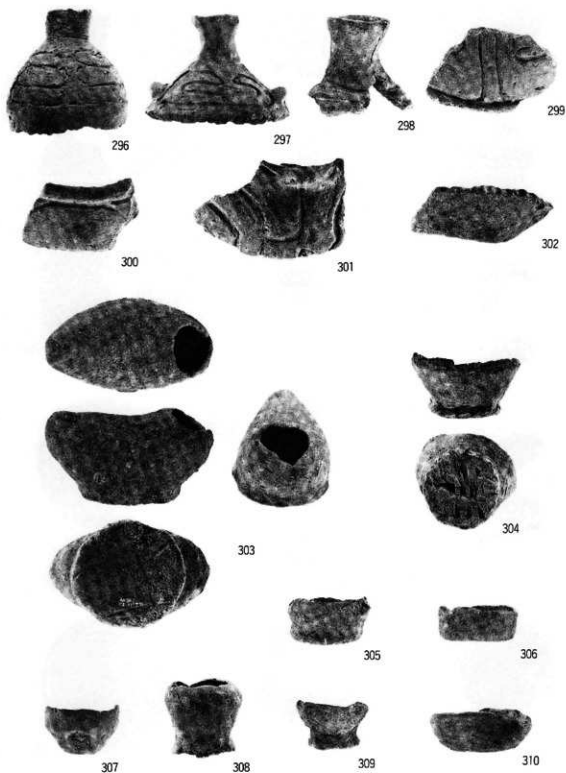


293

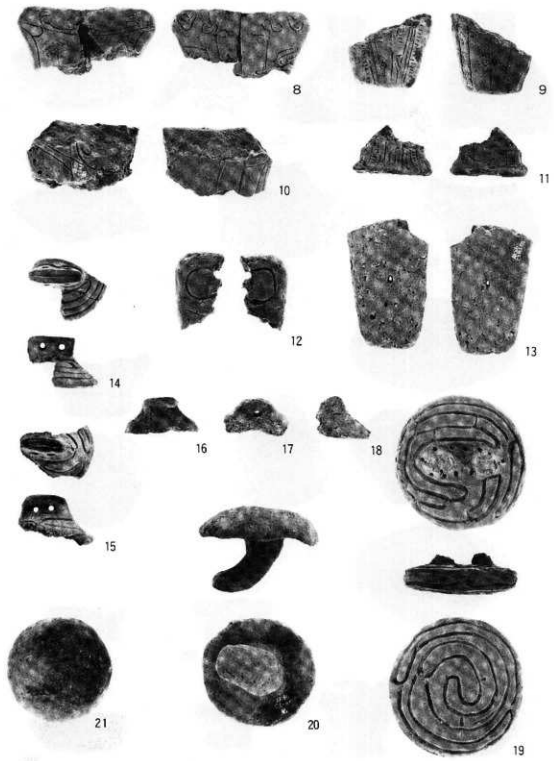


295

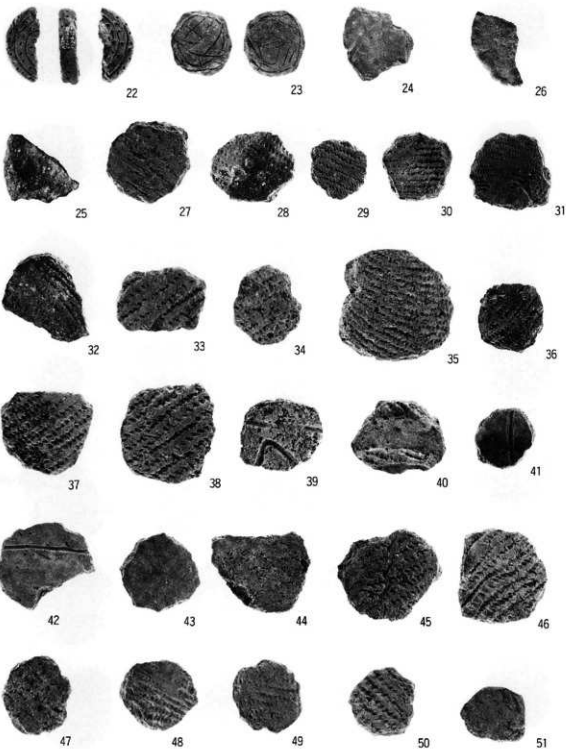
第46図 縄文土器(17)



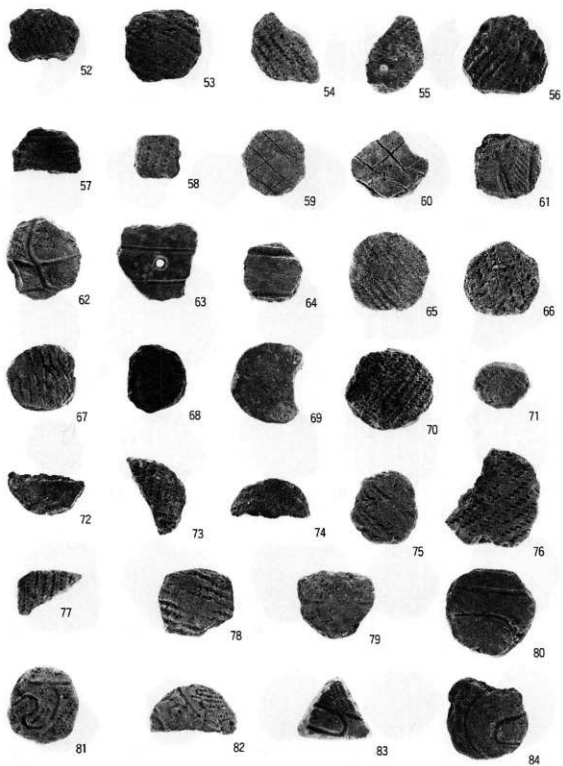
第47図 縄文土器(18)



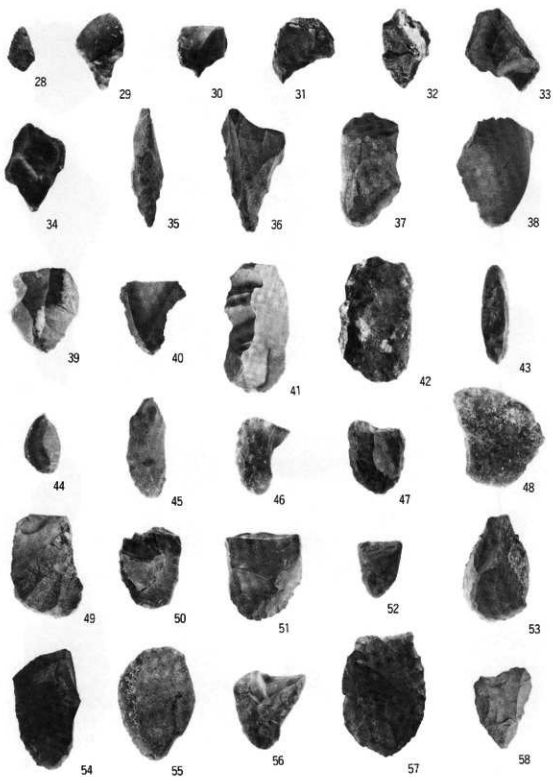
第48図 土製品(1)



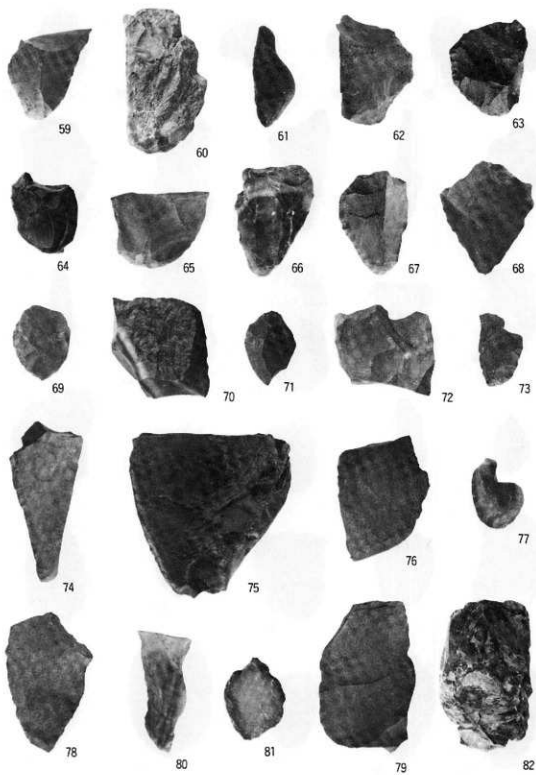
第49図 土製品(2)



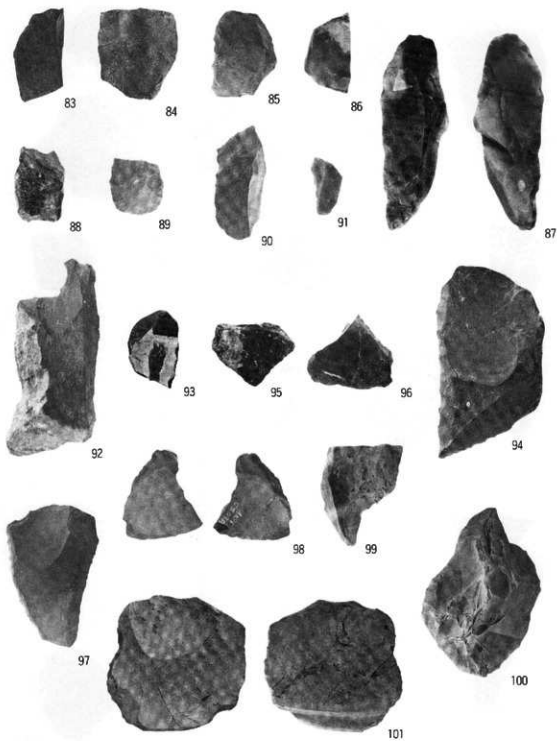
第50図 土製品(3)



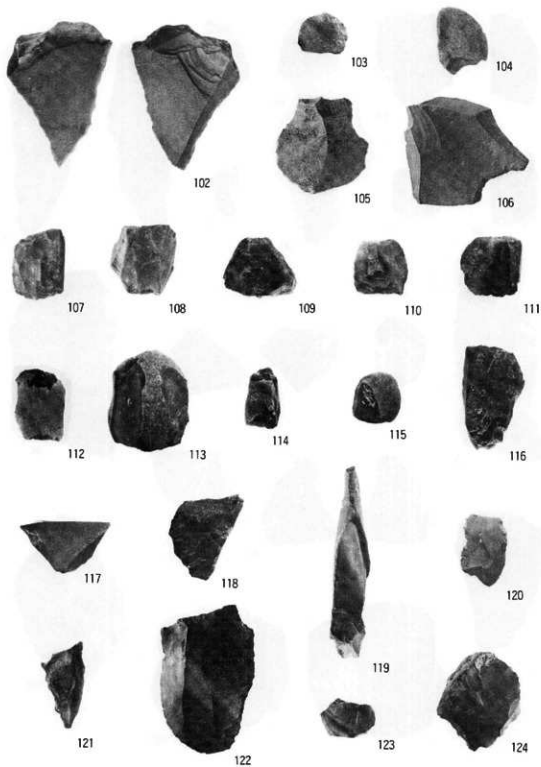
第51图 石器(1)



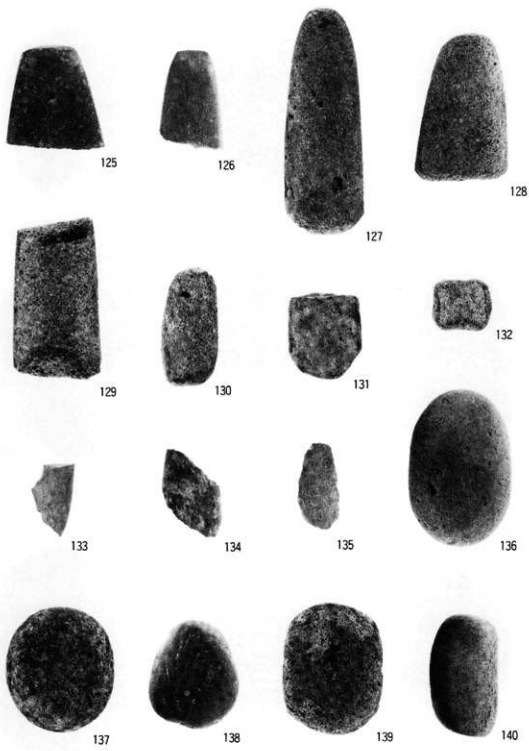
第52図 石器(2)



第53図 石器(3)



第54図 石器(4)



第55図 石器(5)



141



142



143



144



145



146



147



148



149

第56図 石器(6)



150



151



152



153



154



155



156



157



158

第57図 石器(7)



159



160



162



161



163



164



165



166

第58図 石器(8)



167



168



170



169



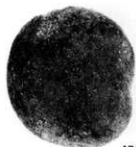
171



172



173



174

第59図 石器(9)



176



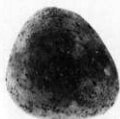
175



177



178



179



180



181



182

第60図 石器(10)



183



184



185



186



187



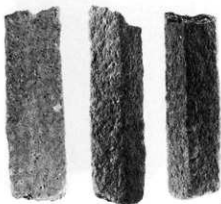
188



189



191

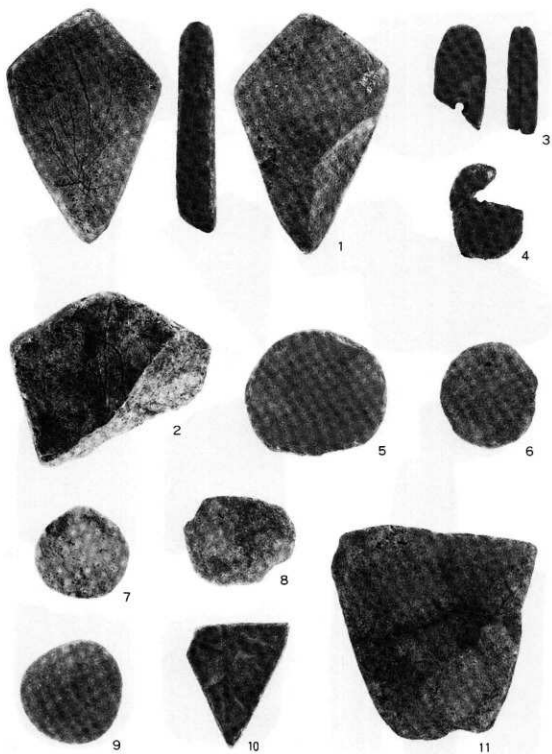


190

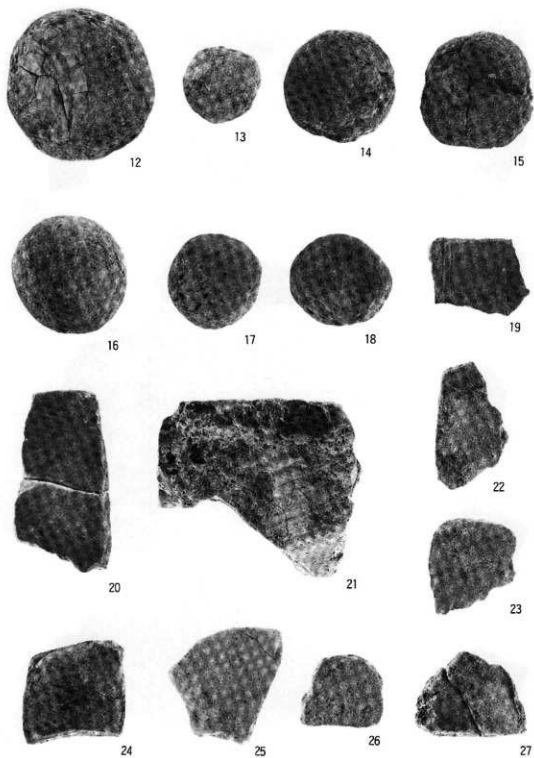


192

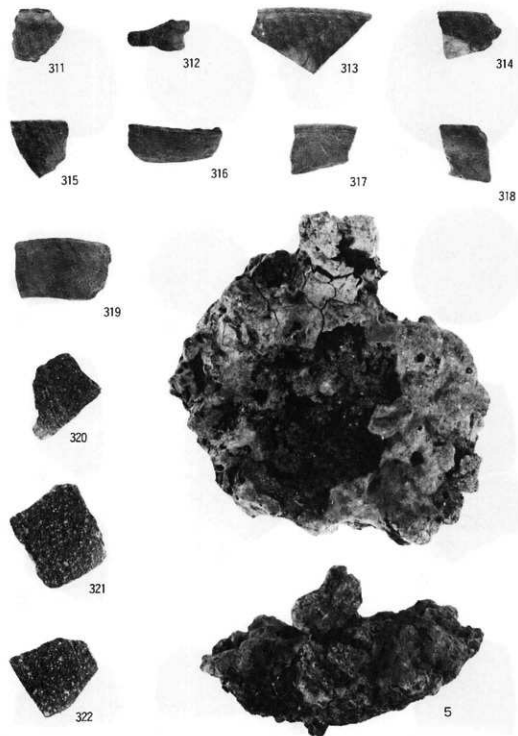
第61図 石器(I)



第62図 石製品(1)



第63図 石製品(2)



第64図 古代の遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二
副 所 長	宮 英 一

〔管 理 課〕

課 長(兼)	宮 英 一
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎
主 事	立 花 多 加 志
嘱 託	似 内 喜 兵
運転技士兼技能員	佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

課 長	昆 野 靖
主任文化財専門調査員	小 田 野 哲 憲
〃	三 浦 謙 一
〃	工 藤 利 幸
文化財専門調査員	佐 々 木 嘉 直
〃	平 井 進
〃	中 村 良 一
〃	田 村 壮 一
〃	光 井 文 行
〃	玉 川 英 喜
〃	佐 藤 嘉 広
〃	中 川 重 紀
〃	高 橋 義 介
〃	酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

課 長	新 田 和 雄
主任文化財専門調査員	高 橋 与 右 工 門
文化財専門調査員	田 鎖 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第118集

青ノ久保遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和62年12月20日

発行 昭和62年12月25日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 盛岡市厨川四丁目2番6号

電話 (0196) 41-8000